新　野　遺　跡

—真引川改修工事に伴う発掘調査報告書—

2003年３月

長野県中野建設事務所
中野市教育委員会

新　野　遺　跡

—真引川改修工事に伴う発掘調査報告書—

2003年３月

長野県中野建設事務所
中野市教育委員会

遺跡の遠景

貯蔵穴の蓋板

刊行のことば

このたび長野県中野建設事務所の委託を受け、真引川改修工事に伴う新野遺跡の発掘調査を８月19日から約３カ月かけて実施しました。新野遺跡は間山扇状地の末端に広がる大遺跡で、過去に一部の区域が調査されたことがありましたが、このときの調査では遺構等が明確に把握できませんでした。このたびの調査区域はそれに連なるものです。そして遺跡は弥生時代から古代にかけての集落跡と予想されていましたが、調査の結果、主に古代の集落跡であったことが解明されました。

本調査は社団法人中野広域シルバー人材センターに新野遺跡発掘調査団を設置していただき、中野市教育委員会の指導監督のもとに進められました。

発掘調査の結果につきましては本報告書に詳細に述べられているとおりです。遺跡は泥炭地で湧水が多く、発掘は水と泥との格闘であったといっても過言ではありません。発掘調査に参加された人たちはいずれも豊かな経験者と聞いています。困難な発掘の中で、板で蓋をした珍しい貯蔵穴も発見されました。

この発掘調査は間山扇状地の古代史を解き明かす資料を提供しました。近くにはよく知られた金鎧山古墳や高遠山古墳が所在しています。そうした歴史の事実を一つ一つ解明していくことは大切なことと思います。最後になりましたが、炎天下から秋霜の期間に行われた発掘調査、それにその後に続く整理作業と報告書の作成、これらをみごとに遂行された調査団の皆さんに深く感謝申しあげます。

中野市教育委員会

例　言

1　本書は中野市新野に所在する新野遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成14年８月18日～11月21日にわたって実施した。

3　本調査は長野県中野建設事務所の委託を受け、中野市教育委員会が（社）中野広域シルバー人材センターに委託して行った。

4　各遺構及び検出遺物の注記は、次のとおりである。

SB	住居址、
SD	溝状遺構
SX	不明遺構
SK	土壙
シ	焼土
ケ	検出遺物
集	集石、
A・B・C	
D・E・F	A～F区の検出遺物

5　調査区は、南からA～F区に分けた。

6　本文の原稿の執筆と編集は竹田保夫が行い、関孝一と中島庄一が監修した。

7　石器実測・トレースは尾澤みつ子、土屋直美、橋内賢裕、写真撮影は竹田保夫、坂口二郎が主として担当した。

8　長野県立歴史館の白沢勝彦氏には土坑蓋の保存処理で多大なご協力をいただいた。

9　野尻湖ナウマン象博物館の中村由克氏と近藤洋一氏には馬歯の鑑定でご指導いただいた。

10　本遺跡の出土遺物及び遺構図・写真等の記録資料は中野市歴史民俗資料館が保管している。

目　次

カラーグラビア
刊行のことば
　　中野市教育委員会
例　言

第１章　経過 ……1

　第１節　発掘調査前の経過 ……1
　　１　経過 ……1
　　２調査団の構成 ……1
　第２節　発掘調査経過 ……1
　　１　発掘調査日誌 ……1
　　２　整理作業 ……5

第２章　遺跡 ……6

　第１節　遺跡の位置と立地 ……6
　第２節　土層の状態 ……8
　第３節　新野遺跡周辺の遺跡 ……8
　　１　周辺の遺跡 ……8
　　２　新野遺跡関係の調査……13

第３章　遺構と遺物……18

　第１節　遺構及び遺物の概要……18
　第２節　縄文時代……18
　　１　土器……18
　　２　石器……22
　　３　新野遺跡の縄文時代……23
　第３節　弥生時代……24
　　１　遺構……24
　　２　遺物……24
　第４節　奈良・平安時代……27
　　１　住居址……27
　　２　土坑……38
　　３　焼土……40
　　４　グリッド出土の遺物……45
　第５節　近世・近代……51
　　１　掘立柱建物址……51
　　２　畝状遺構……51
　　３　井戸・排水路遺構……52

あとがき……69

挿図目次

第１図　遺跡の位置 ……6
第２図　遺跡の範囲と調査区 ……7
第３図　地層断面図 ……9
第４図　周辺の遺跡……10
第５図　平成２年出土、縄文土器……14
第６図　平成２年出土、縄文土器と石器……15
第７図　周辺の出土遺物（１）……16
第８図　周辺の出土遺物（２）……17
第９図　周辺の出土遺物・子持ち勾玉……17
第10図　遺構配置図……19
第11図　グリッド出土の縄文土器（１）……20
第12図　グリッド出土の縄文土器（２）……21
第13図　グリッド出土の縄文石器……22
第14図　第１号住居址……24
第15図　第１号住居址出土遺物……24
第16図　グリッド出土の弥生土器（１）……25
第17図　グリッド出土の弥生土器（２）……26
第18図　第２号住居址……27
第19図　第２号住居址出土遺物……28
第20図　第３・４号住居址……29
第21図　第３号住居址出土遺物（１）……30
第22図　第３号住居址出土遺物（２）……31
第23図　第４号住居址出土遺物……31
第24図　第５号住居址……32
第25図　第５号住居址出土遺物……33
第26図　第６・７号住居址……34
第27図　第６号住居址出土遺物……35
第28図　第８・９・10・11号住居址……36
第29図　第８号住居址出土遺物……37
第30図　第９号住居址出土遺物……37
第31図　遺構図・土坑……39
第32図　１号土坑出土遺物……39
第33図　遺構図・焼土……41
第34図　焼土出土遺物……43
第35図　グリッド出土遺物……46
第36図　グリッド出土遺物……47
第37図　グリッド出土遺物……48
第38図　グリッド出土遺物……49
第39図　グリッド出土遺物……50
第40図　出土遺物……50
第41図　掘立柱建物……51
第42図　畝状遺構……51
第43図　井戸・排水路……53

表目次

表１　間山・新野地区の遺跡……11
表２　昭和38年以降の間山・新野地区の発掘調査遺跡……12

写真図版目次

図版１　１　遺跡全景……56
　　２　調査区全景……56
図版２　１　金鎧山古墳遠景……57
　　２　高遠山古墳……57
図版３　１　１・５号住居址……58
　　２　２号住居址……58
図版４　１　５号住居址……59
　　２　５号住居址炭化物出土状態……59
図版５　１　５号棚状遺構……60
　　２　５号貯蔵穴の蓋板……60
図版６　１　蓋板取り上げ作業（チッソガスの注入）……61
　　２　４号住居址……61
図版７　１　６号住居址かまど……62
　　２　６号住居址かまど……62
図版８　１　４号土坑……63
　　２　畝状遺構……63
図版９　１　井戸・排水路……64
　　２　木製・排水路……64
図版10　１　作業風景……65
　　２　現地説明会……65
図版11　１　作業風景……66
　　２　作業員全体写真……66
図版12　出土遺物……67
図版13　出土遺物……68

第1章　経　過

第1節　発掘調査前の経過

1　経過

1月28日　中野建設事務所長から通常砂防事業真引川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘の通知について進達依頼がある。

2月28日　長野県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がある。

中野市6月議会で新野遺跡発掘調査の伴う発掘調査費用の予算措置をする。

7月11日　中野市長と中野建設事務所長の両者で新野遺跡発掘調査の受託契約を締結し、中野市が受託する。

工期は平成14年7月12日から平成15年3月20日とする。

8月12日　中野市長と社団法人中野広域シルバー人材センター理事長の両者で新野遺跡発掘調査の業務委託契約を締結し、中野広域シルバーセンターへ発掘調査の委託をする。

工期は平成14年8月13日から平成15年3月20日とする。

2　調査団の構成

参与　中野市教育委員会

教育次長	武田　良平
生涯学習課長	高野　澄江
同　課長補佐	武田　貞治
同　文化財係長	中島　庄一
同　指導主事	安藤　照治

事務局　㈳中野広域シルバー人材センター

理事長	谷本　利夫
事務局長	山田　実男
庶務経理主任	池田　八重子
業務主任	池田　徹
業務担当	西原　健太郎

調査団長	関　孝一
調査主任	竹田　保夫
調査員	関　武
調査補助員	尾澤　みつ子
	橋内　賢裕
	樋口　昌良
	山崎　和人

発掘作業員

畔上三子男　畔上ちよ子　池田良高
坂口二郎　鈴木金三　塩島長子
田河正文　竹節行治　徳永徳一
富岡栄康　中島守利　中林喜一
西山茂三　堀川　章　水野和夫
宮崎光平　武藤良助　村上　治
山崎秋雄　山本直治　横田六三郎

整理作業員

芋川純子　笠松宏之　金井美知子
小林敦子　関　志穂美　田中佐知子
土屋直美　徳武めぐみ　古川直美
坂口二郎

第2節　発掘調査の経過

1　発掘調査日誌

8月2日　　10時から調査区の範囲確認のため現場立会を行う。

8月13日　　コンテナハウス、トイレを搬入する。

8月19日（月曜日）晴れ

中野市歴史民俗資料館で備品．器材の確認をする。午後、調査区東側から重機を用いて、表土剥ぎを開始する。

午後4時、中野広域シルバー人材センター事務局2階で結団式を行う。

８月20日（火曜日）曇り時々雨

８時半より現場において開所式を行う。終了後、器材を搬入する。

重機による遺物包含層の確認を行う。

東側調査区で井戸と排水遺構を検出する。

標高のベンチマークを５箇所設置する。

８月21日（水曜日）晴れ一時雨のち曇り

調査区は６面の圃場整備による段丘面からなり、南からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区とする。

重機を用いてＡ区西側の表土剥ぎを行う。

８月22日（木曜日）曇りのち晴れ

井戸と排水遺構の実測を行う。トレンチによる断面の観察を行う。

８月23日（金曜日）曇り

排水遺構の実測と写真撮影を行う。

Ｂ区のトレンチから中世と思われる炉址を検出する。さらにその下から櫛描文土器が出土し、焦土帯も検出される。土師器と一緒に縄文時代の竹管文土器が出土する。

排水遺構に用いられた平板を検出する。

Ａ地区西側寄りの黒色土直上に河砂の畝状遺構を検出する。

８月26日（月）晴れ

青銅器が出土する。

Ａ区の５層上面で遺構の検出作業を行う。

排水遺構北側石組を取り除く。

石組の排水遺構直下に、杭止めの板と対になる板が検出される。

８月27日（火）　晴れ

井戸と排水遺構の実測を行う。Ａ区で遺構の検出作業を行う。

８月28日（水）　晴れ

Ｂ区でトレンチによる遺構の検出作業を行う。

重機を用いてＡ地区の南側を５層まで掘り下げる。

８月29日（木）　晴れ

Ｂ区の遺構検出を行う。重機を用いてＡ区を掘り下げる。

枝を束ねた暗渠が調査区中央の斜面に沿って南から北に向かっているのを確認する。畝が南西から北東にかけて検出される。

８月30日（金）晴れ

Ｂ区の遺構検出作業を行う。

管玉が出土する。

８月31日（土）晴れ

重機を用いて、Ａ区北側の表土剥ぎを行う。

住居址２軒を検出する。

９月２日（月）晴れ

工程会議を行う。関調査団長、中島・安藤参与、山田事務局長、事務局池田・西原、調査主任竹田の６名が主席する。

重機を用いてＡ区を掘り下げる。Ｃ区からＤ区、Ｅ区、Ｆ区にトレンチを設定する。

Ｂ区の遺構検出作業を行う。住居址と思われる２軒の遺構と焼土のブロックを検出する。小型甕が出土する。

９月３日（火）晴れ

南北にトレンチを２本、東西に３本設定し、遺構の検出を行う。

Ｅ区のトレンチから縄文土器と弥生土器が出土する。

９月４日（水）晴れ

Ｄ区のトレンチから土師器と須恵器が出土する。

９月５日（木）晴れ

１・２号住居址を床面まで発掘し、土器の取り上げを行う。

Ｂ区の遺構検出作業を行う。

９月６日（金）曇りのち雨

Ｂ区の遺構検出作業を行う。

９月９日（月）曇り一時晴れ

第２回工程会議を行う。調査団長関、中島・安藤参与、事務局池田・西原、調査主任竹田の６名が出席する。

２号住居址の検出作業を行う。

９月10日（火）晴れ

１号住居址にセクションベルトを設け掘り下げる。

Ｂ区の東側トレンチから遺構検出作業を行う。

Ａ区とＢ区との間に地層断面を確認するため、重機でトレンチを設定する。

沈線文土器片が一点出土する。

9月11日（水）晴れ

1号住居址の床面と思われる下から古墳時代の土師器が出土する。住居址内のセクションは上から焦土帯、炭を含む層、炭がまばらに含まれる層、貼り床と思われる粒子を含む層に分かれる。

9月12日（木）晴れのち曇り

1号住居址の調査を終了し、A区の調査を完了する。

今日から土運搬のクロラーダンプが稼動する。

9月13日（金）曇りのち雨

B区の全体を掘り下げ、遺構の検出作業を行う。

不明遺構1・2の検出作業を行う。セクションベルトを設定し炭と焦土の層を発掘する。かまどが検出される。

棒状取手を持つ土師器とその横に灰色粘土魂を含む土坑が検出される。

9月17日（火）雨

雨のため作業を中止する。重機を用いて湧水の排水路を整備する。

9月18日（水）曇り一時晴れ

B区の全体を掘り下げる。焼土No.4～9を検出する。

不明遺構1を完掘する。集石1の土器を取り上げる。

9月19日（木）晴れ

B区の遺構発掘作業を行う。不明遺構3を検出する。

9月20日（金）晴れ

B区の遺構検出作業を行う。

焼土No.11を検出する。

土坑、柱穴、溝状遺構を完掘する。

9月21日（土）晴れ

重機とクロラーダンプによる残土の片付けを行う。

9月24日（火）晴れ

不明遺構3にベルトを設けて焦土と炭を含む土層を発掘する。焦土No.11のかまどを掘り下げる。

9月25日（水）曇りのち晴れ

不明遺構3を完掘する。焼土No.8・9を掘り下げる。

9月26日（木）晴れ

焦土No.8．9を掘り下げる。

焦土No.11を完掘する。

重機を用いてC区を10層の泥炭層まで掘り下げる。甕の口縁部で隆帯が施されている縄文土器が出土する。

9月27日（金）曇り一時晴れ

不明遺構3の床面と思われる面から焦土帯と黄色粒子を含む粘土を検出する。

焦土No.9を掘り下げる。

B区を掘り下げる。鉄製品と鏡片と思われる金属片が出土する。

10月2日（水）晴れ

不明遺構3を掘り下げる。焼土No.9の検出を行う。C区の泥炭層内の遺物を検出する。

10月3日（木）晴れ

泥炭層は2層に分層でき、縄文時代と思われていた下層から須恵器・土師器などが出土する。

不明遺構3の焦土帯と黄色い粒子を含む硬質な褐色土を検出する。

焦土No.6・8を掘り進める。

C区の泥炭層内の遺物検出を行う。

10月4日（金）晴れ

焦土No.6を完掘する。かまどを築く際、砂を敷き詰めた様子がうかがえる。

不明遺構4を掘り下げる。

C区泥炭層内の遺物の検出を行う。

重機を用いてD区の表土剥ぎを行い、つづいてA区北側を発掘する。

A区から焼土のブロックを検出する。

重機でB区南側を泥炭層まで掘り下げる。

10月5日（土）晴れ

重機でE区に湧水の排水路を作る。

10月7日（月）雨のち曇りのち晴れ

雨のため午前中は、土器洗いを行う。

D区から柱穴状遺構を2基検出する。砂質黒色泥炭層から内黒土師器、獣骨、木片が出土する。

10月8日（火）曇りのち雨

A区とB区を掘り下げる。

７号住居址のプランを検出する。

雨のため午後から土器洗いを行う。

Ｄ区の砂礫を含む泥炭層に内黒土師器が出土する。

10月９日（水）曇り

７号住居址から甕が完形で出土する。

Ｄ区を重機で掘り下げる。泥炭層から土器片が出土する。

午前中は土器洗いを行う。

10月10日（木）晴れたり曇ったり

７号住居址の調査を進める。覆土に粘土魂をもつ遺構が検出する。

10月11日（金）晴れ

７号住居址の発掘を進める。

Ａ区で住居址のプランが一部見え始める。焦土帯の周囲より古墳時代と思われる土師器が集中して確認される。

10月13日（日）晴れ

現地説明会を行う。中島庄一参与が説明する。

10月15日（火）晴れ

７号住居址の調査を行う。

土器が集中する焼土№５、６、18の遺物を取り上げる。

重機による掘り下げを行う。礫を含む泥炭層から土師器が出土する。

10月16日（水）曇りのち晴れ

午前中、土器洗いを行う。７号住居址を掘り下げる。Ａ区の遺構検出を行う。

10月17日（木）晴れ

Ｆ区にトレンチを設定する。

７号住居址の調査を終了する。

焼土№17・18、集石№７の土器取り上げる。

10月18日（金）晴れ

Ａ区の遺構検出を行う。Ｄ区の泥炭層で遺物の検出作業を行う。

10月21日（月）雨

雨のため作業を中止する。

10月22日（火）曇り

第３回工程会議を行う。関調査団長、中島・安藤参与、事務局池田・西原、調査主任竹田の６名が出席する。

午前中は土器洗いを行う。焼土№23～25を検出する。

10月23日（水）晴れ

Ａ区を掘り下げる。

10月24日（木）晴れ

Ｂ区で泥炭層内の遺物を検出する。東壁面の遺物を取り上げる。

10月25日（金）晴れ

９号住居址を検出する。焼土№23を掘り下げる。

Ｅ区の泥炭層から加工痕のある木材が出土する。

10月28日（月）晴れ一時曇り

９号住居址を掘り下げる。焦土帯の西側に円形の落ち込みを検出する。

不明遺構10の確認作業を行う。

10月29日（火）雨のち曇り

雨のため終日土器洗いを行う。

10月30日（水）曇り

不明遺構９と９号住居址の全体を下げる。焼土Ａ、焼土Ｂの検出作業を行う。

Ｅ区、Ｄ区泥炭層の遺物の検出作業を行う。

10月31日（木）晴れ

９号住居址の全体を掘り下げ、柱穴を完掘する。

Ｅ区・Ｄ区で泥炭層で遺物の検出作業を行う。

11月１日（金）曇り一時雨

焼土Ｂブロックを残して９号住居址を掘り下げる。

Ｅ区・Ｂ区の泥炭層で遺物の検出作業を行う。

午後から土器洗いを行う。

11月５日（火）曇り一時雨

第４回工程会議を行う。関調査団長、中島・安藤参与、事務局池田・西原、調査主任竹田の６名が出席する。

９号住居址の床面直上から縄文時代の打製石斧が出土する。

11月６日（水）晴れ一時曇り

９号住居址のかまどの東側に４枚の平板を蓋にした貯蔵穴が検出される。

Ｄ区・Ｅ区の泥炭層で遺物の検出作業を行う。

11月７日（木）晴れ

報道の取材がある。貯蔵穴の蓋４枚のうち、北側から２枚目の蓋板にほぞ穴を確認する。

11月８日（金）晴れのち曇り

９号住居址のかまどに断面を設定し、発掘する。

午前中Ｄ・Ｃ区で遺物の検出作業を行う。午後から土器洗いを行う。

11月11日（月）晴れ

９号住居址の貯蔵穴の蓋板は炭化してもろく、保存のため液体樹脂を注入する作業を行う。

土器洗いを並行して行う。

11月12日（火）雨のち曇り

土器洗いを行う。

９号住居址のかまどを完掘する。住居址内の２つの土壙を全掘する。10号住居址の床面を検出する。

11月13日（水）曇り時々晴れ

長野県歴史館の白沢勝彦氏らが貯蔵穴の蓋の保存処理のために来る。蓋板を取り上げる。

土器洗いを行う。

11月14日（木）晴れ

貯蔵穴を完掘する。10号住居址を掘り下げる。

11月15日（金）晴れ

住居址内から櫛描文が施された甕と赤色塗彩された土器が出土する。住居址内の出土と思われる。

不明遺構11・12を完掘し、現場での発掘作業はすべて終了する。土器洗いを行う。

11月18日（月）晴れ一時曇り

土器洗いを行う。

泥炭層から出土した一部藍鉄鋼化した草食動物の歯の鑑定を、野尻湖ナウマン象博物館の中村由克氏と近藤洋一氏に依頼する。馬歯と判明する。

11月19日（火）晴れ

土器洗いを行う。

11月20日（水）晴れ

午前中、土器洗いを行う、午後から器材の撤収を行う。現場作業はすべて終了する。

11月21日（木）

中野市歴史民俗資料館で器材の整理を行う。

11月22日（金）

整理作業を始める。

11月26日（火）

新野公民館において中野市教育委員会主催による発掘調査報告会を行う。出席者は40名、主催者側から高野澄江生涯学習課長、中島・安藤参与、関調査団長、竹田調査主任、関調査員、橋内調査補助員が出席する。

２　整理作業

整理作業は11月22日～２月28日まで行う。

土器洗いは現場作業と平行して行い11月25日に終了する。引き続きシルバー人材センター会議室を作業所とし、注記を行う。１月31日に終了。

遺構・地層の第二原図は11月22日～２月28日に、遺物修復、遺物実測、トレースはそれぞれ並行して行い２月28日に終了した。

遺構．遺物の考察も図版作りと並行して行い、２月28日に終了した。

印刷は３月４日に入稿、以降は校正と平行して、遺物及び記録資料の残務整理を行う。

作業風景（１）

（２）

第2章　遺　跡

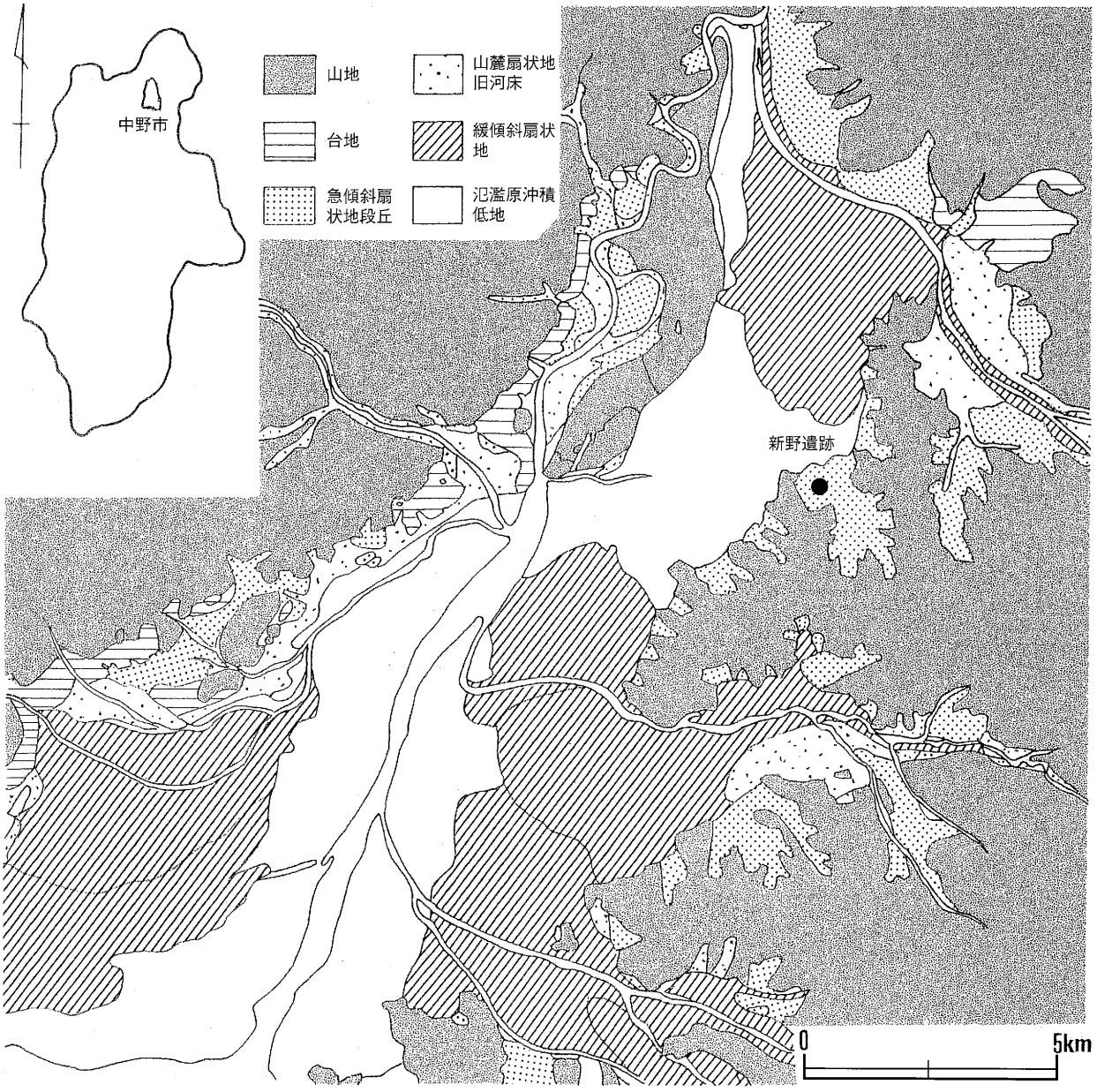
第1節　遺跡の位置と立地

新野遺跡は北緯36° 43′ 14.53″ 東経138° 22′ 32.11″ 標高348mに位置し、中野市新野字宮下461-1 ～ 479-3に所在する。

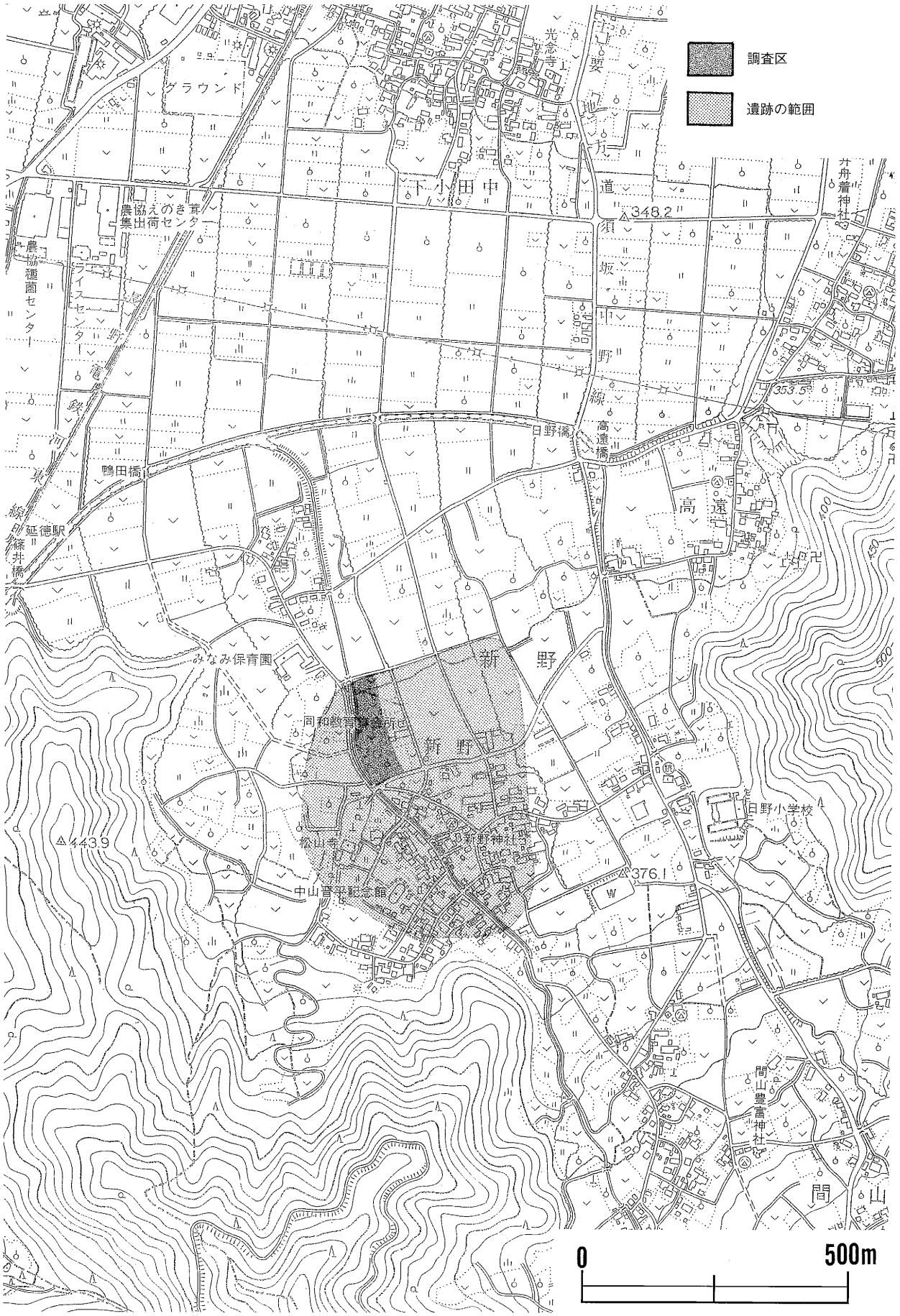
中野市は長野盆地の北部にあって、長軸40km、短軸10kmの紡錘形をしている。中野市の北側は高井富士と呼ばれる1,351・5mの高杜山がそびえ、夜間瀬川による中野扇状地が開けている。中野市の南端は千曲川の後背湿地にあたり、延徳沖とよばれる水田地帯が広がり、小布施町と境を接している。西には西部山地からなり一部に高丘・長丘丘陵を配する。

東側は、箱山から雁田山を南北に結ぶ東山山系が上信越県境の高峻な山岳地帯に連なり東縁をなしている。

新野遺跡はこの東縁に形成された間山扇状地に所在している。扇状地は西面し、道灌山を水源とする十二川と真引川によって形成されたものである。十二川と真引川は扇状地末端で篠井川に合流し、西流して千曲川に注いでいる。



第1図　遺跡の位置



第２図　遺跡の範囲と調査区

間山扇状地の地形は中野扇状地ほど奥行きがなく、山間地の地滑りや山崩れによって、急斜面になっている。そのうえ、扇頂・扇央・扇端の特徴が区別しにくい複雑な地形も部分的にみられる。例えば新野遺跡であるが、その大部分は扇端部に広がる大遺跡である。しかし今回の発掘調査によれば、不透水層の泥炭層は扇央部にも堆積し、地下水は伏流せず、豊富な湧水がみられた。扇状地のすべてにわたって調査したわけではないので、あるいは発掘地域の真引川にそった特別な地層状態かもしれない。

第２節　土層の状態

真引川にそって行われた発掘調査は、上流からＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区・Ｆ区の調査区に分けた。発掘調査の結果、真引川は蛇行をくりかえし、湿地の葦などによる泥炭層が広範囲に形成されていた。かつての真引川跡をみると、第10図のとおりで、Ａ区南側の東から蛇行し、Ａ区西側の調査区外で弧をえがき、Ｂ区を横切って東側の調査区外に延びていた。その蛇行した河畔で、舌状の微高地に弥生時代後期から古代の住居址が認められた。

次に調査区の土層状態をみると、Ａ区・Ｂ区では現代から泥炭層にいたるまでたびたびの洪水がくりかえされ何層もの水成層が観察できた。

調査区南端第３図№１・２地点では遺物包含層はなかった。第３図№３地点では弥生時代の文化層下層に洪水跡の層を挟んで９層（泥炭層）があり、Ｂ区Ｃ－17グリットまで続き消える。９層（泥炭層）には流れ込みと思われる縄文時代中期の土器片が数点出土していた。この泥炭層の形成時期は弥生時代後期以前から縄文時代中期まで遡ると考えられる。

Ｂ区Ｃ－17グリット下流、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区では圃場整備事業による撹乱が泥炭層にまでおよんでいた。泥炭層は第３図№５・７地点で観察できるように何層にも堆積していた。第３図№５地点、４層では水田跡が検出され、６、９層では土師器、須恵器、弥生及び縄文土器が混在して出土していた。その上下に洪水や土石流による堆積層が確認できた。

Ａ・Ｂ区で確認した９層（泥炭層）は形成時期が比較的新しく、４層は近代、６層は弥生時代までは遡らないと考える。泥炭層は下流へ行くにしたがい厚みを増し、Ｆ区では洪水や土石流による複雑な地層の堆積状態がさらに複雑になる。遺物の出土はなかった。

第３節　新野遺跡の周辺の遺跡

１　周辺の遺跡

新野遺跡の周辺にはいくつかの遺跡が発見されている（第１表）。そのうち、発掘調査が行なわれた遺跡は５個所ある（第２表）。そこで、本遺跡の歴史的な背景を考える上で必要と思われる遺跡の概略について触れておきたい。

新野上東遺跡

本遺跡から北東方向に約500ｍ離れた遺跡で、新野遺跡と一連のものである。昭和58年、日野小学校のグランド造成工事に伴う発掘調査が実施された。詳細は不明であるが、土師器、須恵器が認められたという。遺物量は少ない。

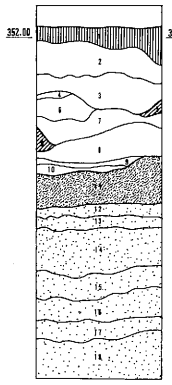
間山遺跡

本遺跡の上流、間山扇状地の扇央に位置する大きな遺跡で、道路の拡幅改良工事に伴い三次にわたる発掘調査が実施された。主に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落跡が確認されている。

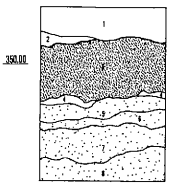
新野遺跡では古墳時代前期の遺物が確認されているが、間山遺跡では古墳時代の初頭以後、集落が営まれた痕跡がない。新野遺跡へと集落を移動させた可能性も否定できない。

高遠山古墳

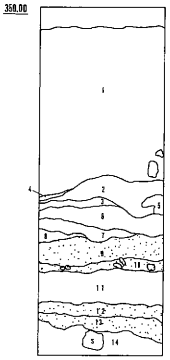
遺跡の北方、約900ｍはなれた間山扇状地の北を画す尾根の先端に位置する。平成９年から平成11年にかけて、宅地造成に伴う発掘調査が実施された古墳時代前期初頭の前方後円墳である。



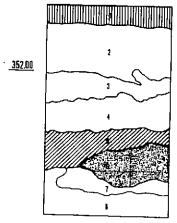
No.7
1．表土
2．茶褐色土
3．暗灰褐色土
4．３に礫混じり
5．黒色泥炭層砂礫（須恵器包含層、田んぼ跡）
6．明黒色土
7．砂礫層茶褐色
8．緑灰色砂礫
9．灰色砂礫
10．黄灰色礫層
11．黒色泥炭層粘質
12．黒色泥炭層に礫混じる
13．黒灰色層粘質
14．暗黒灰色層粘質
15．暗灰色層粘質
16．黒色礫層
17．灰色層粘質
18．明灰色層粘質



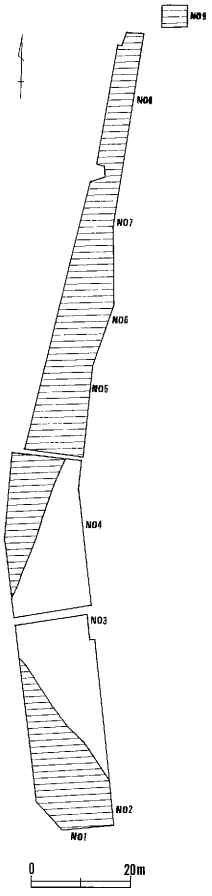
No.8
1．圃場整備撹乱
2．灰青色土層
3．黒色泥炭層
4．灰白色土層
5．黒色泥炭層
6．黒色泥炭層砂が混じる
7．黒色泥炭層砂礫が混じる
8．砂礫泥炭層

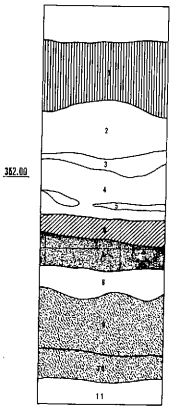


No.9
1．圃場整備撹乱
2．白灰色土層
3．白灰色土層砂質
4．酸化鉄水成層
5．紫灰色土層橙色ブロックが斑に入る
6．灰黒土層砂質
7．灰黒土層砂質強
8．灰黒砂層
9．黒色泥炭層
10．灰色土層に礫が混じる
11．灰色砂層
12．黒色泥炭層
13．黒灰色土層
14．黒色礫層

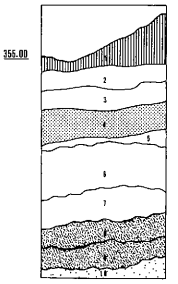


No.6
1．耕作土
2．黄茶色土層
3．暗灰褐色土層
4．黒褐色土層
5．黒色泥炭層
6．茶褐色土層
7．黄灰色泥炭層
8．青灰色泥炭層

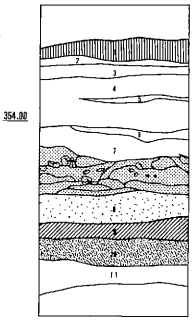




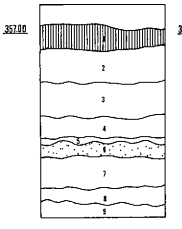
No.5
1．表土
2．暗褐色土礫層
3．橙黄茶色砂層
4．灰色泥炭層（草木など植物を含む）
5．青灰色砂層
6．黒色泥炭層砂質（奈良、古墳時代の遺物を包含）
7．黒色泥炭層に礫が混じる
8．茶黄色砂礫層
9．黒色泥炭層
10．灰黒色泥炭層（遺物包含）
11．灰色砂礫層



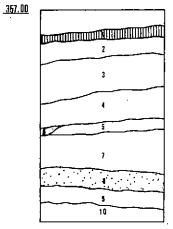
No.3
1．耕作土
2．黄色砂礫層
3．灰黒礫層
4．黒褐色土層
5．黒褐色層砂質
6．暗灰褐色土層
7．黄色土に黒色土層が薄く入る
8．黒色泥炭層
9．黒灰色泥炭層（縄文土器包含層）
10．黒色礫層



No.4
1．耕作土
2．暗茶褐色土層
3．暗褐色砂礫層
4．黒褐色土層
5．黒褐色土に小礫を含む
6．黒褐色土に焼土粒、炭化物が混じる
7．明灰褐色土層
8．明灰褐色土層に礫が混じる
9．黄色土層
10．黒色泥炭層
11．黒灰色泥炭層
12．茶色礫層



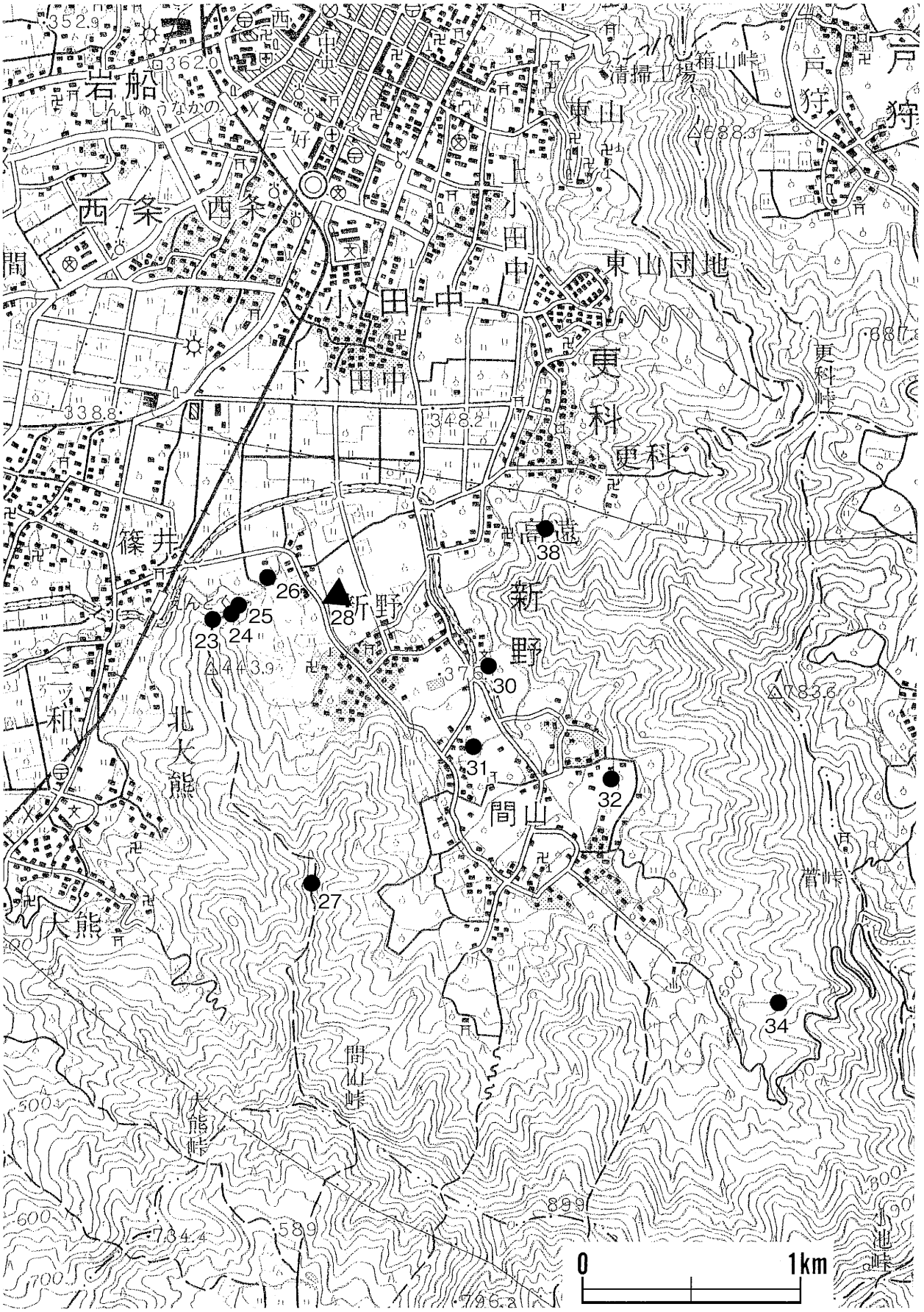
No.1
1．表土
2．黄色砂礫層
3．灰黒礫層
4．赤褐色礫層
5．灰褐色砂礫層
6．黒色泥炭層
7．赤褐色砂瓦層
8．灰色粘土層
9．茶褐色礫層



No.2
1．表土
2．黄色砂礫層
3．灰黒礫層
4．橙褐色砂礫層
5．黒色泥炭層
6．黒色礫層
7．赤褐色礫層
8．黒色泥炭層
9．赤褐色礫層
10．茶褐色礫層

1層　耕作土
2層　黒褐色土層（奈良・平安文化層）
3層　黒色泥炭層硬質（土師器・須恵器包含層）
4層　黒色泥炭層砂礫（土師器・須恵器包含層）
5層　黒色泥炭層（土師器・弥生・縄文土器包含層）
6層　黒色泥炭層（遺物を含まない）

第３図　地層断面図



岩船
西条
西条
三好
小田中
上小田中
下小田中
東山
東山団地
清掃工場
箱山峠
戸狩
戸狩
更科
更科
更科峠
高遠
新野
新野
篠井
北大熊
大熊
間山
間山峠
大熊峠
菅峠
小池峠
23
24
25
26
27
28
30
31
32
34
38
0
1km

第４図　周辺の遺跡

（表１）間山・新野地区の遺跡　　『中野市遺跡詳細分布図』中野市教育委員会1985年より

番号	県番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	所蔵者	調査の有無
23	7918	金鎧山古墳	新野・金鎧山	山頂	（古）円墳（径21m、高2.6m） 合掌型石室 珠文鏡、五鈴鏡、勾玉３、管玉１、丸玉90、白玉36、貝輪１、剣３、直刀５、矛２、鏃250、斧頭１、鋸２、砥石、環鈴、鉸具、留金具、土師器、須恵器、人骨	3.4.5	東京国立博物館、松山寺、市指定史跡	有（大正14年）
24		新野１号古墳	新野・金鎧山	山麓	（古）円墳（径16m、高2.5m）			
25		新野２号古墳	新野・金鎧山	山麓	（古）円墳（径13m、高2.5m）			
26	9831	行人塚遺跡	新野・行人塚、立道、金山		（平）須恵器			
27		小曾崖城跡	新野・西山、後山、竜宮山、簇坑山	山頂	（中）青磁器、黒釉、白釉、陶器、古銭、染付	1 72	檀原長則、本藤秀明	
28	6539	新野遺跡	新野・前田、日野岡、宮上、宮下ほか	扇状地	（縄）中期土器、石鏃、打石斧、磨石斧、石匙、石錐、石皿、石棒、 （平）土師器、須恵器	4		
30	9832	新野上東遺跡	新野・上東、溜池下	扇状地	（平）土師器、須恵器 （中）内耳土器			有（昭和58年）
31	6540	間山遺跡	間山・津島、石堂道下、宮前、宮下、森下ほか	扇状地	（縄）前期土器、石鏃、打石斧、磨石斧、石匙、石錐、敲石、磨石、環石ほか （弥）後期土器、太形蛤刃形石斧、石槌、合口甕棺 （古）土師器、灰釉陶器、管状土錘、鉄斧、住居址３古銭	4.6.7.8. 75 80	日野小学校、鈴木加奈登、酒井庄市原沢邦男原沢邦男	有（昭和33.58年）
32	6541	岸梨遺跡	間山・岸梨、清水畑	山麓	（平）土師器			有（昭和54年）
34	7872	建応寺跡	間山・建応、南向平	山腹	（平）土師器、堂址５、湧水地１、土塁、塚、灰釉 （中）陶器（珠洲、青磁、白磁）、砥石、宋銭、懸仏、石臼、五輪塔	中野市教育委員会、市指定史跡	中野市教育委員会、市指定史跡	有（昭和54.57.58年）
38		高遠山古墳	新野・磊滝山、古屋敷	山頂	（古）前方後円墳（全長55m、前方幅18m、高4.5m、後方径30m、高5.5m）			有（平成９.11年）

文献一覧

1　長野県教育委員会　　1983　『長野県の中世城館跡』
3　岩崎長思　　1926　『金鎧山古墳』（県史蹟　報告５）
4　長野県教育委員会　　1953　『下高井』
5　森本六爾　　1926　『金鎧山古墳の研究』
6　桐原健　　1953　『信濃国間山発見の合口甕棺』（上代文化24）
7　桐原健　　1958　『長野県中野市間山石動下遺跡調査予報』（信濃Ⅲ10―２）
8　中野市教育委員会　　1984　『間山』
9　中野市教育委員会　　1983　『建応寺跡の調査』（高井62）
72　小林秀夫・檀原長則　　1983　『長野県小曾崖城跡出土の元青花』（貿易陶磁研究）
75　檀原長則　　1982　『中野市間山発見の八陵鏡について』（高井73）
80　中野市教育委員会　　1984　『間山－間山遺跡緊急発掘調査報告書』

（表２）　昭和38年以降の間山・新野地区の発掘調査遺跡　『平成11年中野市教育要覧』より

年度	調　査　遺　跡	所在地
昭和52	間山建応寺跡確認調査	間　山
昭和53	間山建応寺跡発掘調査（１次）	間　山
昭和54	岸梨遺跡緊急分布調査	間　山
昭和54	間山建応寺跡発掘調査（２次）	間　山
昭和56	新野上東遺跡緊急分布調査	新　野
昭和57	間山建応寺跡発掘調査（３次）	間　山
昭和58	新野上東遺跡（日野小学校グランド造成）	新　野
昭和58	間山遺跡（県道拡幅）	間　山
平成２	新野遺跡（道路改良事業）	新　野
平成３	間山遺跡（道路改良事業）	間　山
平成４	間山遺跡（道路改良事業）	間　山

この古墳の存在は、新野地籍や間山地籍の歴史的な脈絡を考えるうえで無視しできない。少なくとも、新野地籍や間山地籍の古代の集落がこの古墳の築造をささえたと考えることができるからである。

金鎧山古墳

間山扇状地の南側を画する尾根上にある円墳古墳である。大正14年、本藤文明氏らが中心となって、石室を開口させ、五鈴鏡など多くの遺物が発見された。後に森本六爾等が再調査している。６世紀の古墳と考えられている。この古墳の築造を支えた集落は、やはり間山扇状地に存在したと考えられる。平成２年の調査時に確認された土師器などを考慮すれば、新野遺跡とも無関係とは思えない。

今回の新野遺跡の際に表面を清掃したところ、葺石が確認された。この地域を代表する６世紀代の古墳で、市指定史跡になっている。

建応寺跡

間山扇状地を形成した真引川の源流、雲井嶽の中腹に位置する。礎石建物が１件調査されているが周囲には平坦面（段きり）が３個所あり、いずれも建物があったと考えられる。

建物址の調査の際に発見された遺物からみて、古代末に建立され、中世までいとなまれていたと考えられる。

また、間山扇状地や、山中には「石道坊」、「鳥道坊」、「社光坊」、「三光坊」、「達生坊」、「善忍坊」、「道光坊」、「阿光坊」、「安心坊」、「丹心坊」、「武道坊」、「南光坊」といった「坊」を思わせる地名が残っている。古代末から中世にかけて山岳修現の地となっていたことが考えられる。

このように、新野や間山地籍の間山扇状地は、東日本最古の前方後円墳である高遠山古墳や、金鎧山古墳、あるいは建応寺に代表されるように、常に脚光を浴びる特異な歴史的脈絡を有している。新野遺跡もこうした歴史的脈絡を背景にした遺跡であると同時にその歴史的な脈絡を構成する大切な遺跡であるといえよう。

２　新野遺跡関係の調査

道路拡幅工事に伴う発掘調査

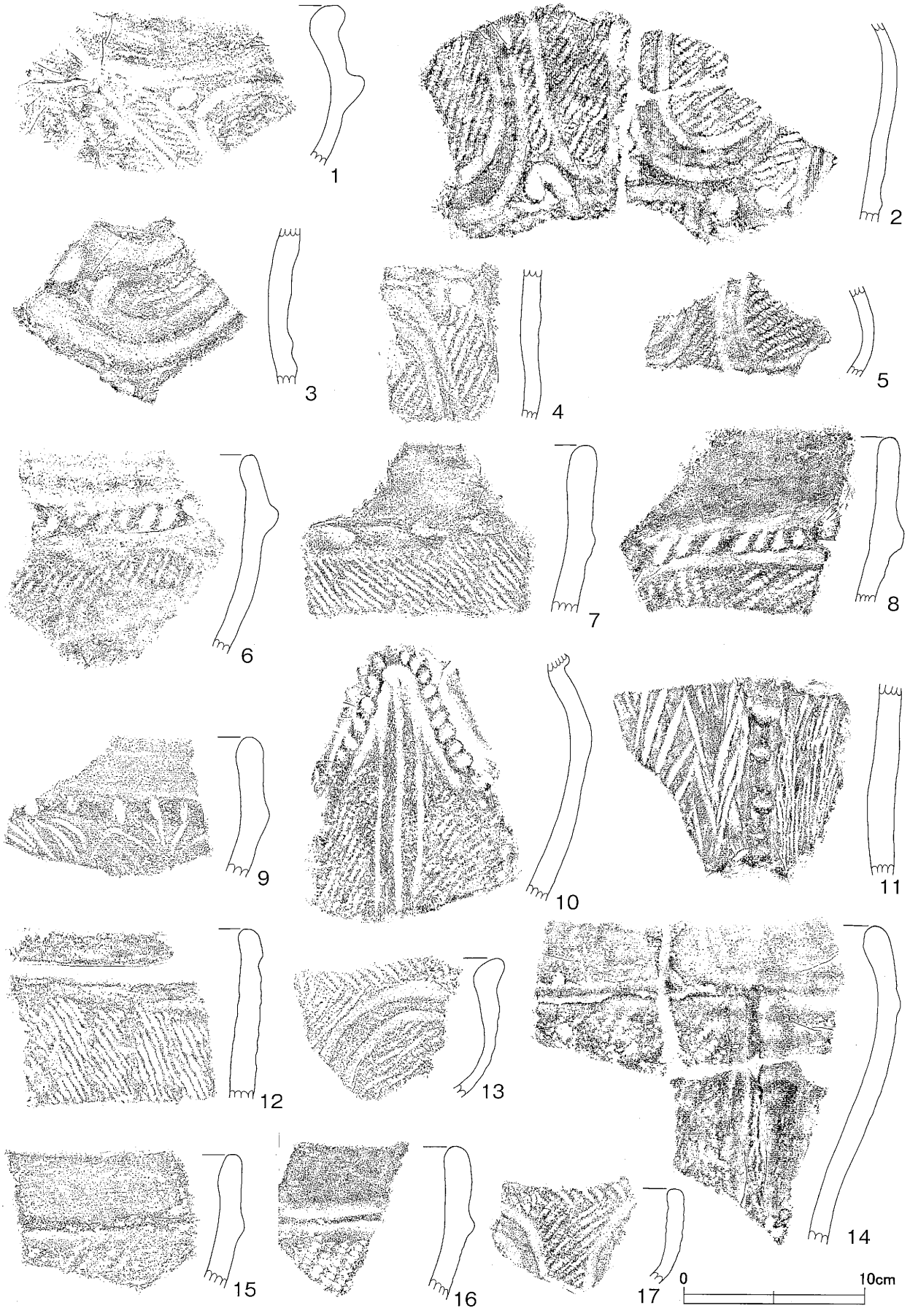
平成２年、今回の調査区の東端を横切るように道路が整備され、それに伴う発掘調査が実施された。遺構等は確認できなかったが、縄文時代後期後半の遺物、古墳時代前半の土器、中世の埋納銭が出土している。

縄文土器（第５図１～17、第６図26）

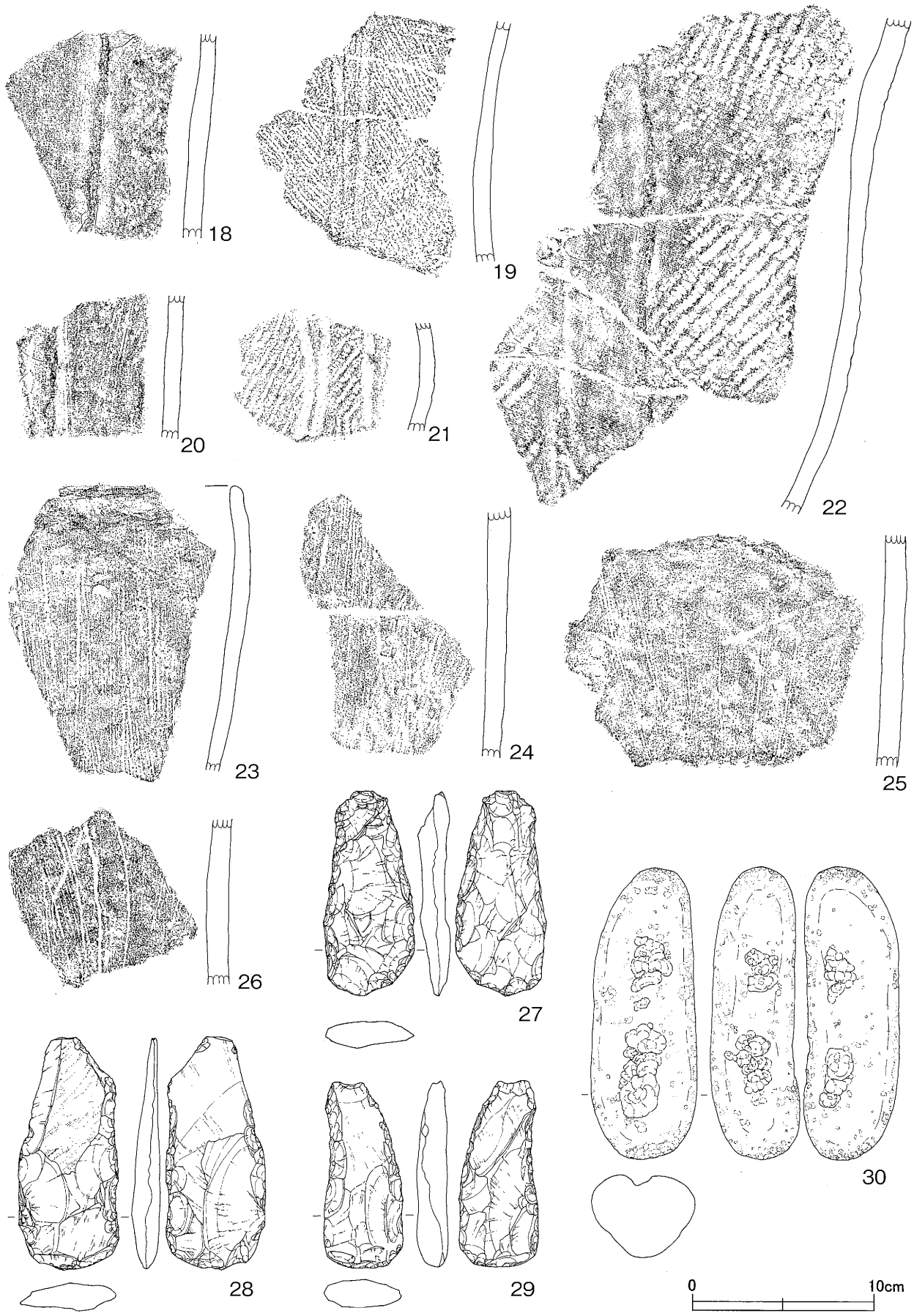
縄文土器はそれほど多くはない。その代表的な土器片を図示した。縄文土器は総じて、中期後半の土器であるが、その文様構成などから概ね３類に分類することにしたい。

第１類（第５図１～５）

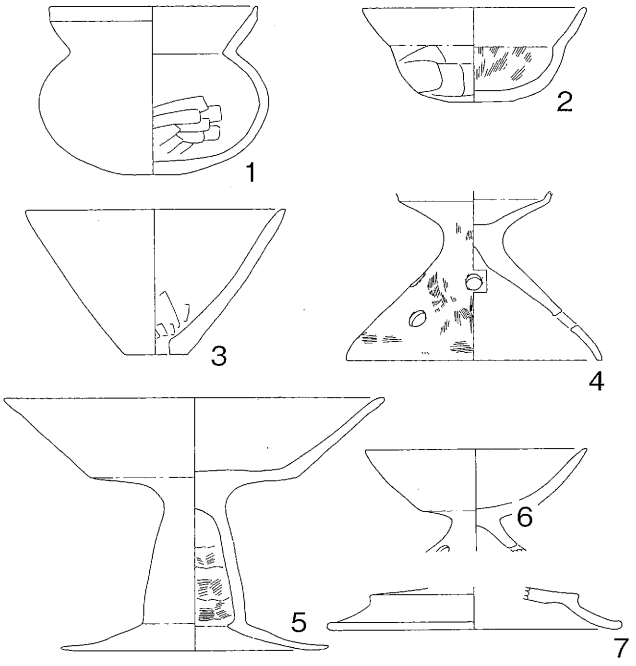
幅の広い沈線と縄文から文様が構成される一群で、東北地方に系譜を求めることができそうである。第１図１は波状口縁をなすと思われる口縁部の破片で、帯状縄文に文様が構成される。２はキャリパー形深鉢土器の胴部中程の破片である。胴部上半にU字状のモチーフが、下半部には逆U字状のモチーフが施文される類であろう。関東地方の中期後半にも認められるものだが、施文する沈線がやや太く、U字状のモチーフを画する沈線が二重であることなどから本類とした。２、４、５も同様なキャリパー形の深鉢の破片であろう。３は沈線とするよりも凹線とも表現すべき沈線によ



第５図　平成２年出土、縄文土器



第６図　平成２年出土、縄文土器と石器



第７図　周辺の出土遺物（１）

って、渦状の文様が施文されるものと思われる。東北地方の中期後半末葉の土器と類似している。

第２類（第５図６～11）

指頭による圧痕をもつ一群を本類とした。原則的には縄文が地文となるが、第１図11のように、地文が沈線文のものもある。これらは綿田弘実氏のいう指頭圧痕文土器の類と考えたが、細かにみると指頭圧痕には、指頭からヘラ状の工具によって施文されたと思われるものまであり多様である。本来ならば細分するべきであろう。

６～10は口縁部の破片である。10は深く切れ込む波状口縁の先端部破片であり、他の平坦な口縁のもの比べると特異である。また、波頂部から垂下する沈線が三本であることも注意をされる。圧痕隆帯文土器と区別すべきかも知れない。場合によっては後期前半に下がる可能性も否定できない。今回は圧痕隆帯文土器として本類に含めたが、今後注意すべき土器であろう。

第３類（第５図12から第６図24）

関東地方の加曽利Ｅ様式に比定できるものを本類とした。沈線によって文様が構成されるもの（第５図12，13，17、第６図19、21、22）、微隆起線文によって文様が構成されるもの（第５図14～16、第６図21）がある。微隆起線文の断面は三角形である。地文には縄文、櫛歯状の工具による細沈線の三種ある。

文様の構成には大きなＵ字状の文様モチーフが施文される第５図13、17、第６図21）と口縁部の下端に沈線や微隆起線文をめぐらせ、そこから沈線や微隆起線文垂下させるものがある（第５図14、第６図18、20、21）。

石器（第６図27～30）

打製石斧（第６図27～29）と凹石（第６図30）がある。打製石斧はいずれも短冊形の打製石斧である。凹石は断面三角形の細長い転石を用い、その側面が利用される。一面に三箇所の凹部、他の二面にはそれぞれ二箇所の凹部が観察できる。

古墳時代の土器（第７図１～７）

小型丸底壷（第７図１）、杯（第７図２）、甑（第７図３）、高杯４点（第７図４～７）の合計７点の土器が実測できた。

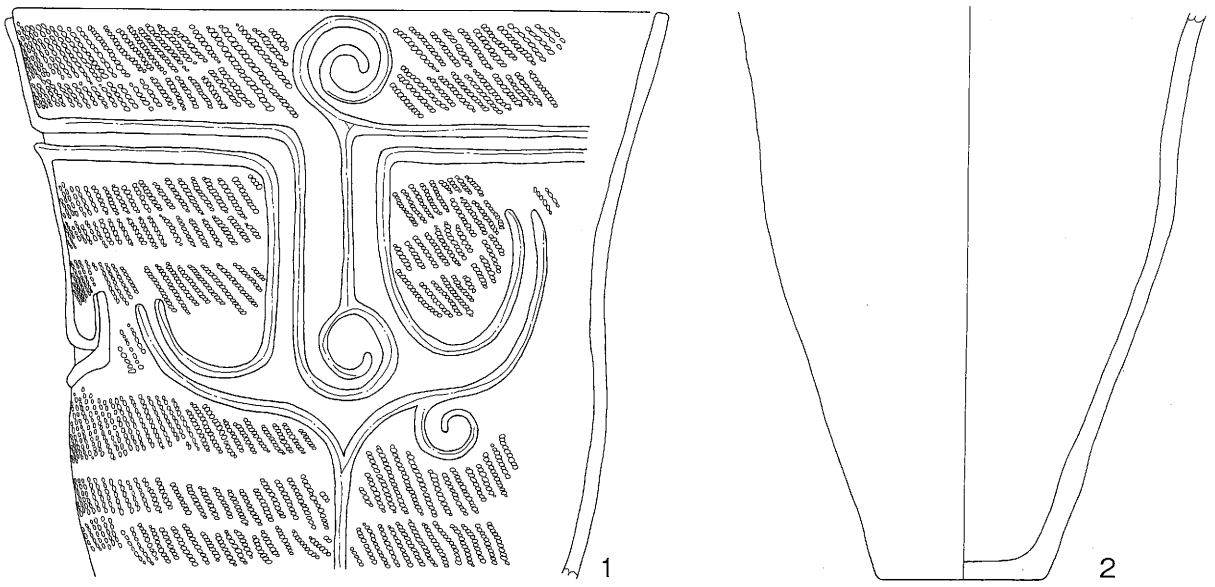
小型丸底壷は口縁の端部がつまんだように細くなり、口縁端部外側に稜を形成する。口縁は「く」の字状に外反し、扁平な胴部へと続き、丸底となる。底部の内面には横方向のヘラケズリが認められる。

杯はいわゆるヘルメット形で、体部の中ほどから外反し、体部の中ほどから下位にはヘラケズリが認められ、低部は丸底である。

高杯（４）は杯部が欠損しており、にわかにそれと断定できないが、高杯であろう。脚部は長く、やや内湾しながら大きく開き、四つの穿孔が認められる。

高杯（５）は完形で杯部の底部に稜線が形成される。脚部は長くやや膨らむ筒状を呈し、横に開いて底部となる。高杯（６）は脚部を欠損しているが、杯部と脚部の接合部から直ちに開き、穿孔が三つある。高杯（７）は底部のみの破片であるが、段を持ち、北陸系のものであろうか。

特に、遺構に伴ったものではないため、一括してよいかどうか判断に迷うが、完形である高杯の杯部のありかた、やや膨らみ加減の長い脚部等か



第８図　周辺の出土遺物（２）

ら概ね笹沢編年の古墳Ⅳ期段階のものであろうか。（笹沢・1988）

一括埋納銭

約6,350枚の古銭が地下50ｍから一括して検出された。特に埋納容器は確認されなかった。おそらく、有機質の布袋等に入れて埋納されたものであろう。

表面採集の埋甕（第８図）

昭和59年、大字新野字宮下地籍の農道工事の際に露出した地層断面から関武氏が採集した縄文土器である。関武氏によれば、地表から１ｍほど下位の黒色土層に埋没し、二個体の縄文土器は数ｍほど離れていたという。縄文土器２は口縁部を欠損するもののほぼ完形で、正位に直立し、その口に平たい石が蓋をするように、のっていたという。埋甕であった可能性が高い。

縄文土器１は口径約24㎝、現存高約30㎝の胴部がややくびれる深鉢である。

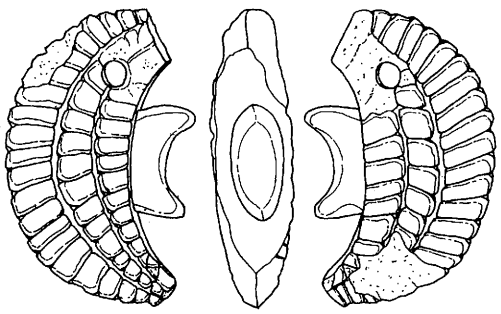
地文に縄文が用いられ、隆帯により渦状を基本とした文様モチーフが施文される。隆帯によって口縁部に施文された渦状の文様の一端が、そのまま水平に口縁部の下位を巡り、途中で垂下して、再び渦巻き文を構成する文様のあり方は大きな横Ｓ字状の文様意匠を呈しているように思える。このような文様の構成をもつ土器は、筆者の管見にふれたことがない。しかし、横Ｓ字をこのように隆帯で表現をする土器は新潟県以北の日本海側に散見され、当該地方に分布の中心をもつ、加曾利Ｅ式並行の土器ではないかと考えている。

縄文土器２は胴部がややくびれる無文の深鉢形土器である。無文であるため、時期や地域性を探ることができず、詳細は不明であるが、中期末葉には縄文や条線のみの深鉢形土器があることから、そうした土器の類と見なせないことはない。

表面採集の子持勾玉（第９図）

平成７年、中山保夫氏が自宅の前の畑（大字新野756番地）で農作業中に発見したものである。表採地は今回の調査区から、南東方向に約150ｍ上流にある。

滑石製で長さ約7.8㎝を計測する大きな勾玉である。腹部に小さな勾玉状（Ｕ字状の突起）があり、頭部は穿孔されている。表面全体が幅約0.2㎝、長さ約0.6㎝の長方形に線刻されている。



第９図　周辺の出土遺物・子持ち勾玉

第３章　遺構と遺物

第１節　遺構及び遺物の概要

グリット設定は任意の起点を設け４ｍグリットを設置、南北に数字、東西にアルハベットを用いた。

調査は重機によって遺構検出面まで掘り下げ、遺構検出面からは手堀で発掘調査を行った。

扇状地地形のためか湧水が激しく、遺構等の検出は極めて困難であった。そこで調査区の境及び東西に幅１ｍのトレンチを設け排水溝とし、調査を行った。遺物の取り上げは遺構単位とし、遺構外の遺物はグリット一括で取り上げた。

新野遺跡は縄文中期後半から古代末期に及ぶ。縄文時代はグリット出土遺物であるが中期後半から後期前葉の土器及び打製石斧・くぼみ石などを検出している。

弥生時代の遺構として住居址１軒が検出された。又、グリット内には弥生土器片が散在していたがその量は少量であった。

古代では住居址10軒、土坑13基、焼土20基が検出された。各住居址からの遺物については多様であり時間差が考えられる。当該地域の古代土器編年は確定しておらず、本調査では便宜的に任意に並べた。

特に焼土が調査区に多数分布していた。その用途については明らかにすることは出来なかった。住居址外の調理場・野外火所だった可能性も想定した。焼土の配置からは規則性を読み取ることはできなかった。

所属期が明らかではないが、土坑も13基検出されている。しかし、その中には木痕等の撹乱を土坑と認定したものも混在している可能性がある。土坑も住居外の施設になる可能性があると考え調査を実施したが明確に出来なかった。

調査区は3000㎡に及ぶが遺構が検出されたのはＡ・Ｂ区のみであった。その他の調査区は古河川及び圃場整備などによって撹乱されており、遺構を確認することはできなかった。

第２節　縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかった。土器片が散布していたが、いずれも小破片であり、その分布も希薄であった。検出された土器は中期初頭から後期前葉にかけてのものである。

１　土器（第11図から12図）

第１類（第11図　１～11）

縄文時代中期前葉に編年されると思われる一群を本類とした。小破片で判断に迷うものが多い。１は口縁部の破片で口縁に平行した三本の沈線文が認められる。３、４、７も１と同様に水平に沈線文が施文される。

６は沈線文が水平に施文され、その沈線に重なるように円形の刺突文が認められる。これは五領ヶ台式土器に比定されよう。

先述したように本類は中期初頭の土器群であると考えたが、地域色が強く、安易に比較することはできないが、北陸地方の中期前葉の土器群との関連性が指摘されよう。いずれにしろ、今後の検討が必要な一群である。

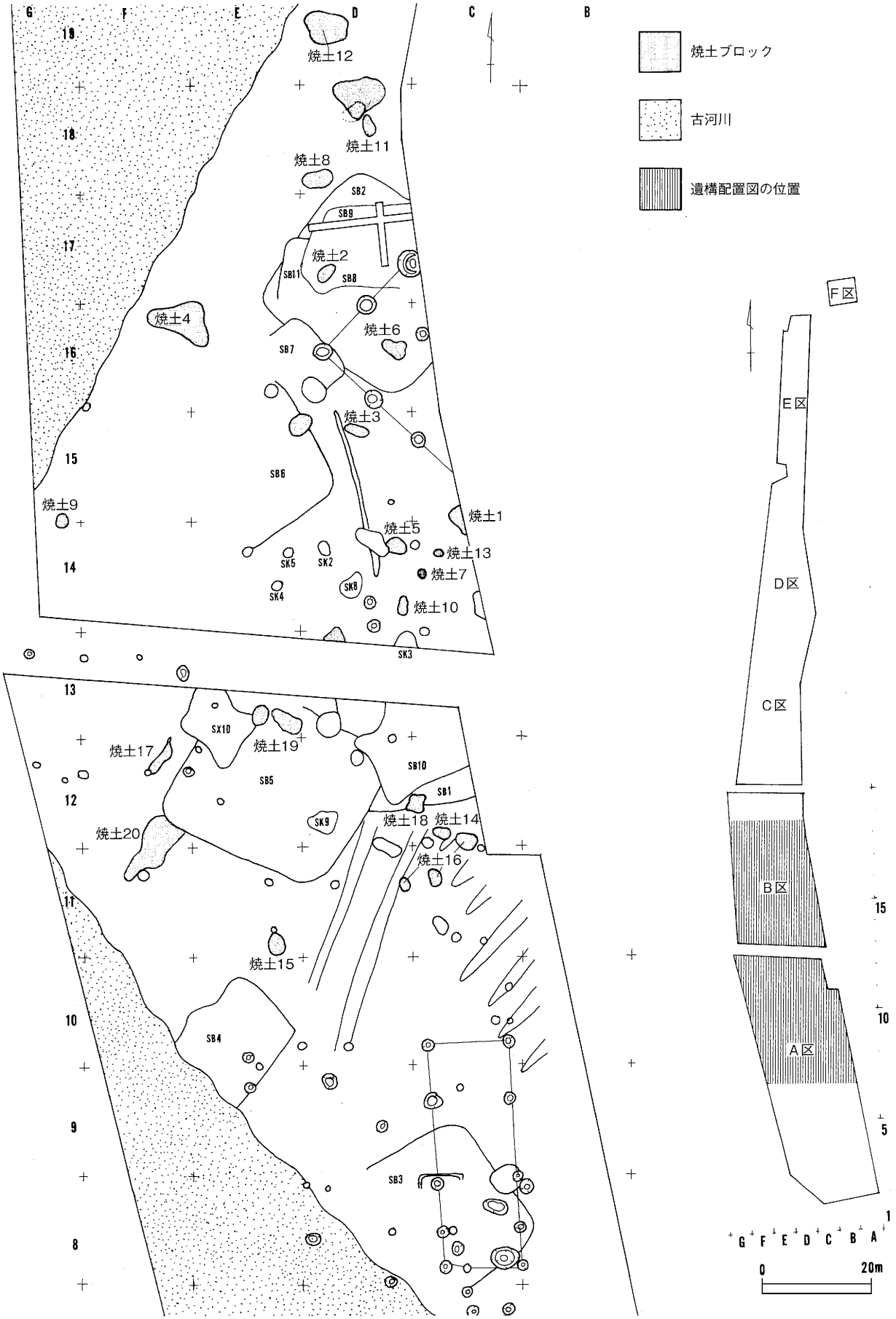
第２類（第11図12～20）

隆線により、渦巻き状などの曲線的な文様が施文されるものを本類とした。12は口縁部に水平に施文された隆線と蕨手状の曲線文から構成される。13は微隆帯によってＳ字状のモチーフが施文された口縁部の破片である。14も口縁端部に巡らされた断面三角形の微隆起線とそこから垂下する渦状の文様が施文されている。18、19は胴部破片であり、渦状のモチーフが隆線によって施文されている。北陸地方に系譜をもつ縄文時代中期前葉の土器に系譜をもつものであろうか。

第３類（第11図20～27）

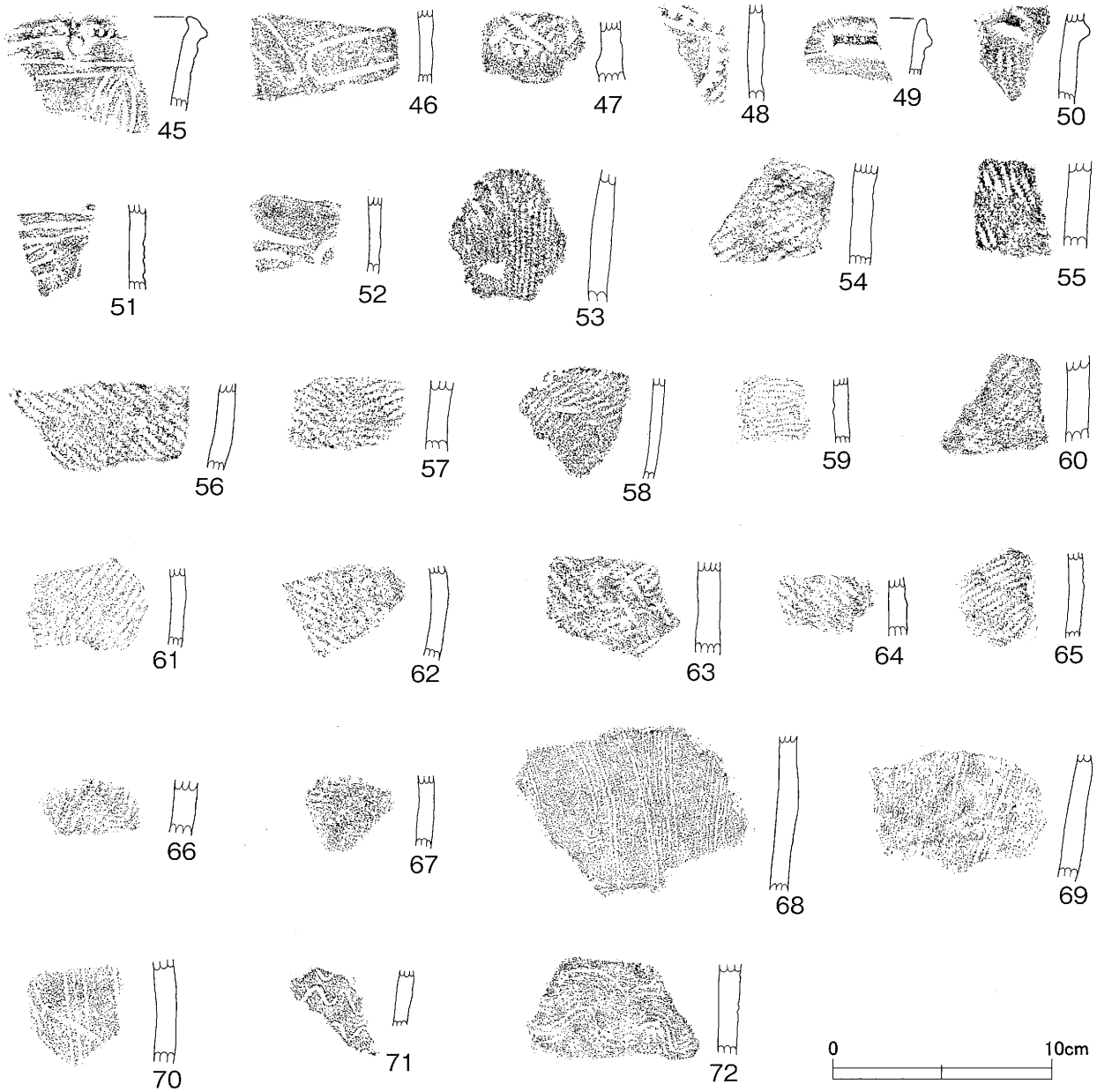
太目の隆帯に、刻目を有する一群を本類とする。いわゆる指頭圧痕文土器である。

指頭圧痕土器は千曲川水系の中期後半、加曾利Ｅ式の系譜をひいた土器群と伴うことが多い土器


焼土ブロック
古河川
遺構配置図の位置
焼土12
焼土11
焼土8
SB2
SB9
焼土2
SB11
SB8
焼土4
焼土6
SB7
焼土3
SB6
焼土9
焼土1
焼土5
焼土13
SK5
SK2
焼土7
SK8
SK4
焼土10
SK3
SX10
焼土17
焼土19
SB10
SB5
SB1
SK9
焼土18
焼土14
焼土20
焼土16
焼土15
SB4
SB3
F区
E区
D区
C区
B区
A区
0
20m

第10図　遺構配置図

第11図　グリッド出土の縄文土器（1）



第12図　グリッド出土の縄文土器（2）

であり、下流域に多い。

第４類土器（第11図28～44）

加曾利Ｅ式土器に類似する一群を本類とした。断面三角形の微隆線（28、32等）で文様が施文されるものや、大きなＵ字形の文様（35. 36）、波状口縁の土器片（36）などの存在から、加曾利Ｅ式土器末葉の土器であると考える。

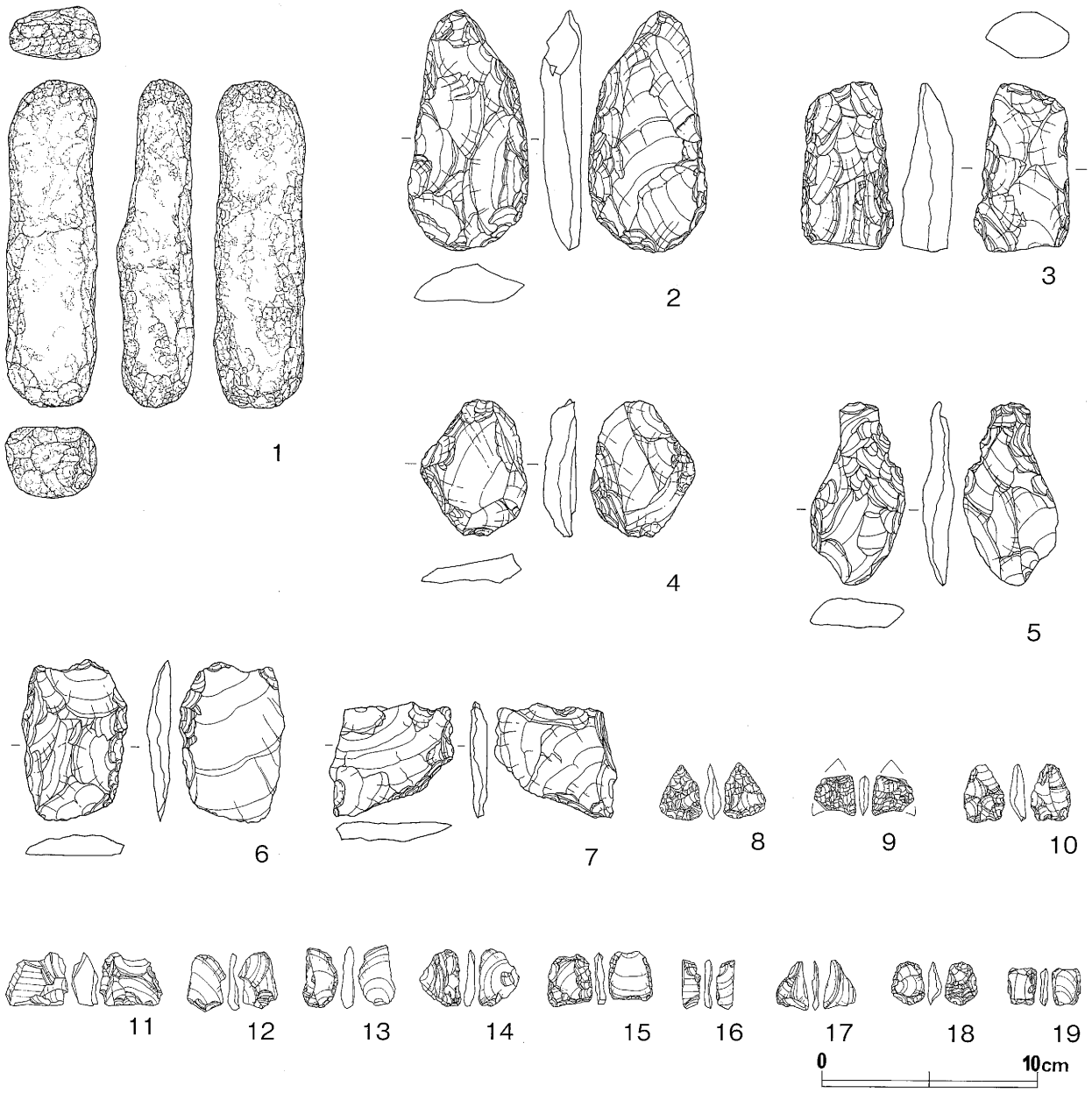
千曲川水系には加曾利Ｅ式に類似する、あるいは系譜を引くと思われる土器群が分布しており、関東地方の加曾利Ｅ式や、指頭圧文土器との共伴関係や系譜が問題となるところである。

第５類土器（第12図45図～52）

堀之内式土器に並行すると思われる一群を本類とした。45、49などは直接的に堀之内１式に対応させることができよう。46～48は沈線による文様が施文されることから本類に含めた。また、51. 52は沈線によって文様が施文されているが、小破片であるために、文様の全体を知ることができず本類とするには疑問が残るが、一応本類にふくめておく。

第７類（第12図53～67）

縄文の施文される一群を本類とした。おそらく、加曾利Ｅ式土器に類似する土器群の胴部破片であろう。



第13図　グリッド出土の縄文石器

第８類（第12図68～72）

条線状の文様が施文されている土器群を本類とする。68から70は条線が施文される。おそらく、第４類加曾利Ｅ式土器に類似する一群の土器の胴部破片であろう。71は太い条線で横方向に波状文が、72は条線による波状文が施文される。

２　石器（第13図１～19）

ハンマーストーンが１点、打製石斧が５点、石鏃が５点、剥片が９点検出された。

ハンマーストーン１は断面ほぼ四角形の細長い転石を用い、その両端面を主に作業に用いている。側面にも敲打痕が認められるが、形を整えるためのものである可能性が高い。

打製石斧は２のみが完形品で、他の５例は欠損品や未製品である。３は胴部と刃部が欠損している。４はスクレイパー状を呈しているが、打製石斧の未製品であろう。５も同様に打製石斧の未製品である。６も同様に未製品であるが、その素材は別の打製石斧製作時に生じた大型の剥片ないし、打製石斧の再生の際に生じた大型の剥片であると考えられる。７も同様に打製石斧の再生剥片ではないかと考えられる。

これまで、打製石斧の再生については余り検討

されたことがないが、丹念に観察すると意外に多くの打製石斧再生剥片が含まれている。筆者の経験では中野市栗林遺跡においても、片面に磨耗痕が残る剥片を何例か確認した。おそらく、刃部再生剥片であろうと考えている。

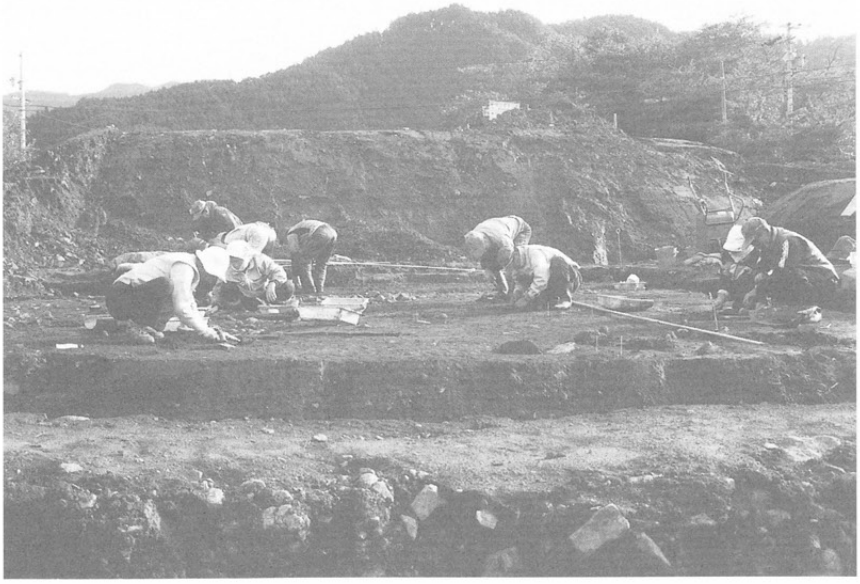
このような打製石斧再生剥片のあり方から、打製石斧は欠損するとすぐに廃棄されるものではなく、刃部が幾度も再生されて、使用されていたことを示している。

11～19の剥片はいずれも小さいが、13や15のように小剥離痕が観察されるものもあり、臨機的に使用されたと考えられる。

3　新野遺跡の縄文時代

今回の調査では縄文時代の遺構は確認できず遺物もわずかであったが、新野遺跡は縄文時代中期のはじめの頃から存在し、後期前葉まで継続されることが明らかになった。

また、平成２年度の調査、昭和59年の関武氏が採取した土器等を参考にすると、縄文時代の中期後半から後期前葉が主体となる遺跡と考えて良いであろう。



第３節　弥生時代

住居址１軒、及び少量の土器片が検出された。グリッドにおける弥生時代の遺物の散布密度は希薄である。

１　遺構

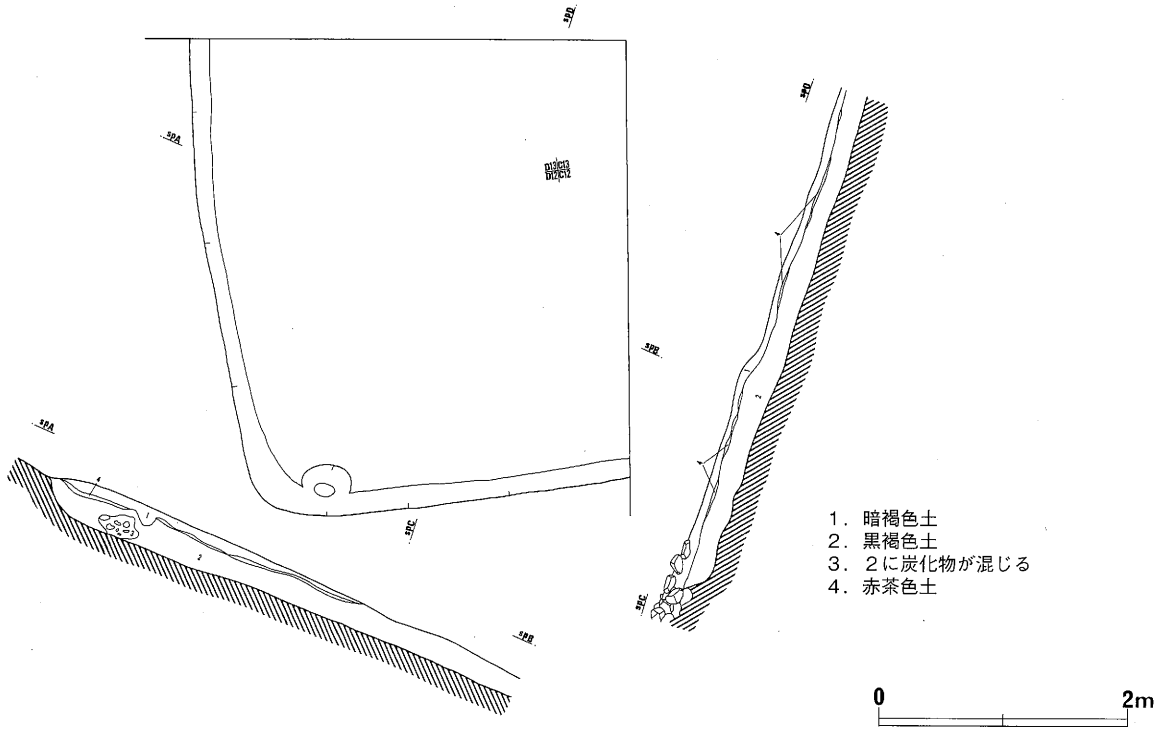
１号住居址（第14図）はＡ区Ｄ12・13グリッドで検出された。住居址の北半分は排水路で撹乱され、東側は調査区外に延びていた。そのため、全体を調査することはできず、住居の南西コーナーを検出したにとどまるが方形の平面形態になるものと推測できる。

柱穴は南東コーナーの壁際に一箇所検出され、その覆土内から弥生時代後期の土器片が検出された。

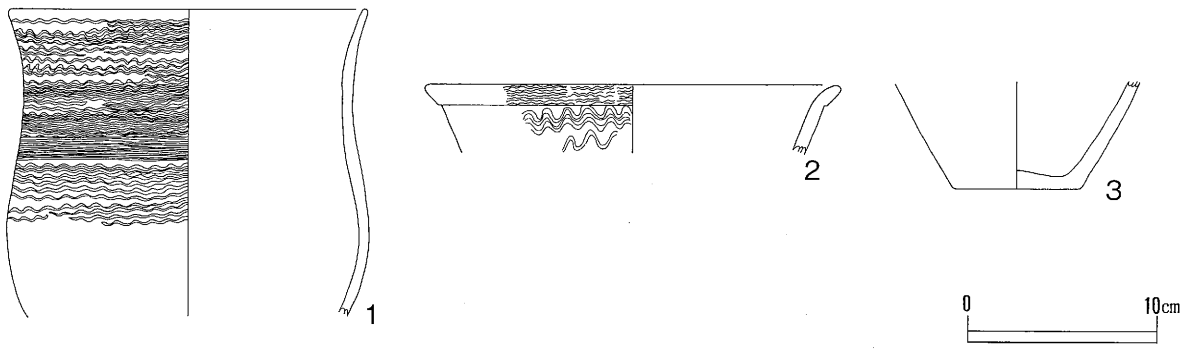
また、遺物は南東コーナーに集中して、出土している。

２　遺物

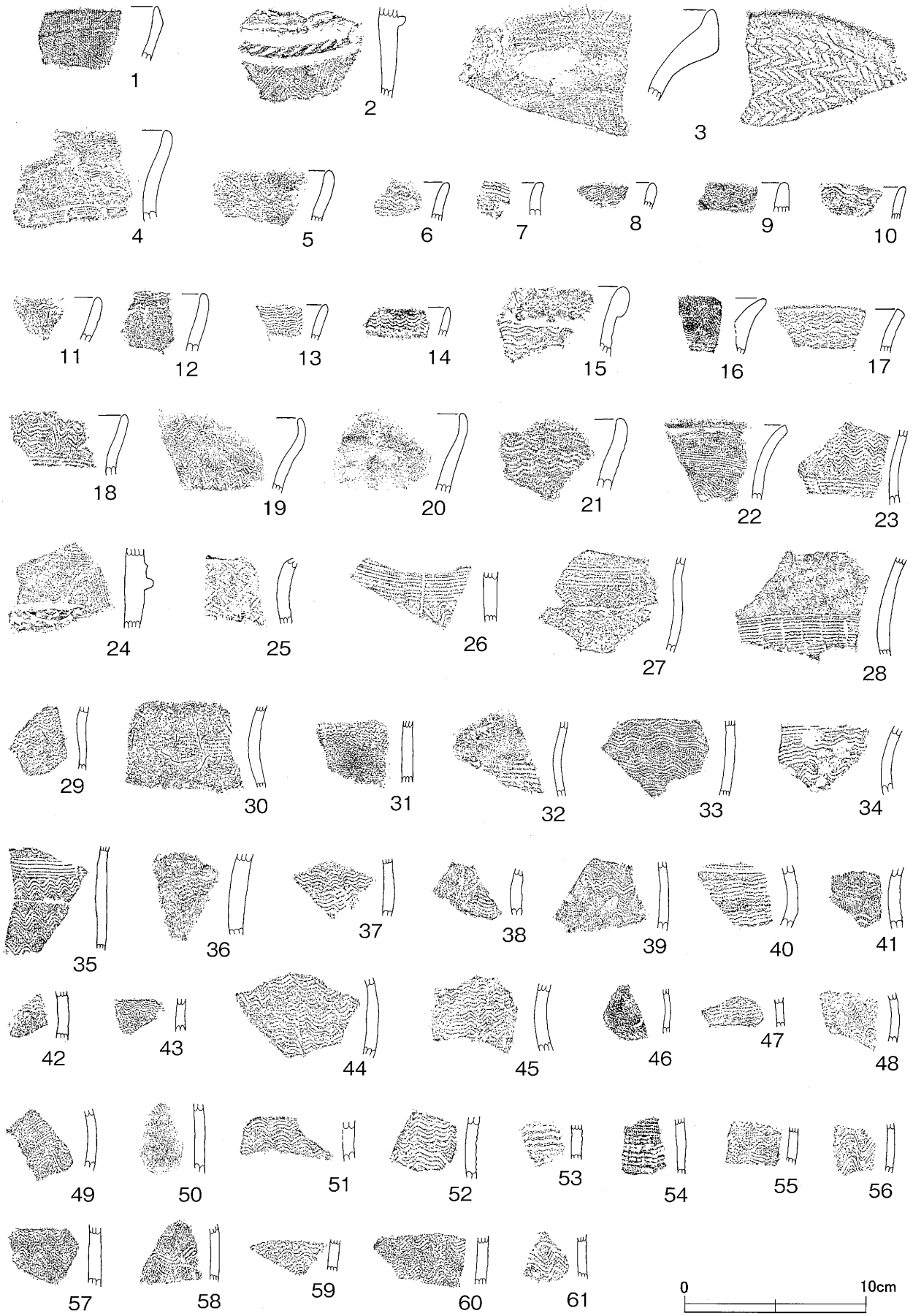
１号住居址検出の土器（第15図）は甕形土器３点が発見された。いずれも、弥生時代後期のものである。１は頸部が緩やかにくびれ、口縁部の外反度が小さい器形となる。底部を欠くため断言で



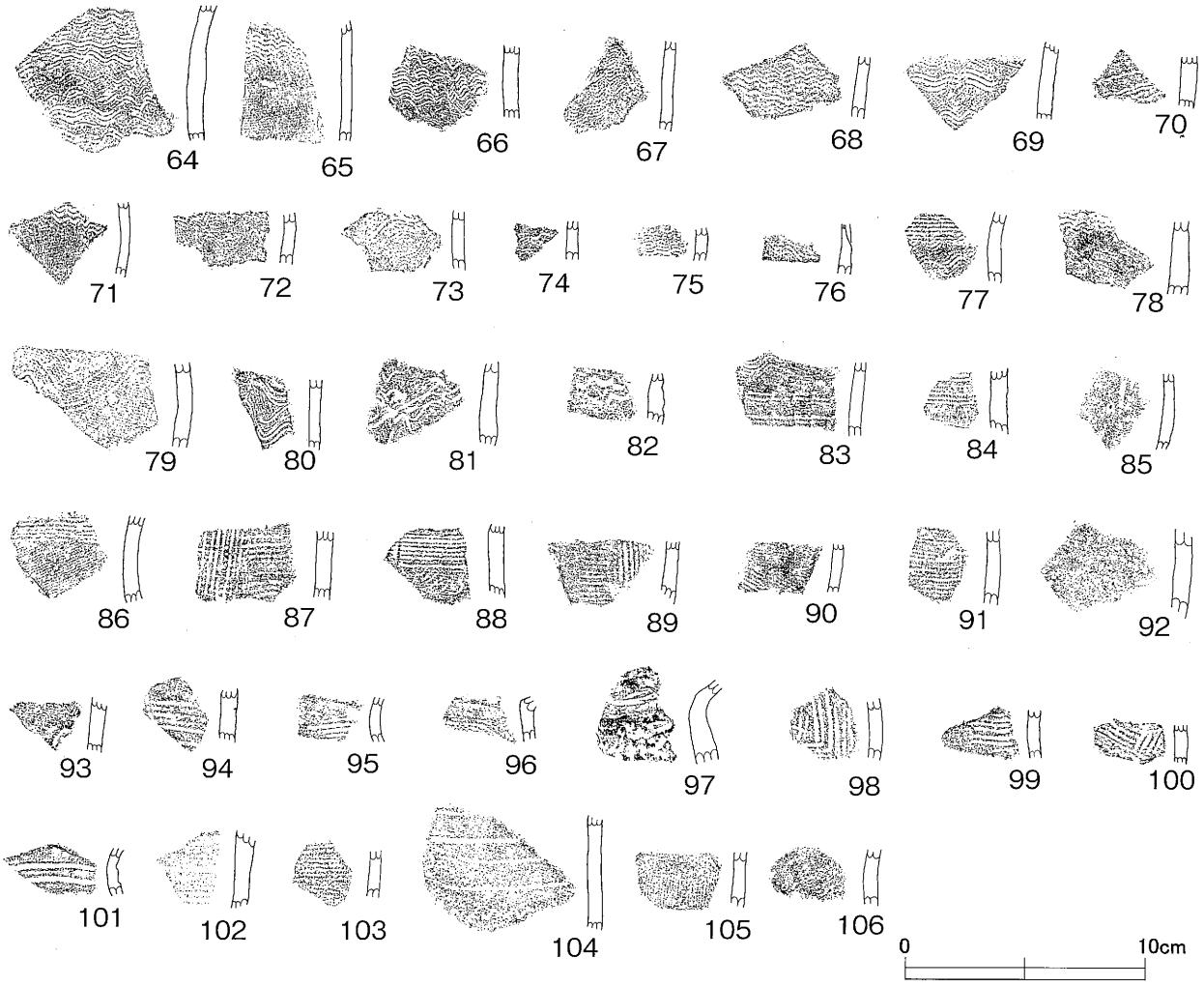
第14図　第１号住居址



第15図　第１号住居址出土遺物



第16図　グリッド出土の弥生土器（1）



第17図　グリッド出土の弥生土器（2）

きないが短寸な甕である。胴部上半部まで、櫛描波状文が施文されるが、頸部文様はない。2は甕の口縁部であるが、口縁部がやや外反し、口縁端部が折り返される。3は甕の底部である。

いずれも、弥生時代後期の箱清水式土器と考えられる。ほぼ全形を知りうる1は胴部のくびれが弱く、頸部文様帯が欠けるなどの点から、箱清水式土器の末葉段階のものと考えられる。

グリッド出土の弥生土器（第16図、17図）

グリッド出土の弥生土器片の大半は箱清水式土器のものであるが、第16図1～3は外来系の土器である。1は口縁端部の破片で、端部がつままれたように薄くなる。2は頸部の破片で、頸部に刻目をもつ隆帯が巡る。3も口縁部の破片で端部が有段を呈する。内面には矢羽状の文様が施文される。

4から105はいずれも箱清水式土器の破片である。壷形土器、甕形土器がある。

第４節　奈良・平安時代

１　住居址

（１）２号住居址（第18図）

Ｂ区Ｃ・Ｄ－16・17グリッドで検出した。南西のコーナーは調査区外に延びるが、北壁、西壁、と東壁、南壁の一部を検出した。６×６ｍの方形を呈し、覆土の厚さは20cmと薄い。竈は確認でなかった。

住居の北側の床面上に、不正形ではあるが、ほぼ２×2.5ｍの範囲に厚さ約５cmの硬い黄色の粘土層を確認した。床面全体に認められないので、張床とは考えにくい。竪穴住居の壁材が崩落していた可能性もある。

柱穴は北、西、南のそれぞれのコーナー及び南西壁のほぼ中央に五箇所で確認した。

遺物は焼土のブロック周辺に集中して出土している。

周溝は西コーナーを中心に北東側に160cm、南西側に160cm確認されたが、それ以外では確認できなかった。検出された周溝は幅約20cm、深さ10cmある。

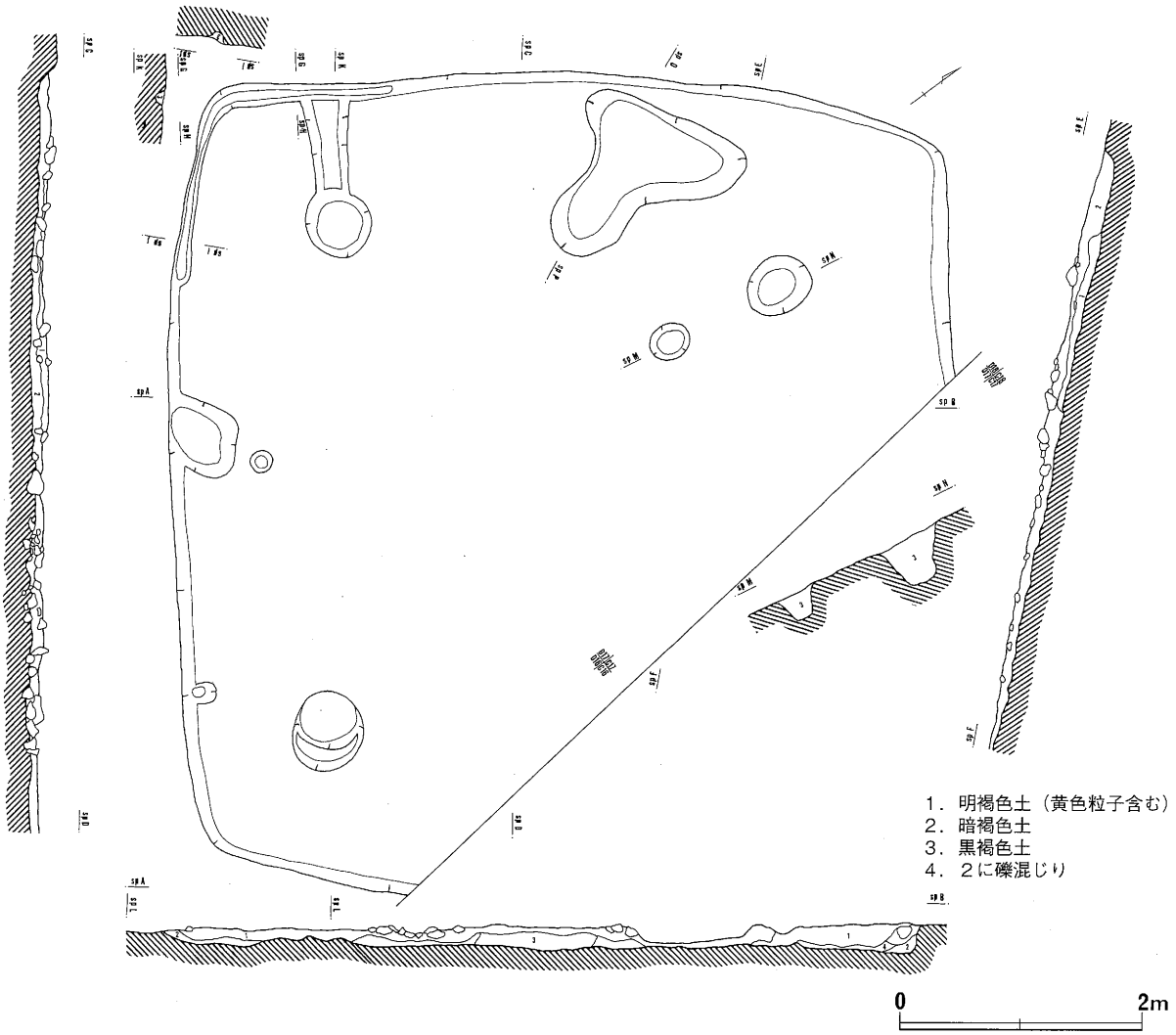
また、西コーナーの柱穴から北壁の周溝に向かって幅約40cm、深さ７cmの溝が確認された。

覆土内遺物（19図）

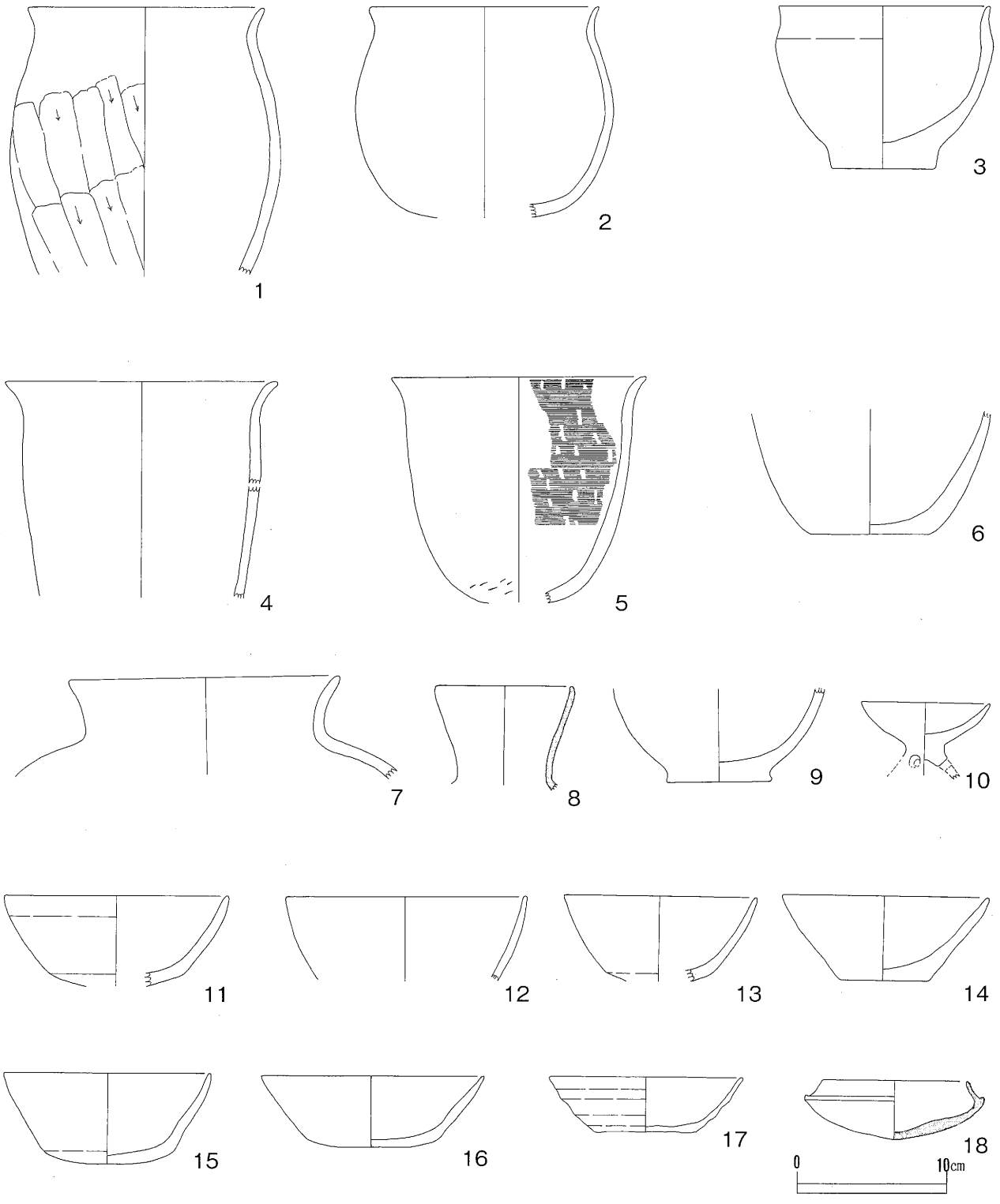
甕、杯、須恵器壷、須恵器杯等が検出されている。

第19図１．２．４．５．６は甕である。胴部が長いもの（１．４）、丸胴のもの（２）、長胴と丸胴の中間の器形となるもの（５）がある。

１は口縁部がゆるく反り、胴部の中程よりやや上位に最大径をもつ長胴甕である。胴部上半から底部にかけて、ヘラケズリされる。４も同様に長胴甕であるが、口縁部がゆるく反り、胴部中程が



第18図　第２号住居址

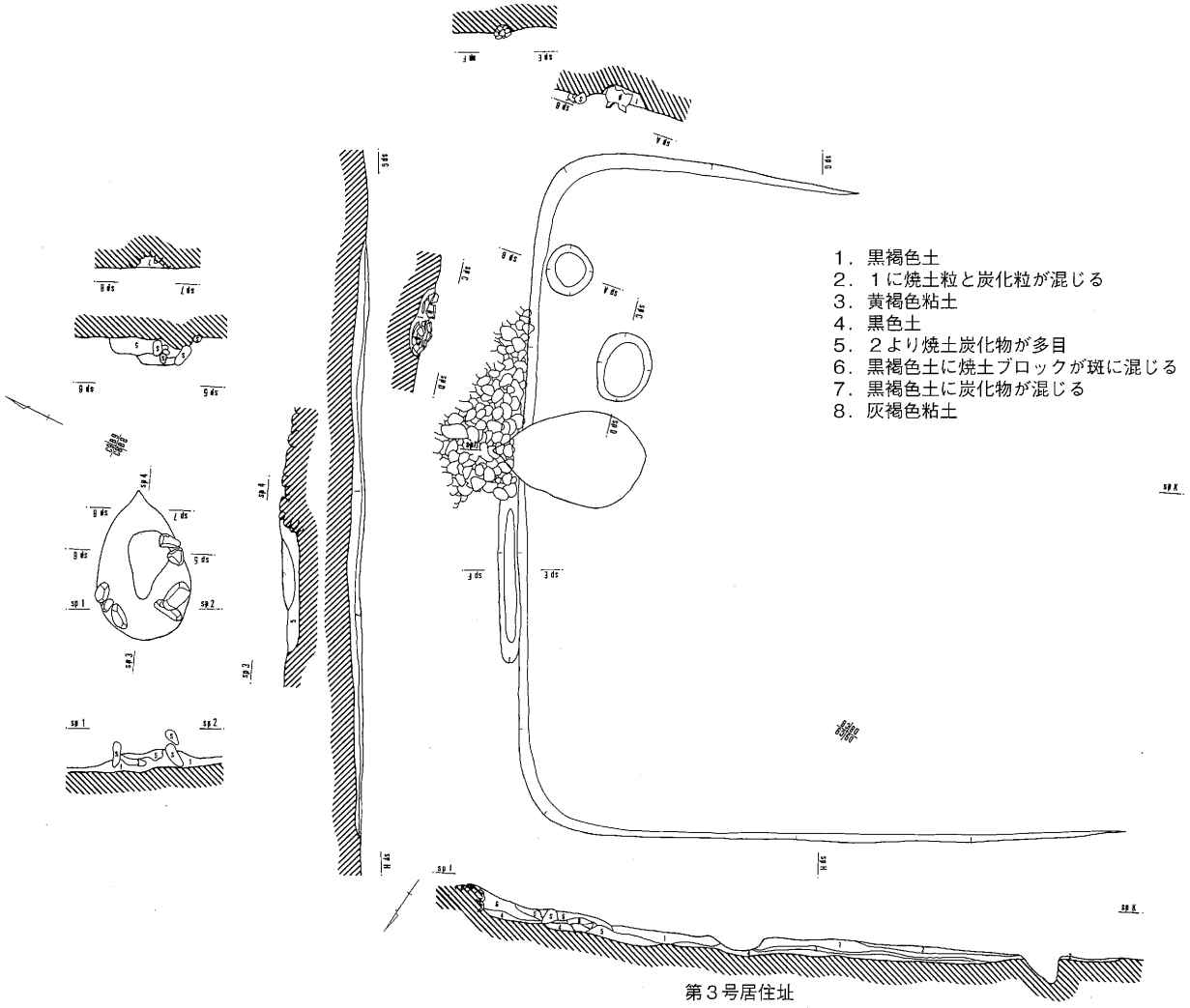


第19図　第２号住居址出土遺物

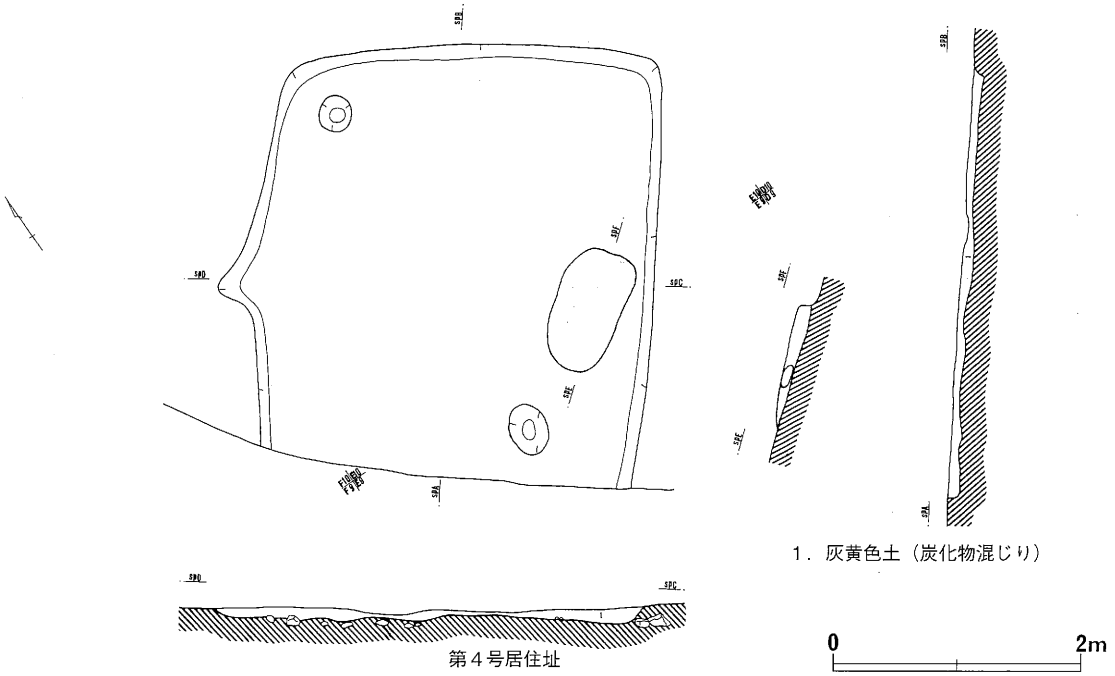
僅かに膨らみ、そのまま底部にいたる。最大径は口縁部にある。甕２は口縁部がゆるく反る丸胴であり、底部を欠損する。おそらく、丸底であろうか。

５は長胴甕と丸甕の中間の器形をとる口縁部がゆるく反り、そのまま丸底の底部に至る。底部外面に僅かなヘラケズリ、内面は横方向にハケメ成形される。

３は鉢とすべきであろうか。口縁端部が指でつままれたように外反し、口縁端部の下位に稜を形

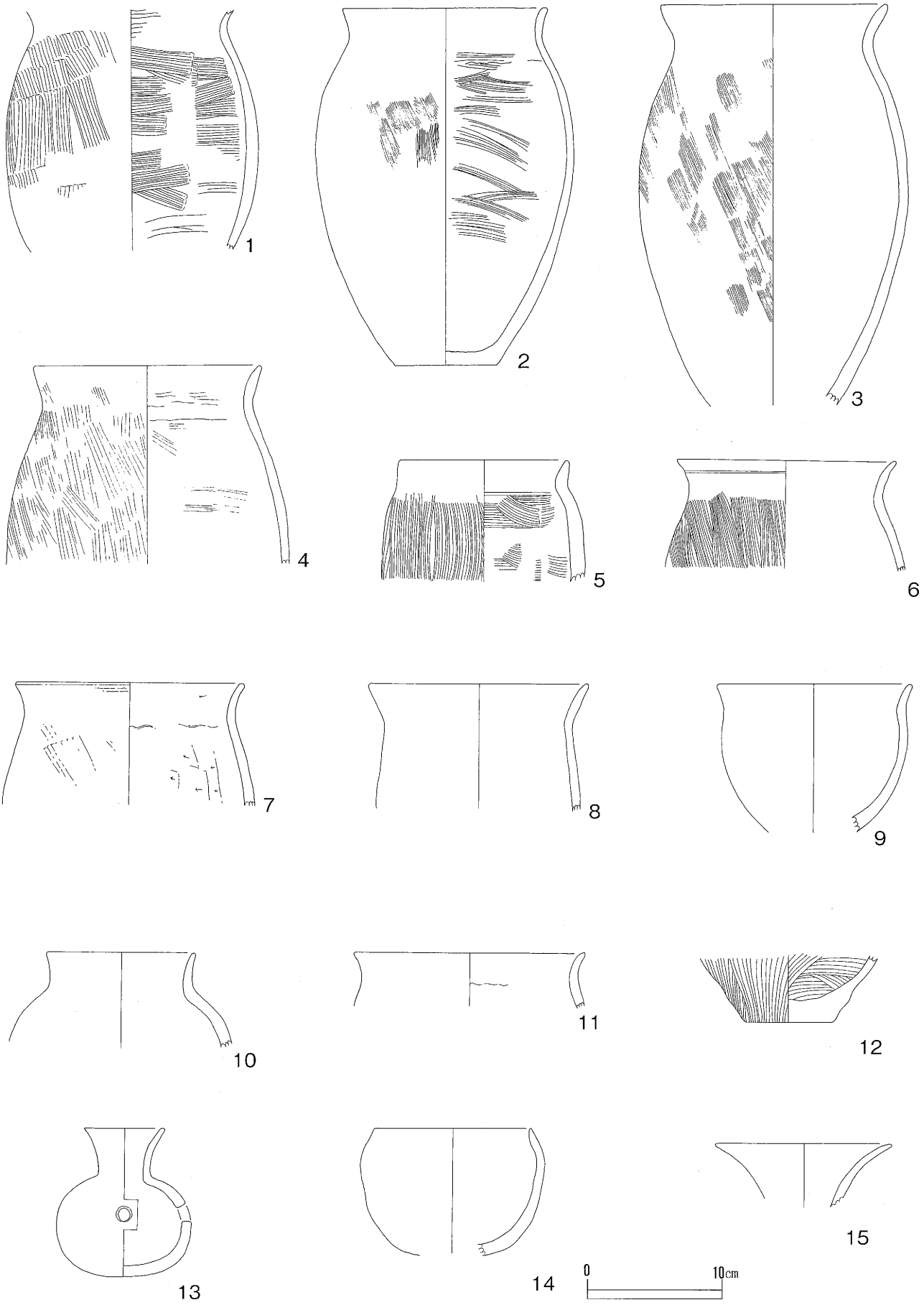


第３号居住址

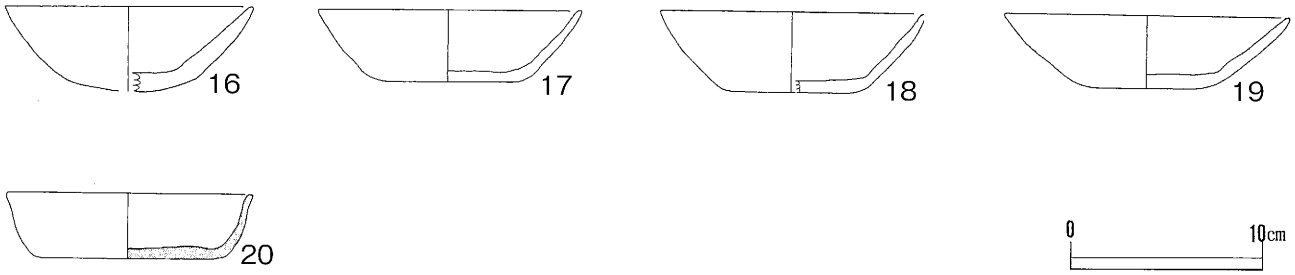


第４号居住址

第20図　第３・４号住居址



第21図　第３号住居址出土遺物（１）



第22図　第３号住居址出土遺物（２）

成し、やや内湾しながら、底部にいたる器形となる。６は底部のみであるが３と同様の器形になるのであろうか。

土師器杯は、回転台を利用して整形したものである。17を除き、口径、底径に比して器高が高い。須恵器の形態を模したものではないかと思われるが古い様相と理解したい。18の返りをもつ須恵器杯が伴ったと考えてもよいのではなかろうか。10の器台や17の杯は住居の覆土内への混入であろう。そうした点を考え、本住居址は奈良時代の前半のものと考える

（２）３号住居址（第20図上）

Ａ区Ｃ－８・９グリッドで検出された。竈のある東壁と北壁の一部を検出したにとどまる。検出できた東壁の長さは約６ｍある。

東壁のほぼ中央に竈が検出された。竈は礫を芯材にしている。竈のある東の外側には竈を囲むように礫が約30cm積み上げられ礫は竪穴住居の一部であった可能性が高い。その礫上に煙道の一部が確認された。

竈の南側に二箇所貯蔵穴様の土坑を検出している。竈に近い土坑からは二個体分の甕が、遠い土坑からは小型の甕一個体分を検出している。

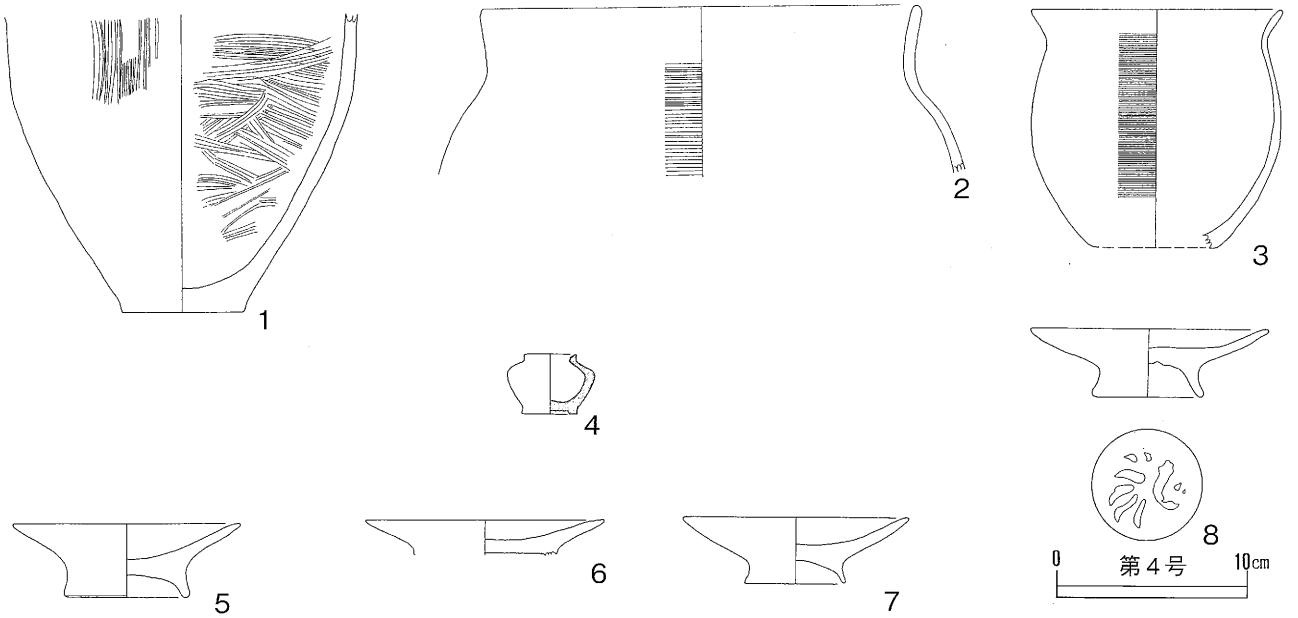
竈の北側には竈から幅約20cmの溝が東壁に沿って約140cm伸びている。直接、本遺構と関係があるかどうかは不明である。

覆土内遺物（第21図・第22図）

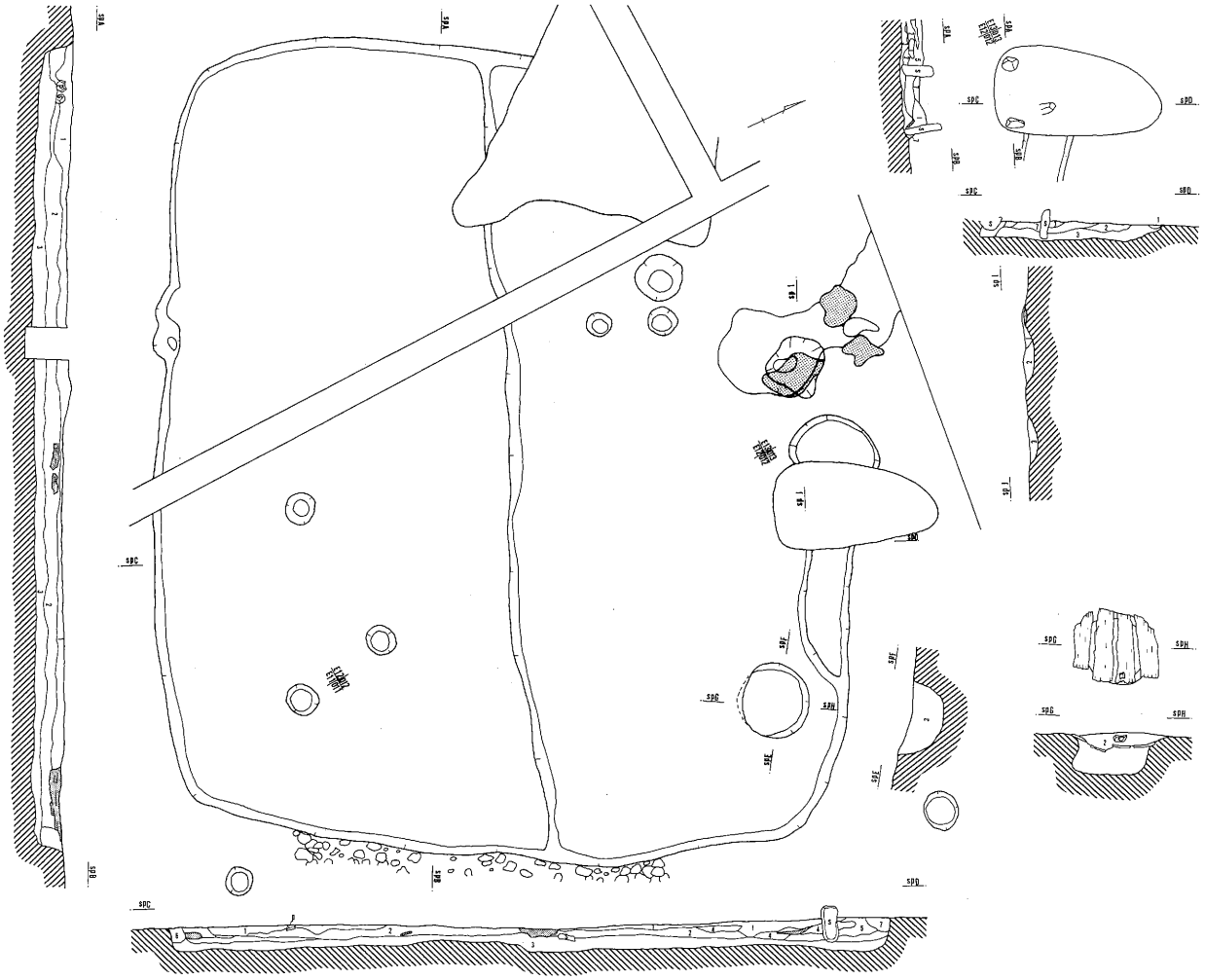
甕、杯、須恵器杯、壺、ハソウ、須恵器杯等が検出された。

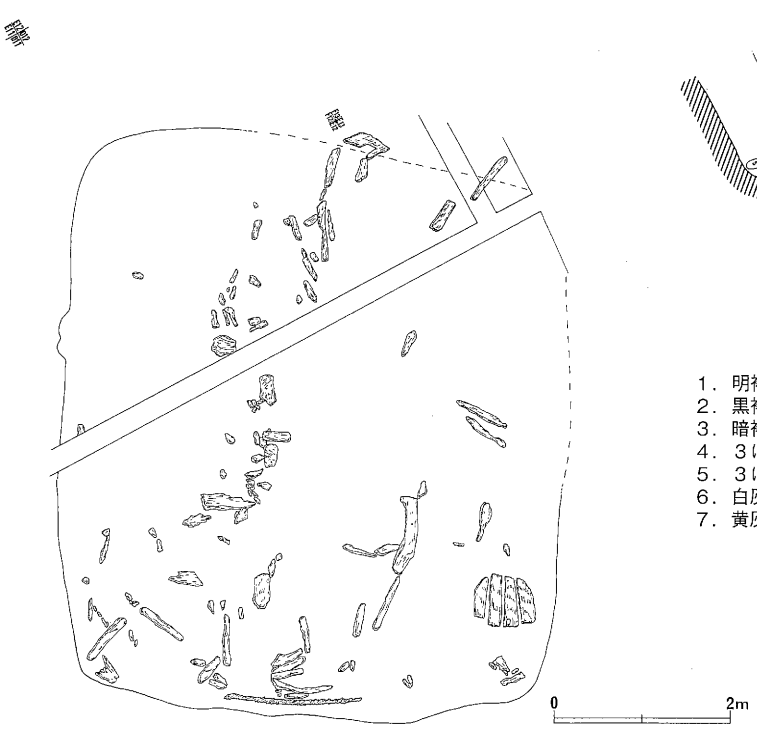
第21図１～12は甕である。胴が長いもの（１～８．11．12）、丸胴のもの（18）、長胴と丸胴の中間の器形となるもの（９）がある。

長胴甕は外面に縦方向のハケメ、内面には横方



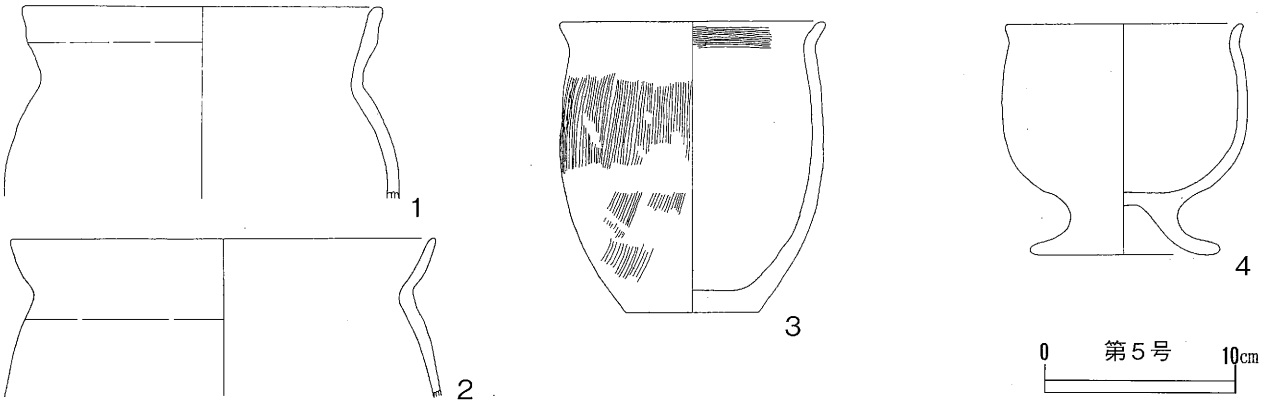
第23図　第４号住居址出土遺物





1．明褐色土に焼土粒と炭化粒・炭化物が混じる
2．黒褐色土に炭化物が混じる
3．暗褐色土
4．３に焼土ブロックが混じる
5．３に焼土粒が混じる
6．白灰色砂質
7．黄灰色粘土

第24図　第５号住居址



第25図　第５号住居址出土遺物

向のハケメが観察される。

第22図16～19は回転台を利用して整形された杯である。口径に比して底部径が比較的大きい。20の須恵器杯の存在を考えると第２号住居址出土遺物よりも新しいものではあるが、奈良時代のものであろう。

（３）４号住居址（第20図下）

Ａ区Ｅ―９・10グリットで検出された。南側は撹乱をうけており、北壁、及び西、東壁の一部が検出された。

住居址の東壁のほぼ中央、壁よりに焼土のブロックが検出された。長径約100×60cm、厚さ約20cmの不整形な楕円形を呈していた。焼土内及び周辺には焼礫が散在していた。竈が壊されたものかも知れない。

覆土内遺物（第23図）

甕３、杯３、須恵器のミニチュア壺、高脚高台の杯４が出土している。甕１～３はそれぞれ器形が異なる。１は長胴甕であろうか。外面に縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメが観察される。２は口縁部がほぼ直立し、胴部が張る形態になる甕である。外面はカキ目整形される。３は小型の甕で、口縁部がゆるく立ち上がり、胴部の中位に最大径をもつ。

５～８は高い高台をもつ杯からの存在から、平安時代の後半の住居址であろう。

（４）５号住居址（第24図）

Ａ区Ｅ・Ｄ－11・12・13グリッドで検出された。排水のために掘削したトレンチで北壁の一部を壊してしまったが、東壁、南壁、西壁及び北壁の一部を検出した。５ｍ×６ｍの方形を呈し、覆土の厚さは約25cmある。

竈は北壁のほぼ中央で発見された。礫が芯材として用いられていた。また、焚口から、約30cm奥に、支石が検出された。

竈の東側には棚状施設が検出され、甕（第25図３）と台付鉢（４）が伏せた状態で検出された。

本住居址内床面上に炭化物が散在していた。幅約20cm、長さ120cmほどの大きな木材も検出された。

また竈の東側、竈より約１ｍの距離をおいて、床面に炭化した板材が径約50cmの円形に整然と並んで発見された。調査した結果、いわゆる貯蔵穴であることが判明した。

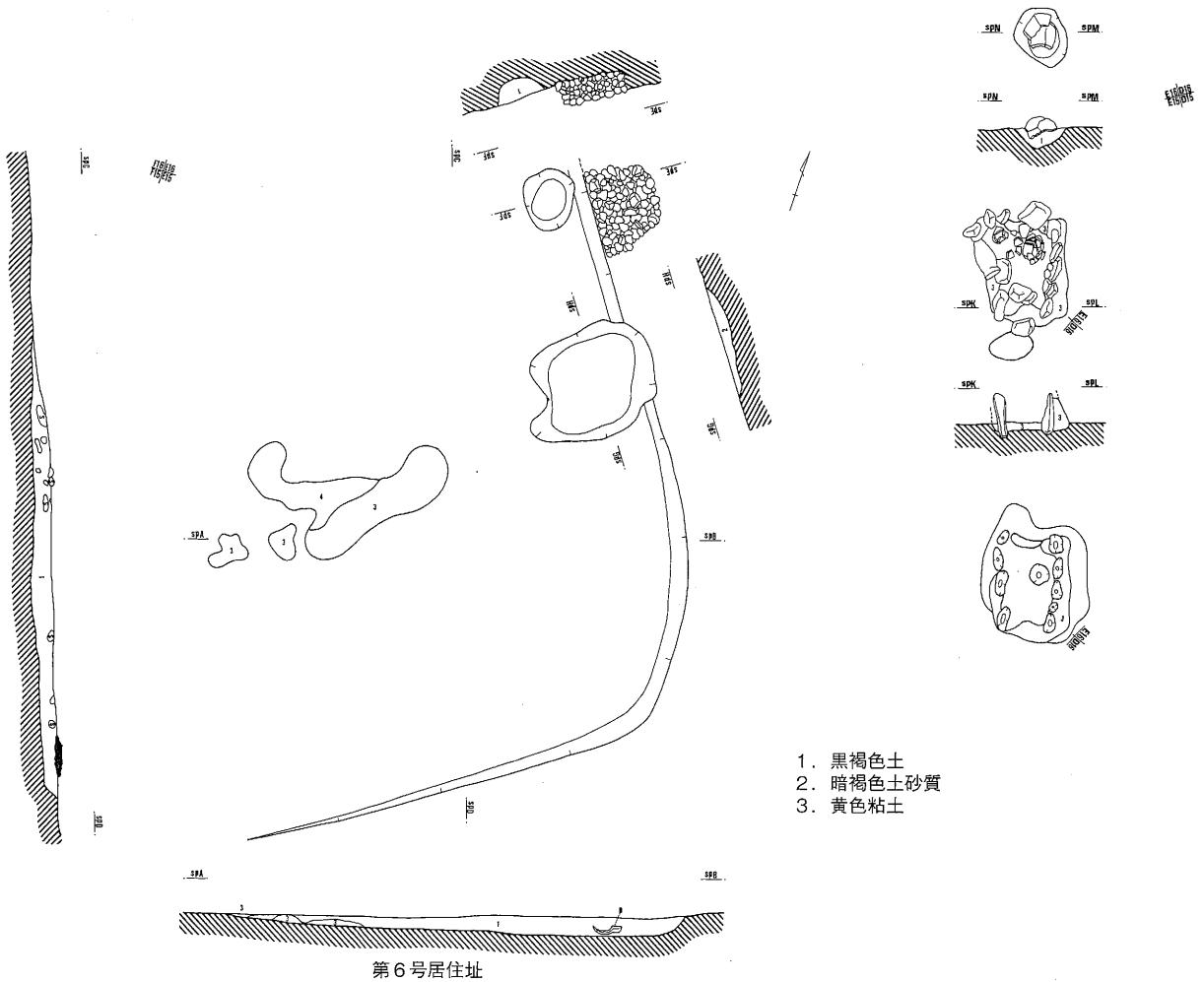
蓋は全部で四枚の板材で構成され、板材の大きさは、それぞれ48×17、56×14、61×14、48×10cmほどあった。

また、北より数えて二枚目の板材には端から約２cmの位置に一辺３cmのホゾ穴が穿孔されていた。

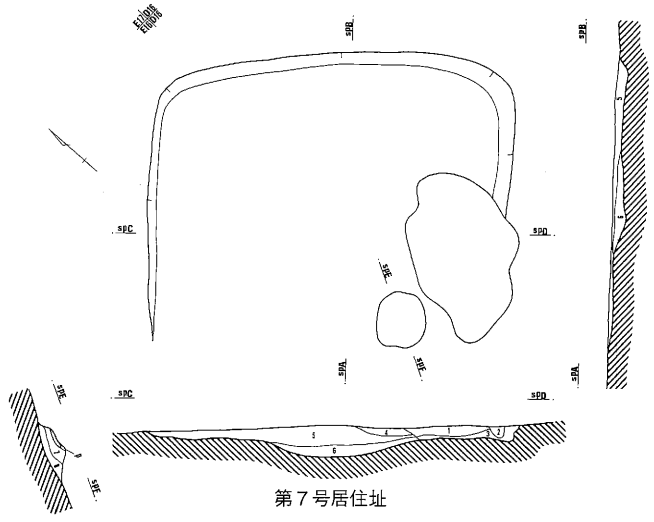
蓋がされた貯蔵穴は径約50cm、深さ28cm、一部フラスコ状を呈していた。

覆土内遺物（第25図１～４）

１と２はいわゆるロクロ甕で、下半部を欠く。３は口縁部が小さく外反し、胴部の中程がやや膨らみ、底部にいたる器形である。胴部上半の外面

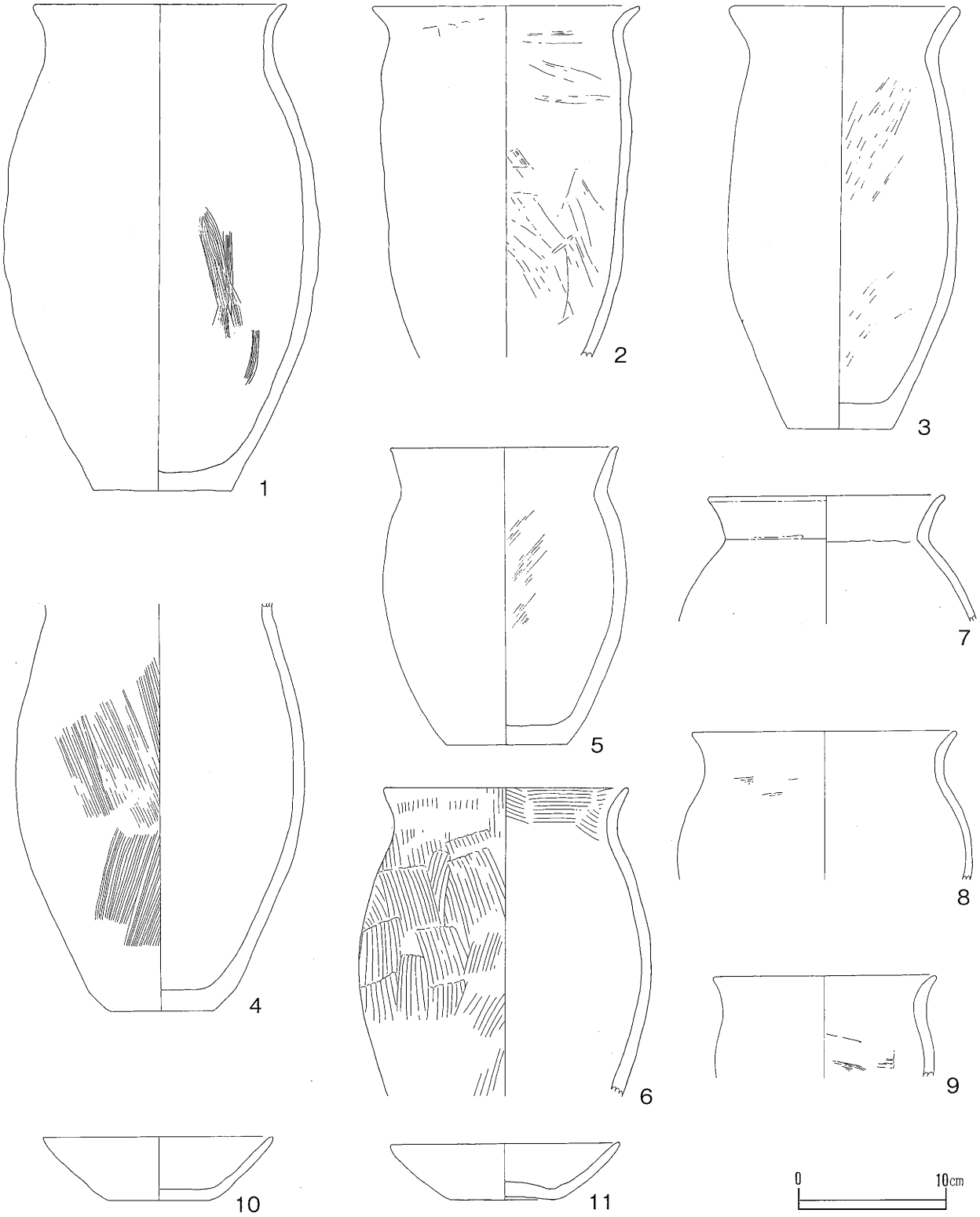


第６号居住址



第７号居住址

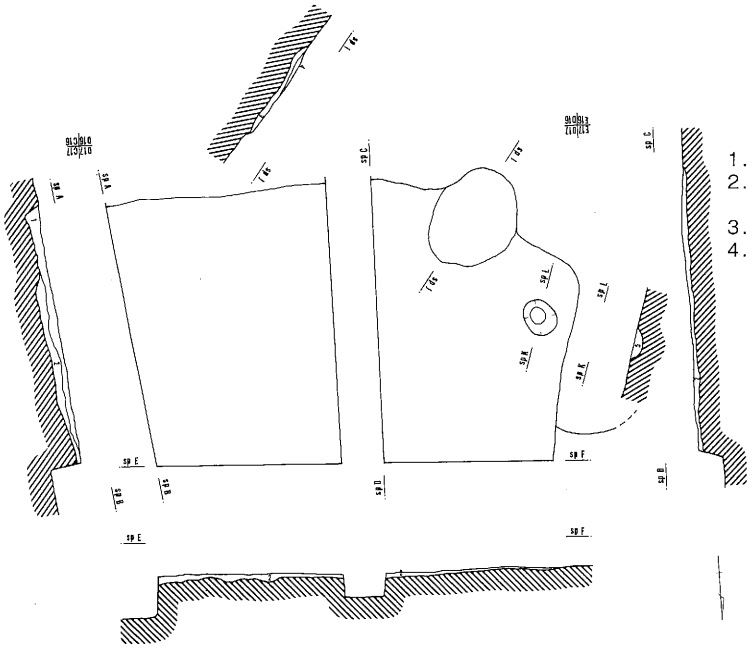
第26図　第６・７号住居址



第27図　第６号住居址出土遺物

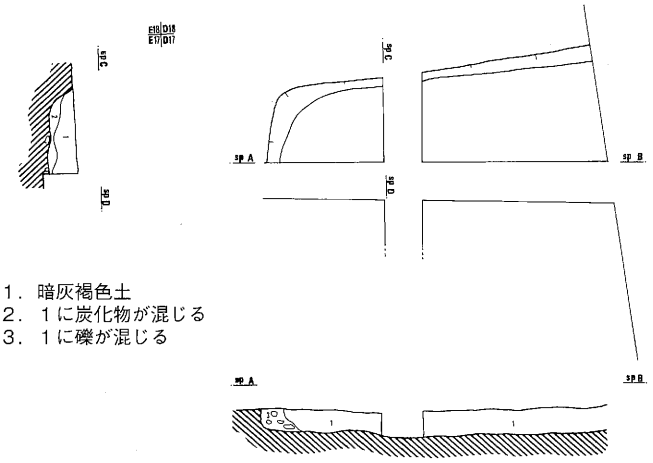
は縦方向のハケメ、下半部にはやや斜行するハケメ、口縁部内面には横方向のハケメが観察される。４はわずかに口縁部が外反し、丸底のボール状を呈し、短い脚部をもつ。

１と２のようないわゆるロクロ甕と縦方向のハケメをもつ甕（３）とが共伴するかどうか疑問の残るところである。確かに住居址覆土一括であるが、１と２は混入と考えるべきであろうか。



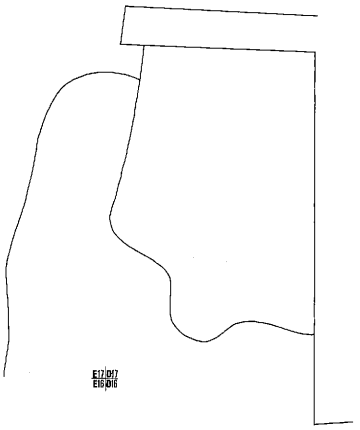
1．暗灰茶褐色土
2．1に炭化物、焼土粒が混じる
3．焼土（赤茶色）ブロック
4．暗灰色土に焼土粒が混じる

第８号居住址

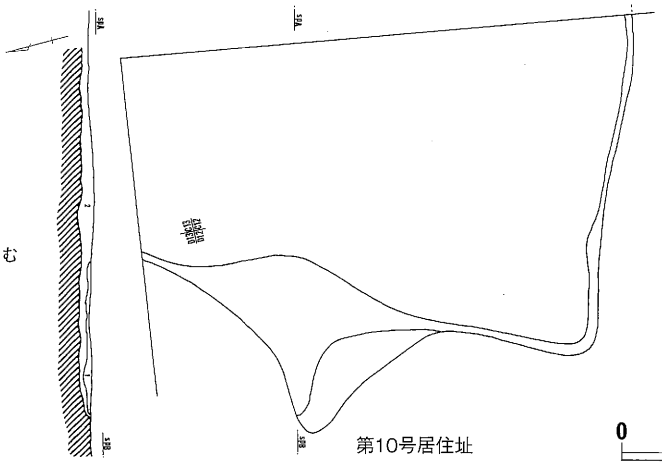


1．暗灰褐色土
2．1に炭化物が混じる
3．1に礫が混じる

第９号居住址



第11号居住址

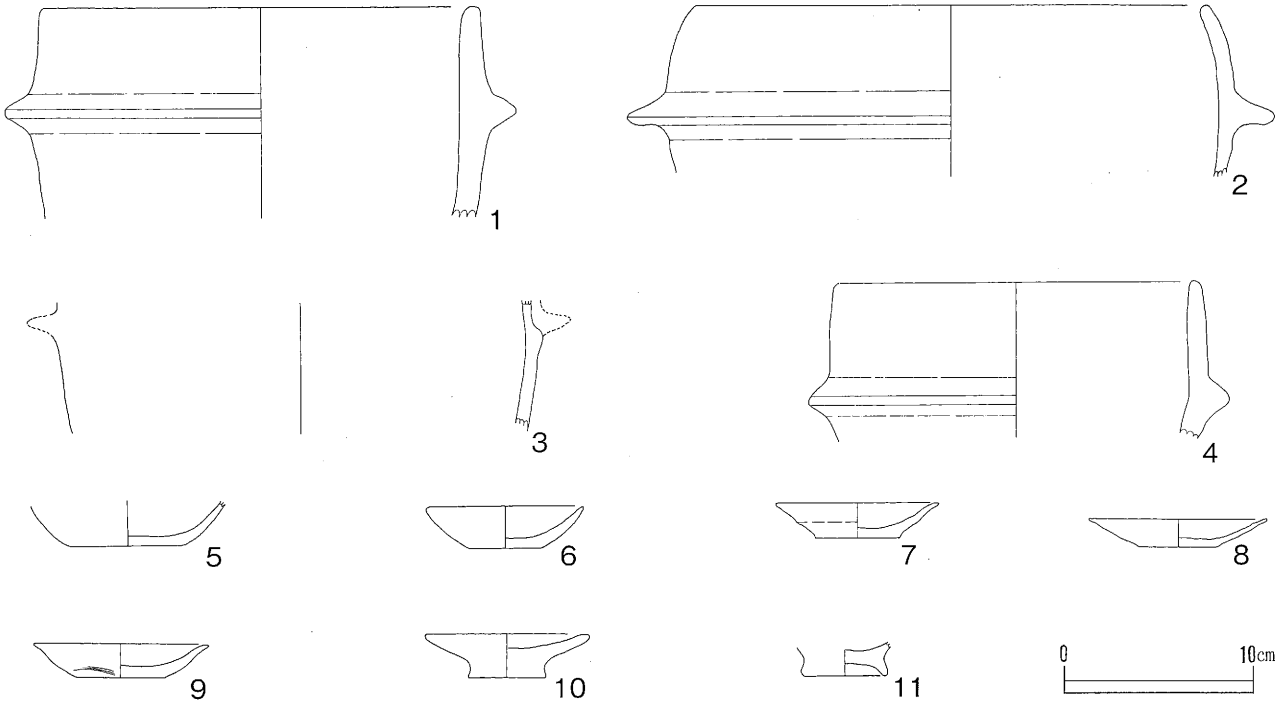


1．黒色土砂礫を含み、炭化物を含む
2．黒褐色土砂質

第10号居住址

0　2m

第28図　第８・９・10・11号住居址



第29図　第８号住居址出土遺物

（５）６号住居址（第26図下）

Ｂ区Ｄ－15、Ｅ―15・16グリットで東壁と南壁の一部が検出された。規模は明確ではないが、方形の住居址であろう。住居址としては規模が小さいのが気にかかるが、本稿では住居址として取り扱った。中央部に焼土のブロックと粘土粒を含んだ層が認められた。床面全体に認められないので、貼り床とは考えにくい。竪穴住居の壁が崩落していた可能性もある。

竈は東壁中央に検出された。竈は礫が芯材として使われ、礫を中心に粘土が積み上げられていた。竈内の焼土から半裁した甕（第27図５）が出土した。支脚として用いた可能性もある。

竈の１ｍ北側に貯蔵穴を検出された。貯蔵穴からは甕（第27図１）が出土された。

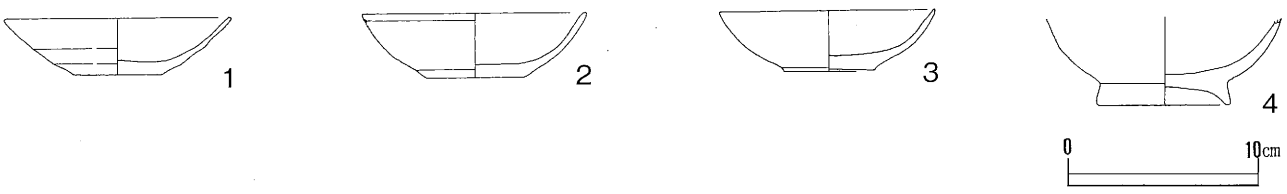
また東壁の外側には２～５㎝の小礫が約60㎝四方に集められていたが、本住居址と関連するかどうかは明かにできなかった。

覆土内出土遺物（第27図１～11）

甕９、杯４個体が測図できた。甕は１．４．６のように口縁部がゆるく外販し、胴部中位に最大径があり長胴なもの、２．３のように口縁部が外反し、そのまま底部に至る筒状のもの、５、９のように胴が短寸なもの、７．８のように口縁部が「く」の字状に外反し、丸い胴部をもつものがある。長胴甕４．６の外面には縦方向のハケメが残る。それに対して、筒状の甕は内面にヘラケズリ痕が残る。

四つに分類できる甕は住居の覆土一括資料であり、共伴関係にあると考えて良いであろう。

しかし、長胴甕と短寸な甕、丸胴甕は器種の違いと考えることができるが、筒状の胴部をもつ甕は長胴甕とは器種的に重複する。今後の資料の蓄積を待ちたいが、長胴甕と筒状の胴部をもつ長胴甕は編年的に細分できるものか、系譜的な差異なのかを検討していく必要があろう。杯は回転台整



第30図　第９号住居址出土遺物

形されるが、口縁部に比して、底径がやや小さい。

（6）7号住居址（第26図下）

B区E・D—16グリットで検出した。東壁と北壁、南壁の一部を検出し、東壁の長さは2.8mある。小型ではあるが方形の住居址と考えられる。

竈は南壁から検出されたが、一部、竈が二つにわれたように、竈の内壁を上に向けて検出された。土器片が竈構築材として使われている。

なお、本住居址からは土師器片が出土しているが、図示し得るものはなかった。

（7）8号住居址（第28図上）

B区D－18グリットで検出した。西壁と南壁の一部が検出された。規模は明確に出来なかったが方形を呈すものと思われる。

竈は焼土のブロックが検出されただけで構築材等は確認されなかった。

柱穴が1箇所南西コーナーから検出された。底には平石が置かれていた。

覆土内遺物（第29図1～11）

羽釜はいずれも胴部下半部を欠くが3点、小型の杯6点検出された。杯10. 11には高台が付く。

羽釜の存在や杯がいずれも口径が小さく浅いことから、おそらく平安時代末期のものであろう。

（8）9号住居址（第28図中左）

B区D－17グリットで検出した。北壁と西壁の一部が検出されたのみで、規模は明らかではないが方形を呈す。竈は確認されていない。

覆土内出土遺物（第30図）

杯が4点検出されている。1～3は回転台整形され、杯身がやや外に湾曲して底部に至る器形となる。口径に比して底径が小さい。4は高台をもつ。杯釉陶器を模倣したものであろうか。奈良～平安時代かけてものと考えられよう。

（9）10号住居址（第28図下）

B区E—17グリットでわずかに、床面のみを検出したものである。平屋建物址の可能性もある。

（10）第11号住居址（第16図中右）

西壁と南壁の一部を検出した。1辺の規模は明らかではないが方形を示す。竈は検出されていない。西壁に焼土と炭化物が確認された。

2　土坑

（1）1号土坑（第31図1）

B区D・C—13グリッドで検出された。南側部分が排水路により撹乱されたため、平面形態・規模は明確ではない。覆土は検出面から約30cmを測り、底は平らである。覆土は黒褐色土の単層で遺物は土師器片が2点出土した。

（2）2号土坑（第31図2）

B区D—14グリッドで検出された。平面形態は瓢箪形で長径約80cm、短径が約60cmを測る。覆土は暗褐色土の単層である。遺物の出土はなかった。

（3）3号土坑（第31図3）

B区D—16グリッドで検出された。平面形態は方形で1辺約60cmを測る。深さは検出面から18cmを測る。覆土は2層に分層された。上層は暗褐色土で下層では焼土粒が混じる。遺物の出土はなかった。

（4）4号土坑（第31図4）

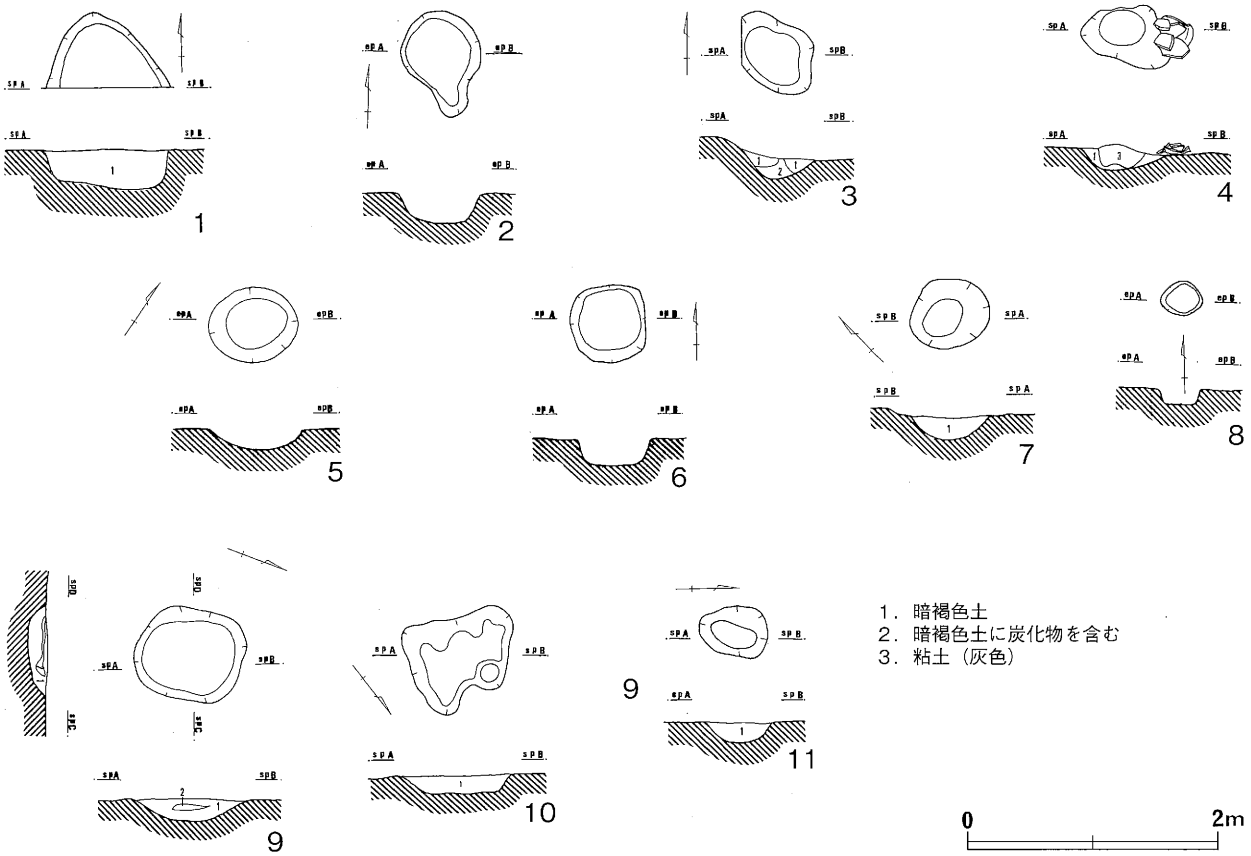
B区D—13グリッドで検出された。平面形態は瓢箪形で長径約70cm、短径約40cm、深さは検出面から約20cmを測る。覆土は、暗褐色土であったが土坑の中央に長径36cm、短径30cm、厚さ16cmで灰色粘土のブロックが検出された。

遺構検出面で甑が潰れた状態で出土した。

遺物（第32図）

棒状取手を胴部にもつ甑である。口縁部は緩やかに外反する。

外面の上半部はヨコナデ、内面の上部と外面の下部にハケメ痕が残る。中位はナデが施される。



第31図　遺構図・土坑

（5）５号土坑（第31図５）

Ｂ区Ｄ―16・17グリッドで検出された。平面形態は長円形で長径約70cm、短径60cm、深さは検出面から16cmを測る。

覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土しなかった。

（6）６号土坑（第31図６）

Ｂ区Ｅ―14グリッドで検出された。平面形態は方形で約60cm×約60cm、検出面から深さは24cmを測る。箱型に掘りこまれ底は平らである。

覆土は暗褐色土の単層で遺物は出土しなかった。

（7）７号土坑（第31図７）

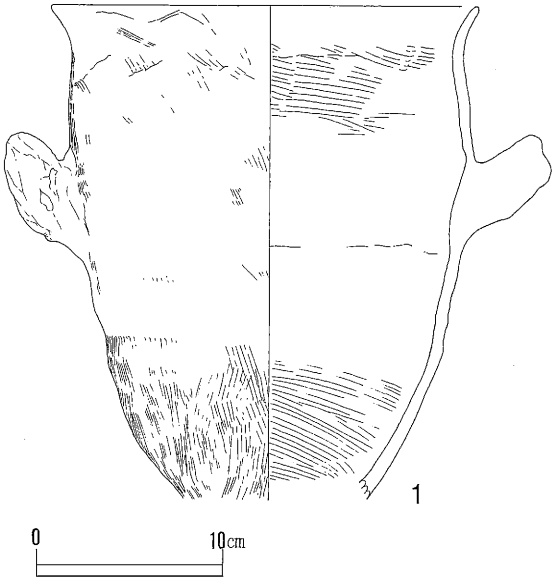
Ｂ区Ｄ―16グリッドで検出された。平面形態は長円形で長径約60cm、短径約50cm、深さは検出面から約20cmを測る。

覆土は暗灰褐色土の単層である。遺物は出土しなかった。

（8）８号土坑（第31図８）

Ｂ区Ｅ―14グリッドで検出された。平面形態は１辺約径28cm、不整形な方形である。検出面からの深さは12cmを測る。掘り込みは箱型で底面は平らである。

覆土は暗褐色土の単層で遺物は出土しなかった。



第32図　１号土杭出土遺物

（9）9号土坑（第31図9）

B区D—17グリッドで検出された。平面形態はほぼ方形で約75cm×約85cm、深さは検出面から約20cmを測る。

覆土は暗褐色土の単層であるが、炭化物が混じる層が挟まれる。遺物は確認されていない。

(10) 10号土坑（第31図10）

A区D—12グリッドで検出された。平面形態は長方形で長径約90cm、短径約80cm、深さは検出面から16cmを測る。

覆土は暗褐色土の単層である。遺物はなく時代の特定は出来ないが、2号住居址（奈良時代前半）の上層から検出された。奈良時代前半より新しいもの考える。

(11) 11号土坑（第31図11）

B区E—13グリッドで検出された。平面形態は長円形で長径約60cm×短径40cm、深さは検出面から約16cmを測る。覆土は暗褐色土で焼土粒と炭化粒子が混じる。

3　焼土

焼土を遺構とするには無理があるようであるが、住居址周辺に焼土のブロックが多く確認でき、用途は不明ではあるが、野外で火が使用された地点と考え、本報告書では遺構として扱う。

（1）1号焼土（第33図1）

B区C－14・15グリッドで検出された。調査区外へ延びている。調査区の壁に土師器と須恵器が密集し、数点の焼礫も確認された。範囲は調査区外にかかるため不明である。

遺物（第34図1・2）

実測可能な甕と杯がそれぞれ1点ある。1はロクロ甕で、口縁部の内面に横方向のハケメがある。2は小型の杯で回転台整形されている。平安時代のものであろう。

（2）2号焼土（第33図2）

B区D・E－17グリッドで検出された。規模は長径約70cm、短径約50cmの楕円形、焼土の厚さは4cmを測る。焼土を中心に炭化粒子と焼土粒子が径約3mの円形に分布している。

遺物は土師器片が数点出土したが実測可能なものはなかった。

（3）3号焼土（第33図3）

B区D－15・16グリッドで検出された。規模は長径約90cm、短径約60cmの楕円形である。

焼土のブロックの中に3基の円形の落ち込みが検出された。遺物は確認されていない。

（4）4号焼土（第33図4）

B区F・E－16グリッドで検出された。規模は長径160cm、短径120cmの楕円形で厚さは約20cmを測る。上面に礫が散らばり、竈を連想させる焼礫と粘土ブロックが焼土の上面から検出された。

焼土の断面は約20cmと厚い。炭化粒子が焼土を中心に径2mの範囲で分布していた。

焼土の下位に長径約70cm、短径約60cm、深さ約18cmの長円形の土坑が検出された。焼土との関係は明らかにすることができなかった。

遺物（第34図3～7）

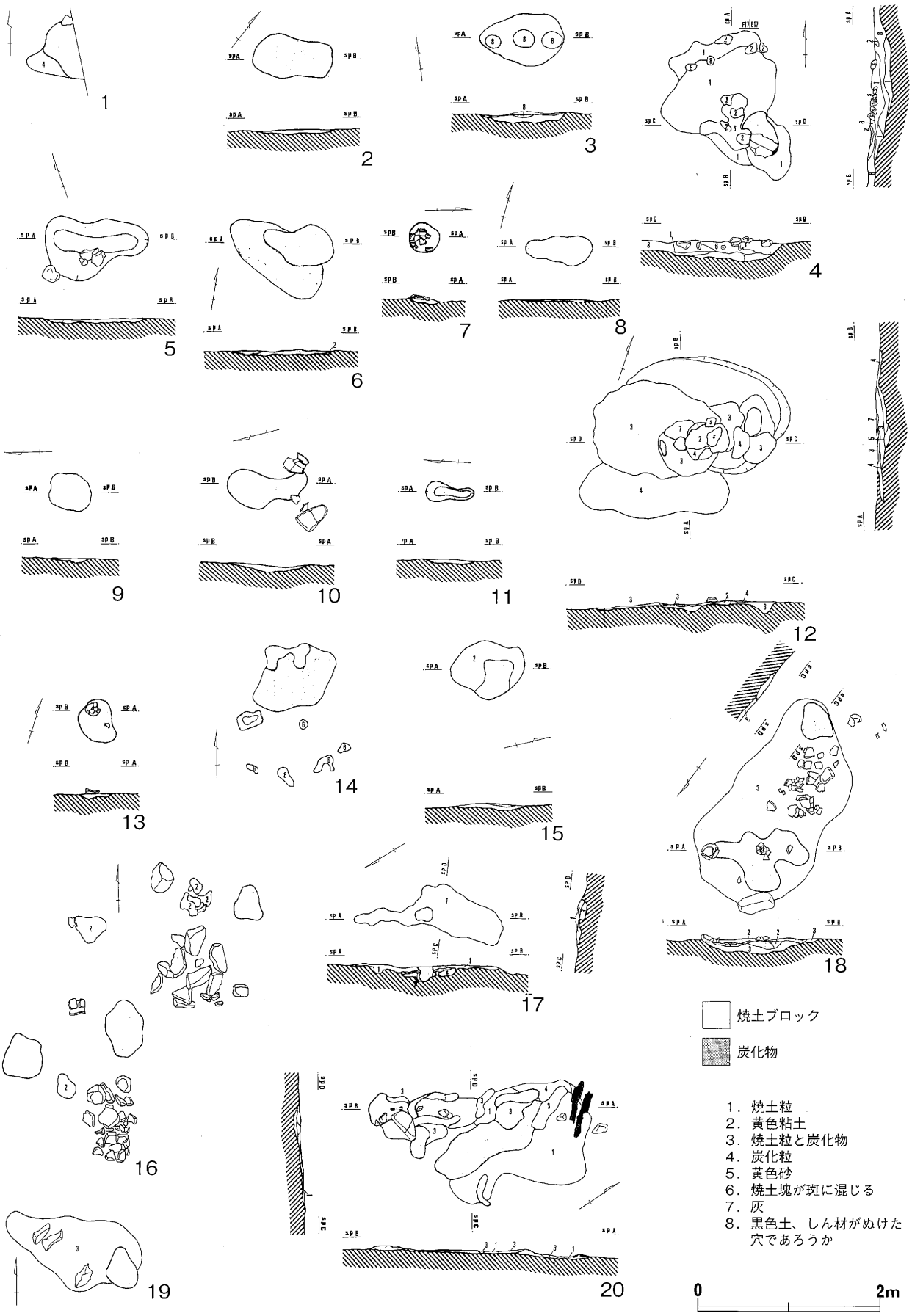
実測可能な遺物は甕が1点、杯が4点検出された。

3は口縁部が緩やかに外反し、胴部中位に最大径をもつ甕である。外面にハケメが観察される。

4～7は杯である。4は内面に黒色処理が施されている。6は底部にと内面に稜をもち、屈曲して底部にいたる。杯5．7も同様な器形である。

（5）5号焼土（第33図5）

B区　D－17・18グリッドで検出された。規模は長径70cm×短径約30cmの楕円形、焼土の厚さは約2cmを測る。地山の焼土化も弱く、2号焼土と類似し、同類の用途をもつ遺構である可能性が考えられる。


焼土ブロック
炭化物
1．焼土粒
2．黄色粘土
3．焼土粒と炭化物
4．炭化粒
5．黄色砂
6．焼土塊が斑に混じる
7．灰
8．黒色土、しん材がぬけた穴であろうか
0
2m

第33図　遺構図・焼土

（6）6号焼土（第33図6）

B区D－16グリッドで検出された。規模は長径110cm、短径80cmの楕円形、焼土の厚さは4cmを測る。焼土の層には赤色と黄色の二者がある。

遺物（第34図8～10）

実測可能な土師器の甕を3点検出した。いずれもロクロ整形の甕である。8は口縁部が「く」の字状に外反し、端部は指でつままれたように細くなり、胴部外面はヘラケズリされる。9も8とほぼ同様な器形となるが、口縁端部は丸く整形される。9の胴部内面にはカキメが観察できる。10も8と同様な器形となると思われるが、口縁部の中程がやや厚くなる。

この三点の甕はいわゆるロクロ整形甕の口縁のあり方を良く表している。甕の共伴関係をみると先述した口縁部がセットになることが多い。三様の口縁部形態が時間差なのか造り手の違いによるものか定かではない。

（7）7号焼土（第33図7）

B区C－14グリッドで検出された。規模は径約30cmの円形、厚さは4cmを測る。規模は小さい。上面に土師器を検出するが、焼土と土師器の間に黒色土が1cmほど堆積しているため遺構との関連がない可能性もある。

遺物（第34図11）

口縁部がゆるく外反し、胴部上位に最大径をもつロクロ整形の甕である。

（8）8号焼土（第33図8）

B区D－18グリッドで検出された。規模は長径約70cm、短径約30cmの楕円形、焼土の厚さは2cmを測る。使われた期間の短い焼土と考える。

（9）9号焼土（第33図9）

B区D・C－14グリッドで検出された。規模は約40cmの円形で焼土の厚さは4cmを測る。焼土層は薄く、使用された期間が短い焼土と考える。

（10）10号焼土（第33図10）

B区D・C－14グリッドで検出された。規模は長径100cm、短径60cmの瓢箪形で、焼土の厚さ4cmを測る。焼土層に焼礫が2点、外側に1点ある。

（11）11号焼土（第33図）

B区D－18グリッドで検出された。

規模は長径約50cm、短径20cmの瓢箪形で厚さは約4cmを測る。

（12）12号焼土（第33図12）

B区D－19グリッドで検出された。

規模は長径約70cm、短径約60cmの円形で焼土の厚さ約20cmを測る。検出面には粘土ブロック、焼礫そして土師器片が散在し、その下部に焼土層がひろがっていた。周辺に炭化粒と焼土が約3mの範囲で広がる。

粘土、焼礫はかまどの構築材として使用された可能性が考えられ、竈の壊れたものの可能性がある。

遺物（第34図12～22）

実測可能な甕が8点、杯が3点、検出された。

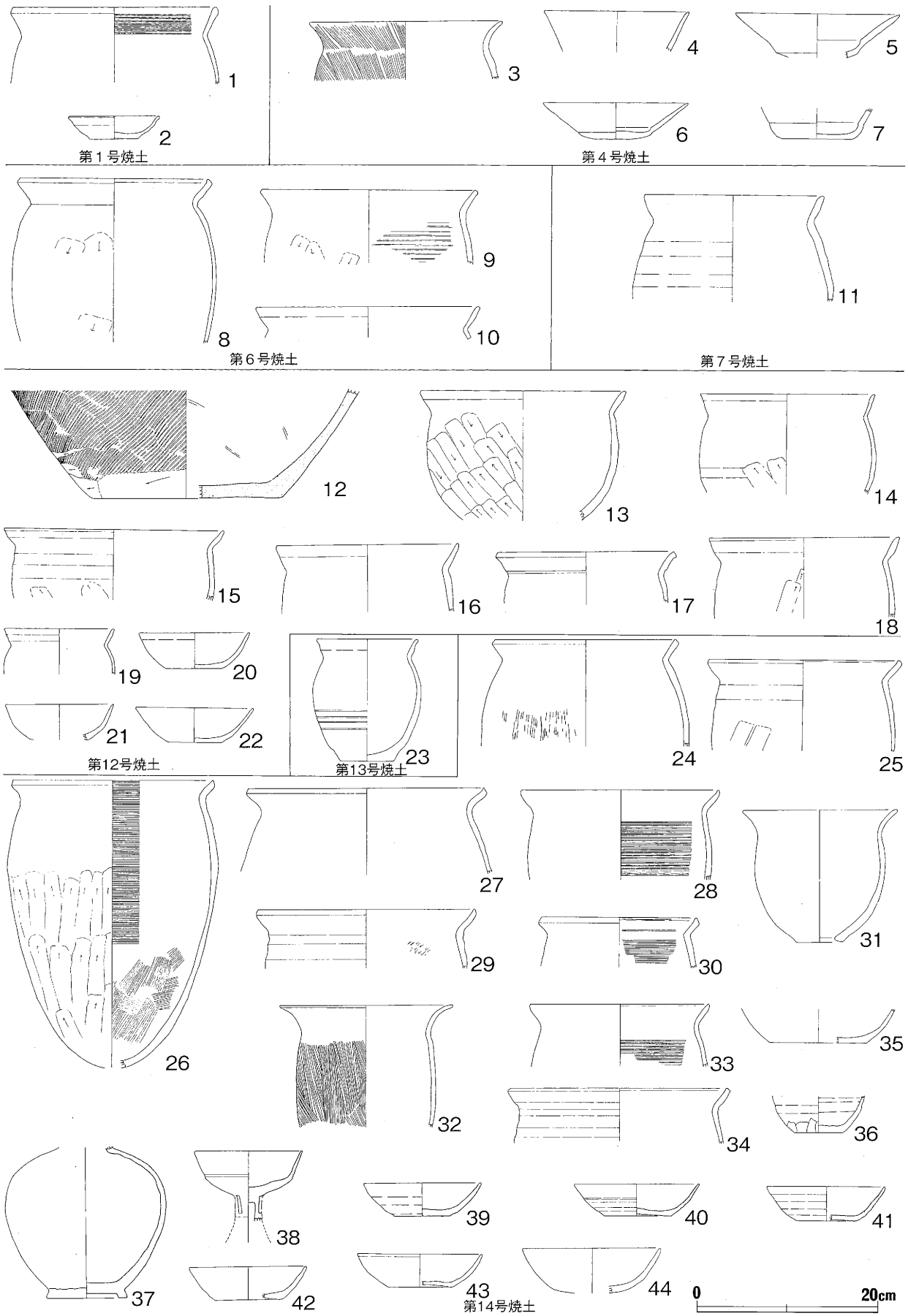
12は須恵器大甕の底である。胴部下端にヨコ方向のヘラケズリが認められる。13は丸い胴部をもつロクロ整形の甕である。胴部上半部は上から下に向かって斜めにヘラケズリ、胴部下部は下から上に斜めのヘラケズリが認められる。14も13と同様な器形となるロクロ整形の甕である。

15から19はロクロ整形の甕である。15、18には底部から胴部上半部の方向にヘラケズリが観察される。口縁端部には丸いものと面を持つものが大半であるが、17は口縁端部に面をもつ。

20から22はやや内湾気味に立ちあがる杯である。口径部に比して底径はやや小さい。

（13）13号焼土（第33図13）

B区D－14グリッドで検出された。径約40cmの楕円形で、焼土の厚さは約5cmを測る。小型であるため短期間の焼土と考える。完形の甕が1点検出された。


1
2
第１号焼土
3
4
5
6
7
第４号焼土
8
9
10
第６号焼土
11
第７号焼土
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
第12号焼土
23
第13号焼土
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
第14号焼土
0
20cm

第34図　焼土出土遺物

遺物（第34図23）

23は口縁部が緩やかに外反し、胴部最大径を胴部の中位にもつロクロ整形の甕である。胴部最大幅下に４条の沈線をもつ。

(14) 14号焼土（第33図14）

Ａ区Ｃ－11・12グリッドで検出された。規模は径約１ｍの楕円形で、焼土の厚さは15cmを測る。上部に焼礫、土師器片、完形の壺などが散在する。焼土のブロックの周囲にも焼土が散在している。

竈の壊れたものではないかと考える。

遺物（第34図26～44）

実測可能な遺物は甕11点、土師器杯３点、須恵器の杯３点、甑１点、須恵器の高坏１点、須恵器の壺１点が検出された。

26から30、33、34はロクロ整形の甕である。26はほぼ完形品で、ロクロの特徴を良く示している。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部の上位に最大径をもち丸底の底部にいたる器形となる。口縁端部は面とりされ、胴部最大径あたりまで、底部から胴部上半方向に縦方向のヘラケズリがされる。内面にはカキメ、底部付近の内面にはハケ整形痕が残る。

31は口縁部が大きく外反し、短寸な小型の甕、32は31と同様に口縁部が大きく外反し、やや胴部に膨らみをもつ円筒状の甕であろう。胴部外面は縦方向のハケ整形が行われている。

37は須恵器壷、38は須恵器の高杯で脚部に四角いすかし窓をもつ。39から41は須恵器杯、42から44は土師器の杯である。須恵器杯はやや杯身が内湾するように立ち上がる。

(15) 15号焼土（第33図15）

Ａ区Ｅ―11グリッドで検出された。径約70cmの円形に広がる黄色粘土層の上に焼土がのる。焼土層は径約20cmの円形に堆積し、厚さ２cmを測る。焼土層は薄い。

(16) 16号焼土（第33図16）

Ａ区Ｄ－11、Ｃ－11・12グリッドで検出された。焼土層が近接して３箇所検出された。それぞれ円形で径約40cmの大きさをもつ焼土層が２箇所、径約30cmの焼土層が１箇所、それぞれの焼土層の厚さは約10cmを測る。

これらの焼土層を中心に、約４ｍ四方に焼礫、炭化粒、焼土粒、粘土ブロック、土師器、須恵器が散在している。

検出当初は３箇所の別々の遺構と考えた。しかし、最も地山の焼土が強い西側の焼土層を本来のものと考え、それが飛散したものではなかろうか。

西側約２ｍに５号住居址があり、５号住居址の野外施設の可能性も否定できない。

(17) 17号焼土（第33図17）

Ａ区Ｆ－12グリッドで検出された。規模は長径約20cm×短径約12cmの楕円形で、焼土の厚さは約14cmを測る。

焼土層を中心に約160cmの楕円形に炭化粒と焼土粒が散在している。５号住居址の東側１ｍの所にあり、検出面が同じで同時期の施設の可能性も考えられる。

(18) 18号焼土（第33図18）

Ａ区Ｃ・Ｄ－12グリッドで検出された。規模は長径240cm×短径約120cmの浅い皿状の土坑の上面に焼土層が堆積する。焼土は土坑の北側と南側の二箇所あり、それをおおうように炭化粒子や焼土、焼礫、粘土、土器が分布している。

南側の焼土は黄色を呈し、焼土層も厚く、焼土の度合いが強い。一方、北側の焼土は赤褐色を呈するが、やや焼土の度合いが低いように見える。

(19) 19号焼土（第33図19）

Ａ区Ｄ－12・13グリッドで検出された。規模は長径約40cm、短径約30cmの楕円形で厚さは２cmを測る。焼礫が数点と西側に約１ｍ、幅約40cmの焼土と炭化粒が広がっていた。５号住居址の竈西側直上から検出されおり、５号住居址の竈の一部の可能性もある。

(20) 20号焼土（33図20）

A区F－11・12グリッドで検出された。焼土は南側に径約50cmの円形を成し、厚さ約４cmの焼土と、北側に約40×10cmの焼土２箇所を検出した。北側の焼土は炭化物・焼土の上にあり、南から流れたものと考える。焼土と炭化物は約120×240cmの範囲に検出された。焼礫や遺物は検出されていない。

4　グリッド出土の遺物

（1）土器

奈良・平安時代の土器が大半であるが、古墳時代の土器も少量確認されている。そのため、説明がやや煩雑になるが、古墳時代の土器も含めて、グリッド出土の土器について記述する。

第35図１から５は古墳時代の土器であると考える。１は口縁部が大きく外反し、口縁短部が折り返し口縁となる壷であろう。２は有段口縁の壷の口縁部、５は小型丸底壷であろう。

７から11はハケメ整形が顕著に認められる一群である。本稿では一応古墳時代の遺物と考えたが、奈良時代まで時代が下がる可能性もある。

12. 13は外面がハケメ成形される長胴甕と考える。

第35図14から第37図40までロクロ整形の甕である。

実測図では胴部上半から口縁部にかけてのものが多くなってしまうが、胴部下半部はヘラケズリされるものと思われる。

先述したように口縁部の形態は多様であるが、それが時間差に起因するものか、造り手に起因するか明かではない。

第37図41、42は小型のロクロ整形の甕である。

第37図47から第38図105までは杯である。杯は丸底様のものから、口径に比して底径の大きいものから小さなものへと変化し、やがて、浅く皿状になると考えられているが、その間に明確な線を引くことができない。概ね奈良時代から平安時代末期のものまで含めて一括した。

47から48は若干の綾をもって丸底にいたる。49は若干趣を異にして、底部に縦方向のヘラケズリが認められる。

第38図84から98はいわゆる高脚高台をもつ類であり、古代末期に編年されるものである。

99から105までは椀状の杯である。灰釉陶器を模倣したものであろう。

第38図106から109は高杯である。109は脚部が長く、底部の開きが小さい。

第39図はグリッド出土の須恵器を集成した。111は壷、112から114は甕である。

杯118は口径に比して底径が大きく、杯身も直立することから中島英子編年第３期第３段階に相当しようか。杯117は口径に比して底径が大きく、直立的な杯身をもち、高台がつく。高台の径は大きく、底部は平坦であることなどを加味すれば、中島編年第４期第１段階に相当すると考える。杯118は口径に比して底径が小さく、中島編年第４期第１あるいは２段階の所産であろう。杯119は中島編年５期以降のものであろう。

120. 121の杯蓋は宝珠状のつまみをもち、120の蓋縁は屈曲しない。やはり、中島編年５期以降のものであろうか。

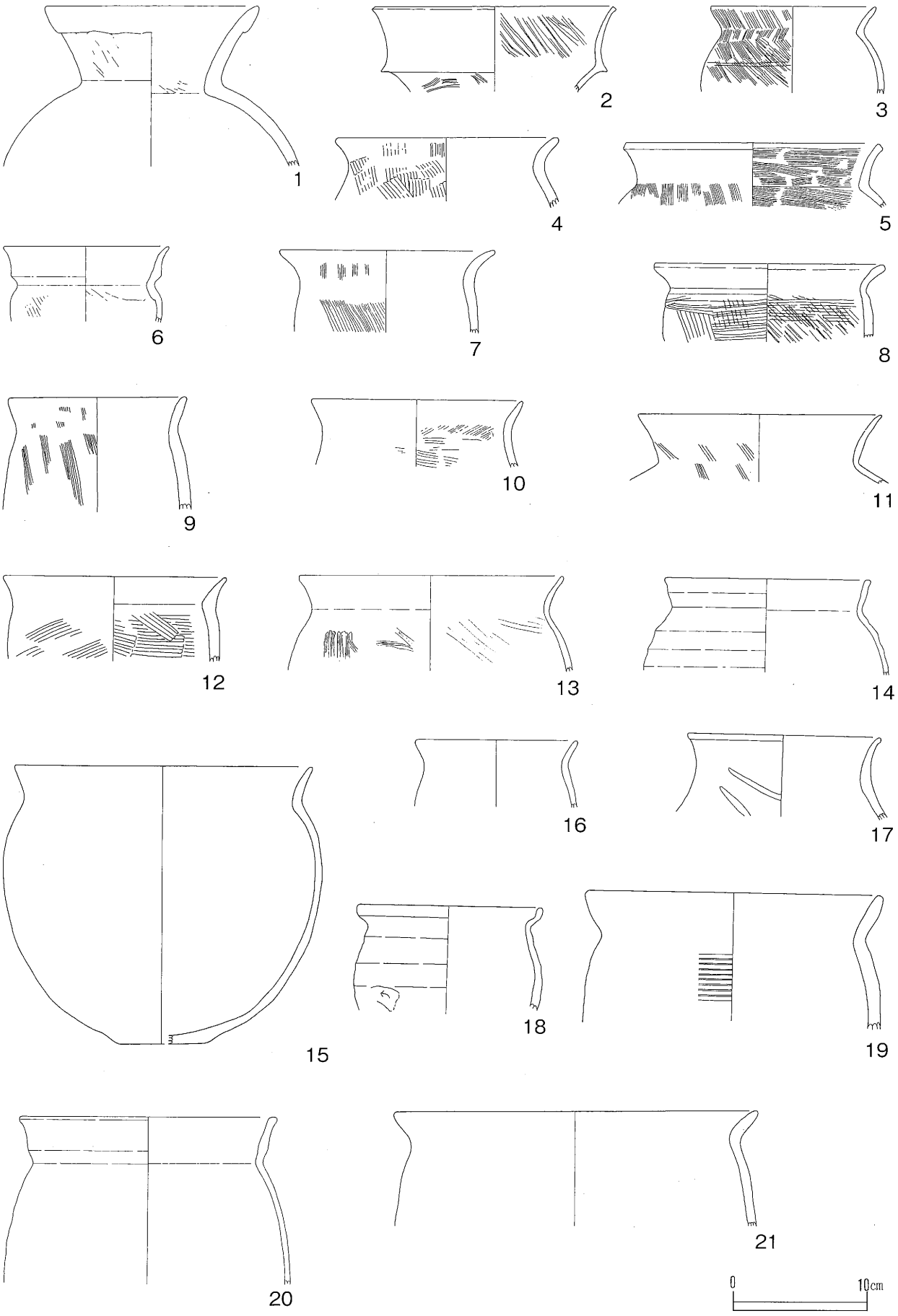
122はすり鉢、123は壷の底部であろう。

（2）その他の遺物（第40図）

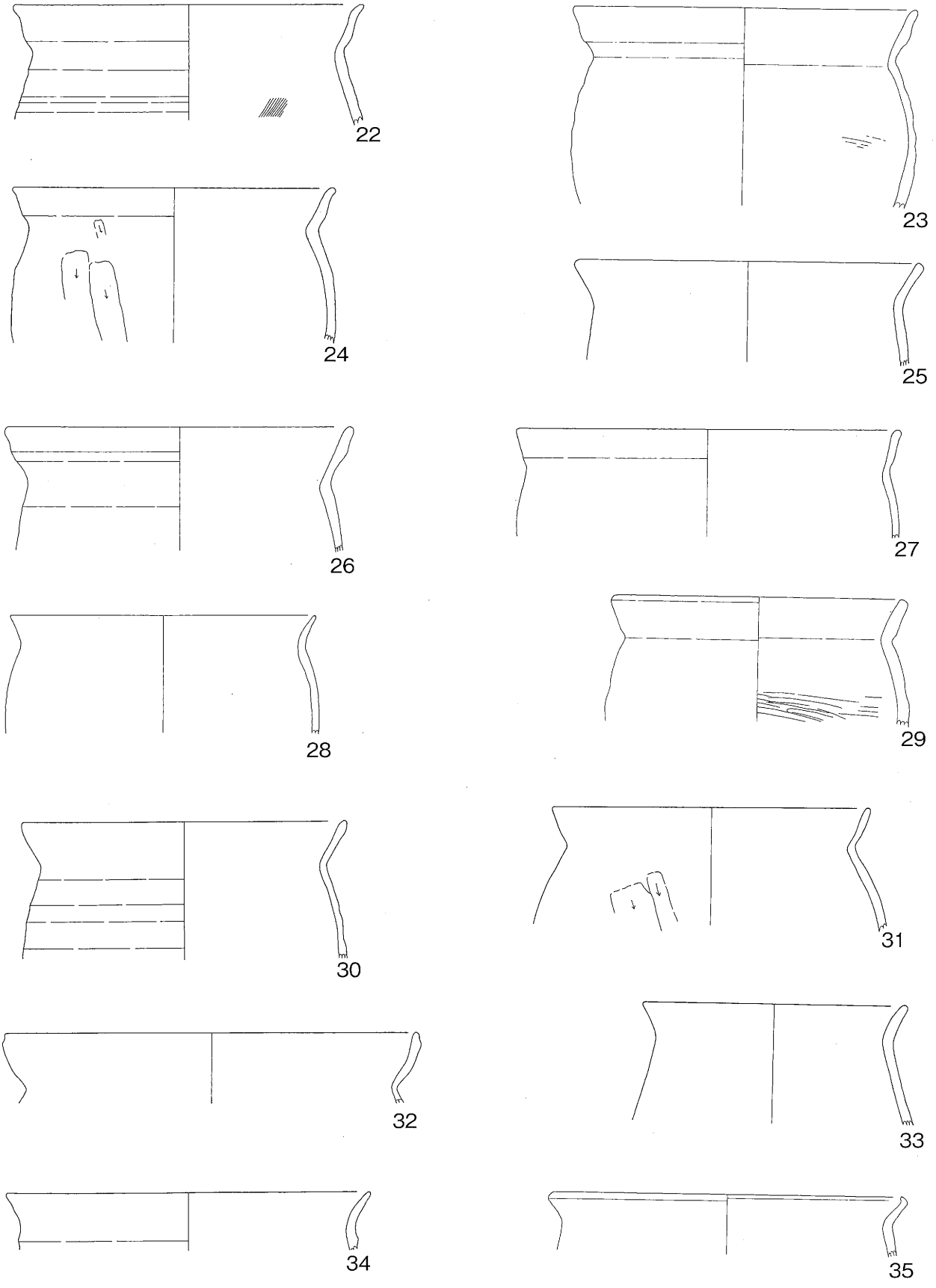
１はスタンプ状の石器である。断面四角形で、側面がやや内湾する側縁をもった四角錐状を呈する。第４号住居址で検出された。底面に印字がないが、古代の印と形状が良く似ている。

２は土製の紡錘車。２号住居址で検出された。

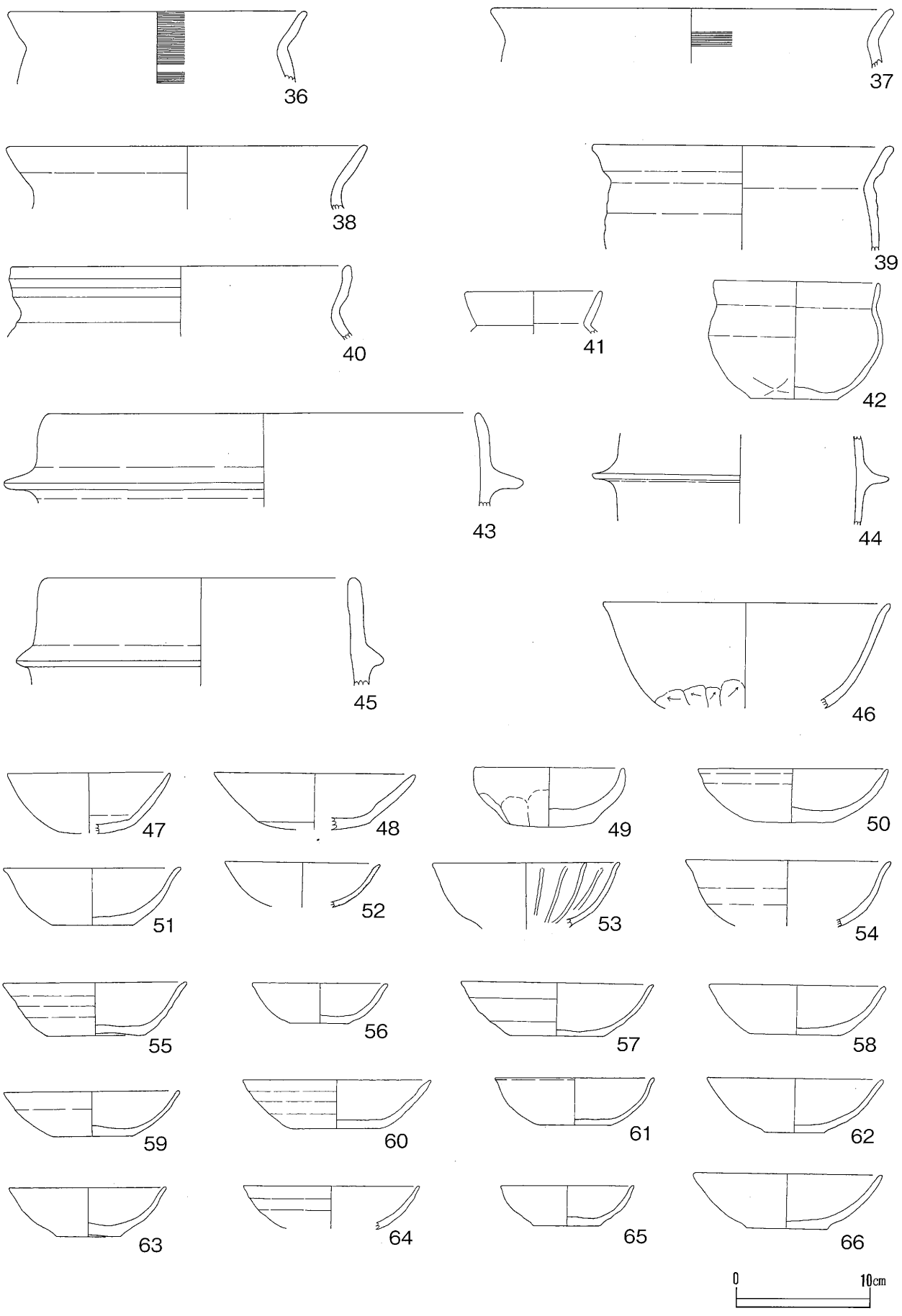
３は管玉。４は小さな蓋状の金属器である。５は鉄製の鏡である。



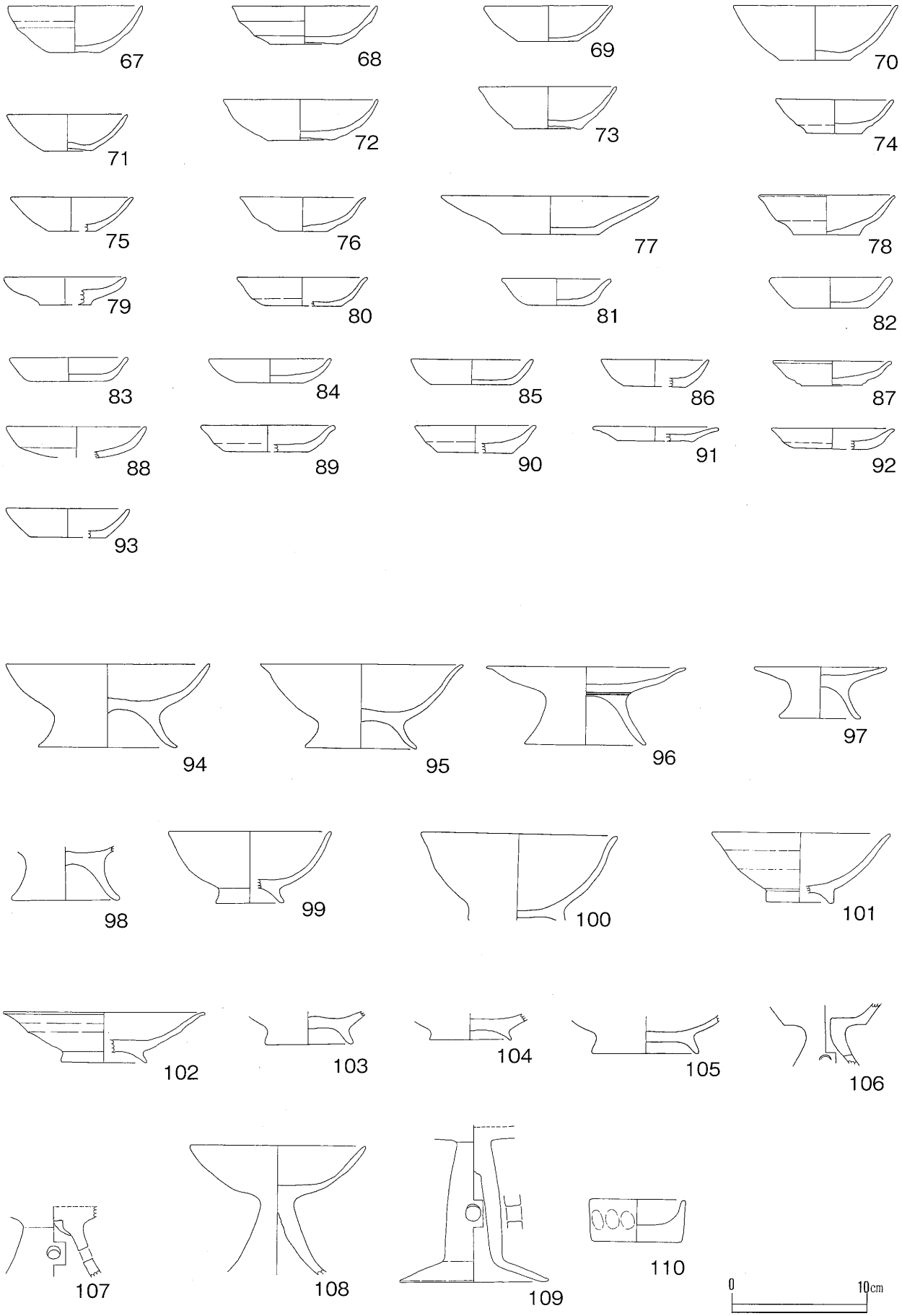
第35図　グリッド出土遺物



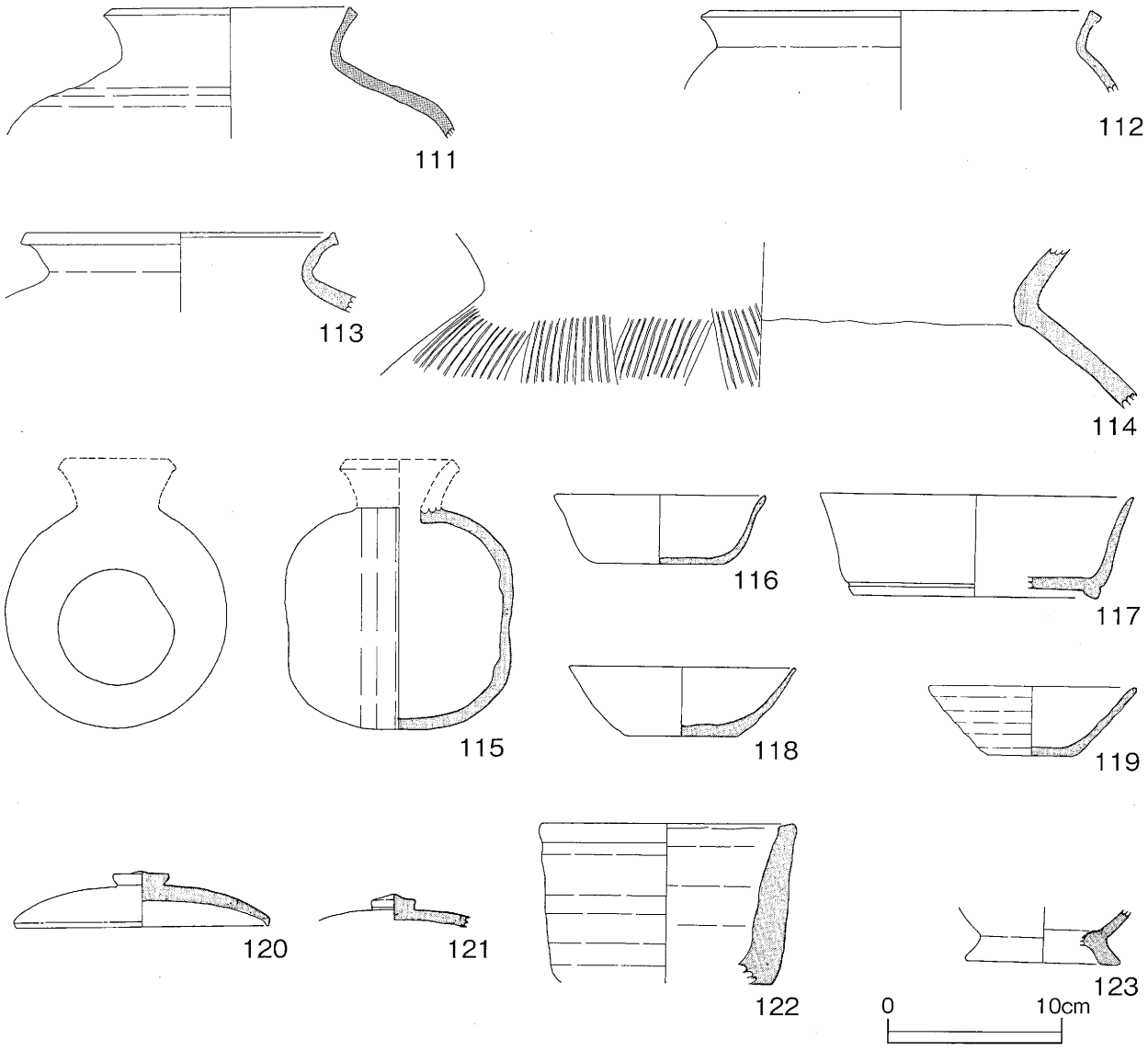
第36図　グリッド出土遺物



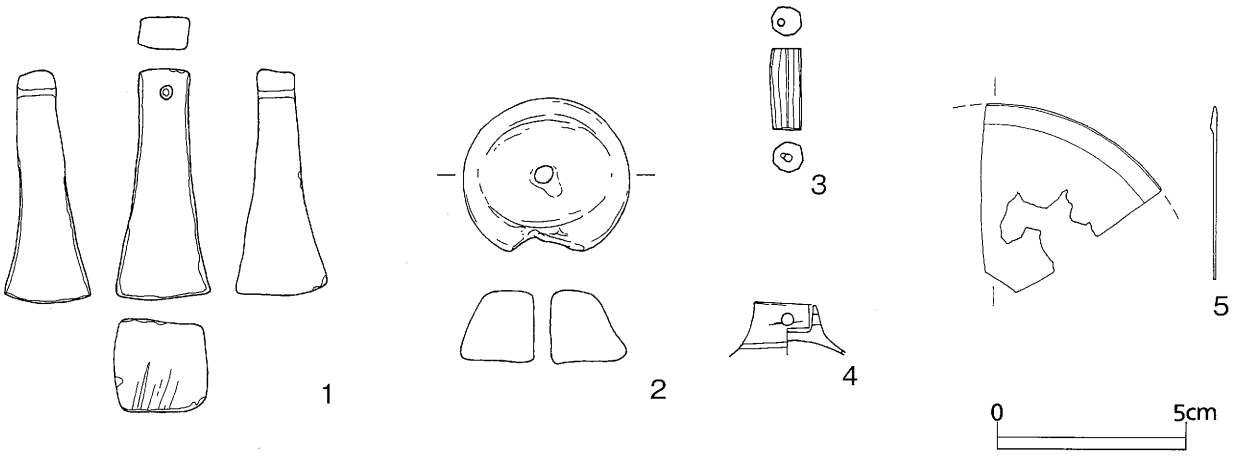
第37図　グリッド出土遺物



第38図　グリッド出土遺物



第39図　グリッド出土遺物



第40図　出土遺物

第５節　近世・近代

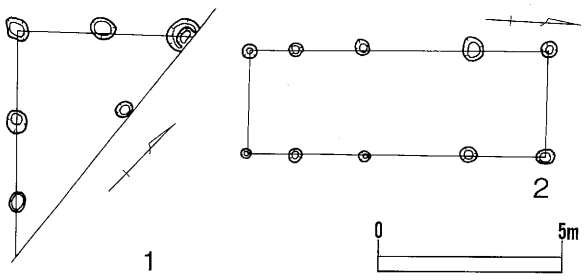
１　掘立柱建物址

１号建物址（第41図）

Ｂ区Ｄ－15・16・17グリッドで検出された。柱の径約50cm～90cmで、調査区外にのびる。そのため全容は確認できない。遺物が無く時代は不明であるが、鏡破片が同地層から出土している。

２号建物址（第41図）

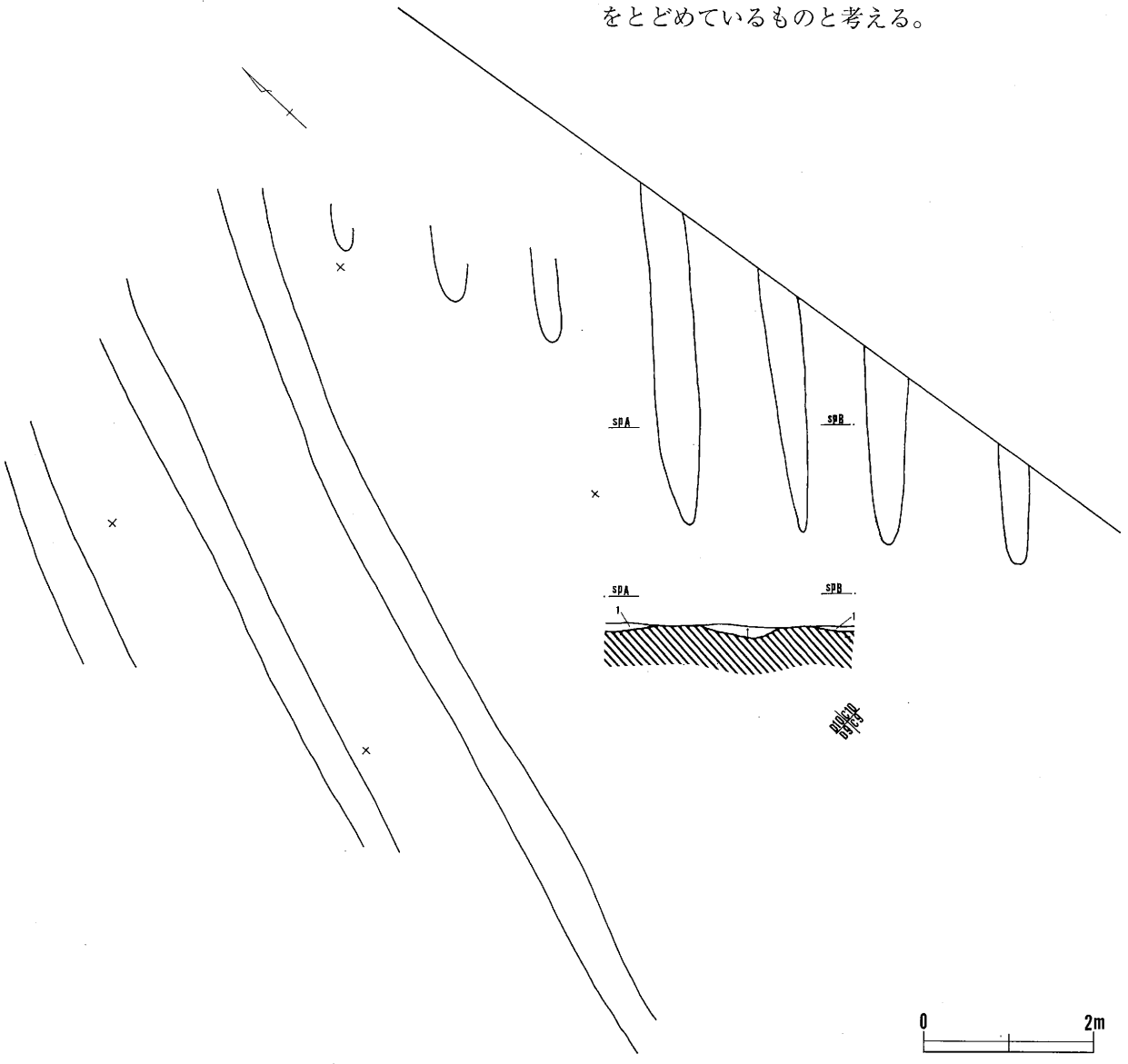
Ａ区Ｃ―８・９・10グリッドで検出された。規模は2.8m×８mで、柱の径20cm～60cmで柱の数は15基で遺物が無く時代は不明である。検出面から考えて近代の建物址とする。



第41図　掘立柱建物

２　畝状遺構（第42図）

Ａ区Ｃ・Ｄ・Ｅ―９・10・11・12グリッドで検出された。４層直上で、北東から南西にかけてと北西から南東に10条の畝が検出された。畑の畝とは断定は出来ないが、黄色砂が短時間で覆い現況をとどめているものと考える。



第42図　畝状遺構

3　井戸・排水路遺構（第43図）

井戸はA区D－4グリッドで検出された。規模は深さ約120cmで、径約90cmを計測する。

最近まで使用されており、近在の人の話によると50年前に井戸周り上部の石組を作り変えたという。

井戸の壁に使用されている礫1辺約10～20cm前後の角礫である。井戸の上方では1辺が40cm前後の平石が積まれている。井戸の底は泥炭層で、その上に10～30cmの平石が斑に敷かれている。

井戸には排水路が設けられている。排水溝の両側縁は約25cm前後の角礫で造られ、40×50cm前後の平石で整然と排水溝をおおっている。

石組みによる排水溝は井戸から約12m続き、それより下流では掘り込んだだけの溝になりB調査区まで続いている。

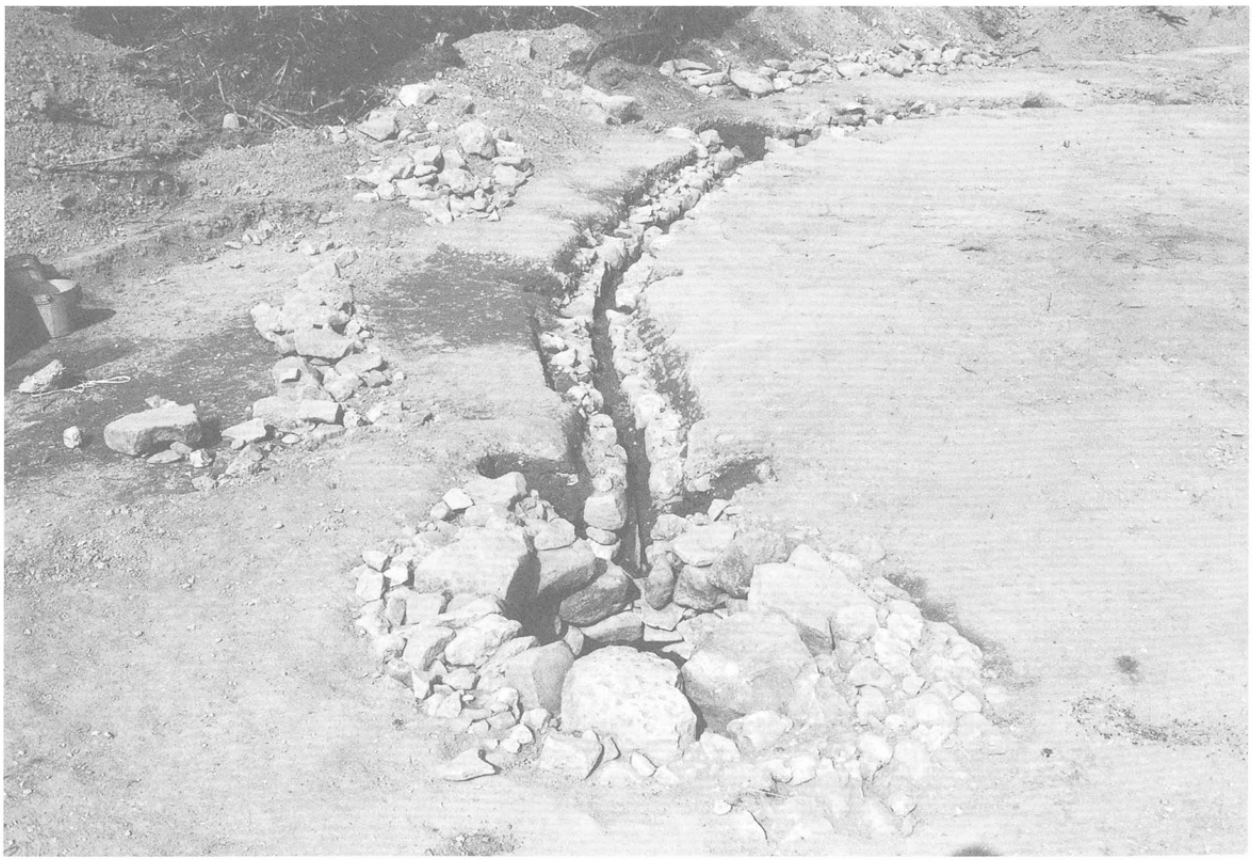
排水溝は井戸西側から西に向かい約3mの地点から、方向を北に向けゆるくカーブしながら斜面を下っている。

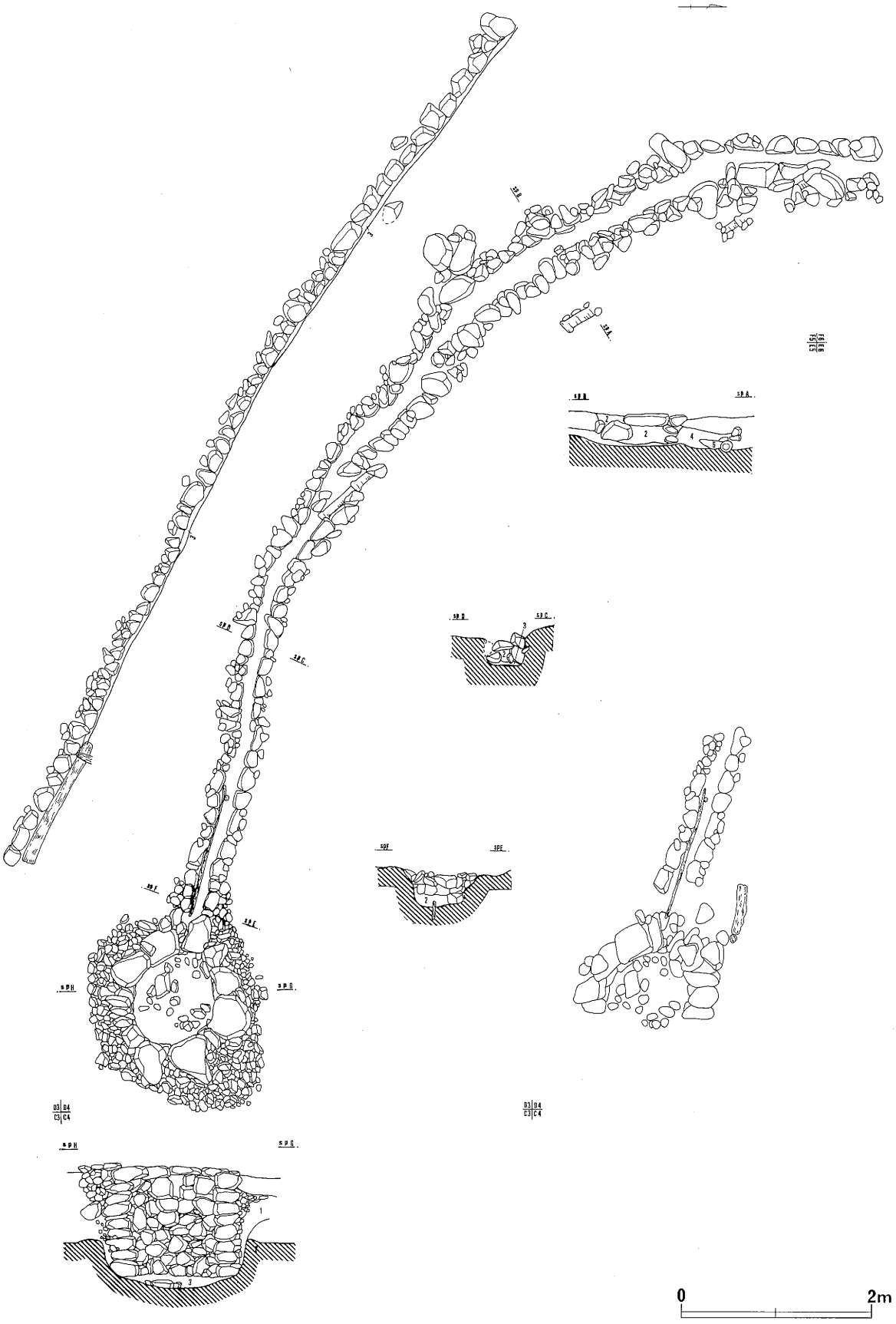
排水溝の方向がゆるく北に向かうことや蓋石が設けられていることから、建物があったのではないかと考えたが、確認は出来なかった。

何度か造り替えが行われ、井戸から約4.5m離れた地点では、土管を用いて排水溝を迂回させている。

また、石組みの排水溝の礫を取り除くとその下位から、平板で溝の両側を造った、排水溝があらわれた。溝の両側縁を形成する板材は、幅約20cm、長さ140cmある。下位から平板が内側に杭止めがされ対で出土した。南側の板は現状をとどめているが、北側の板は北側に倒れて現状をとどめていない。

時代は石組み、板材排水溝とも遺物が無く時代特定はできないが、板材排水溝は近代より古くは遡らないと思われる。





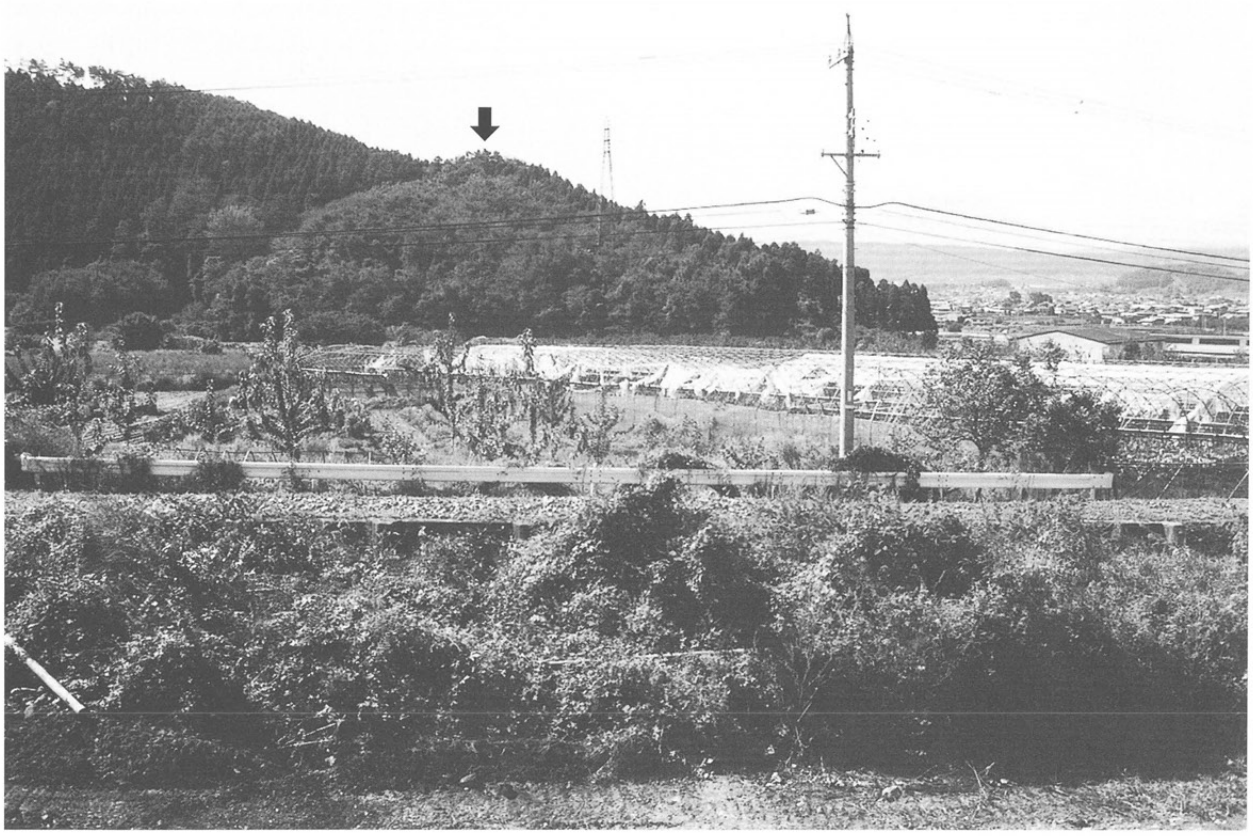
第43図　井戸・排水路

写真図版

図版 1

遺跡全景

調査区全景



金鎧山古墳遠景

高遠山古墳

図版３

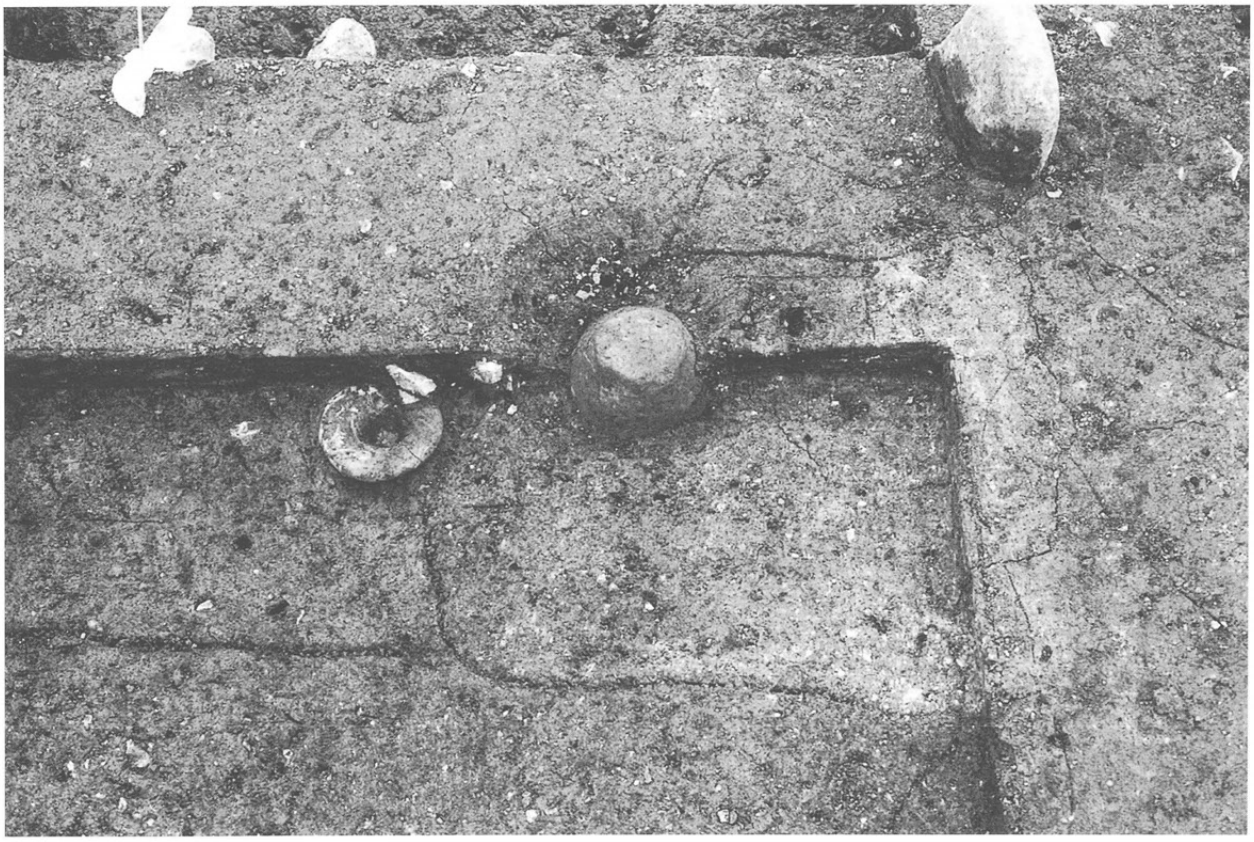
１・５号住居址

２号住居址

５号住居址

５号住居址炭化物出土状態

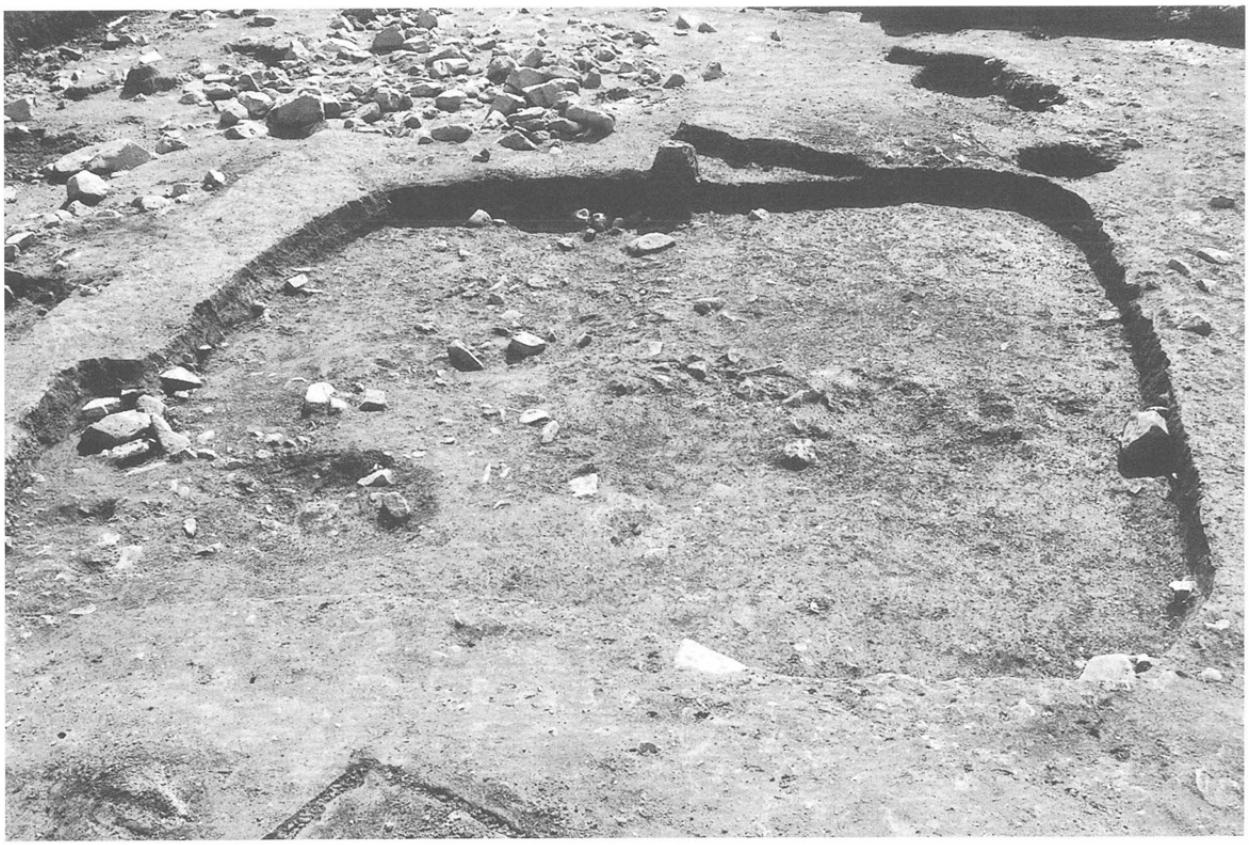
図版５



５号棚状遺構

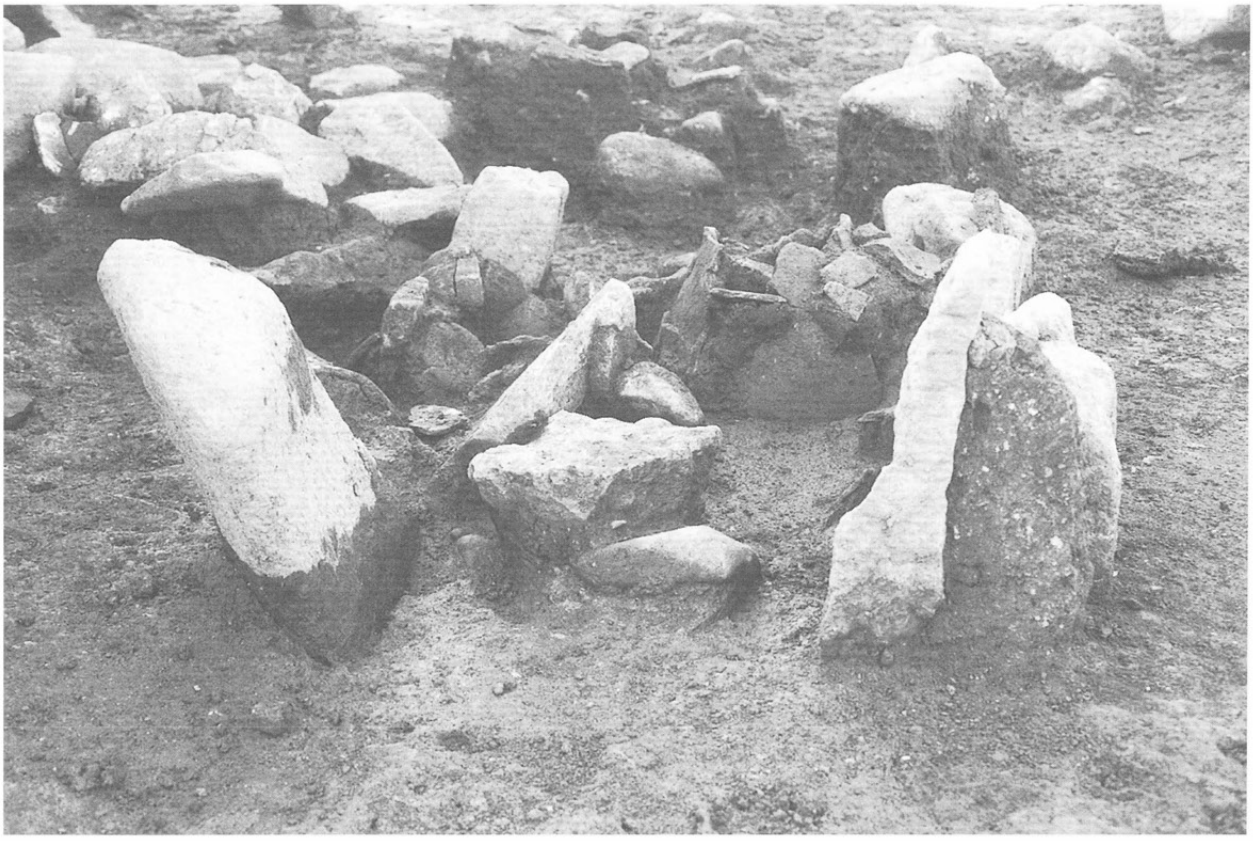
５号貯蔵穴の蓋板

蓋板取り上げ作業（チッソガスの注入）



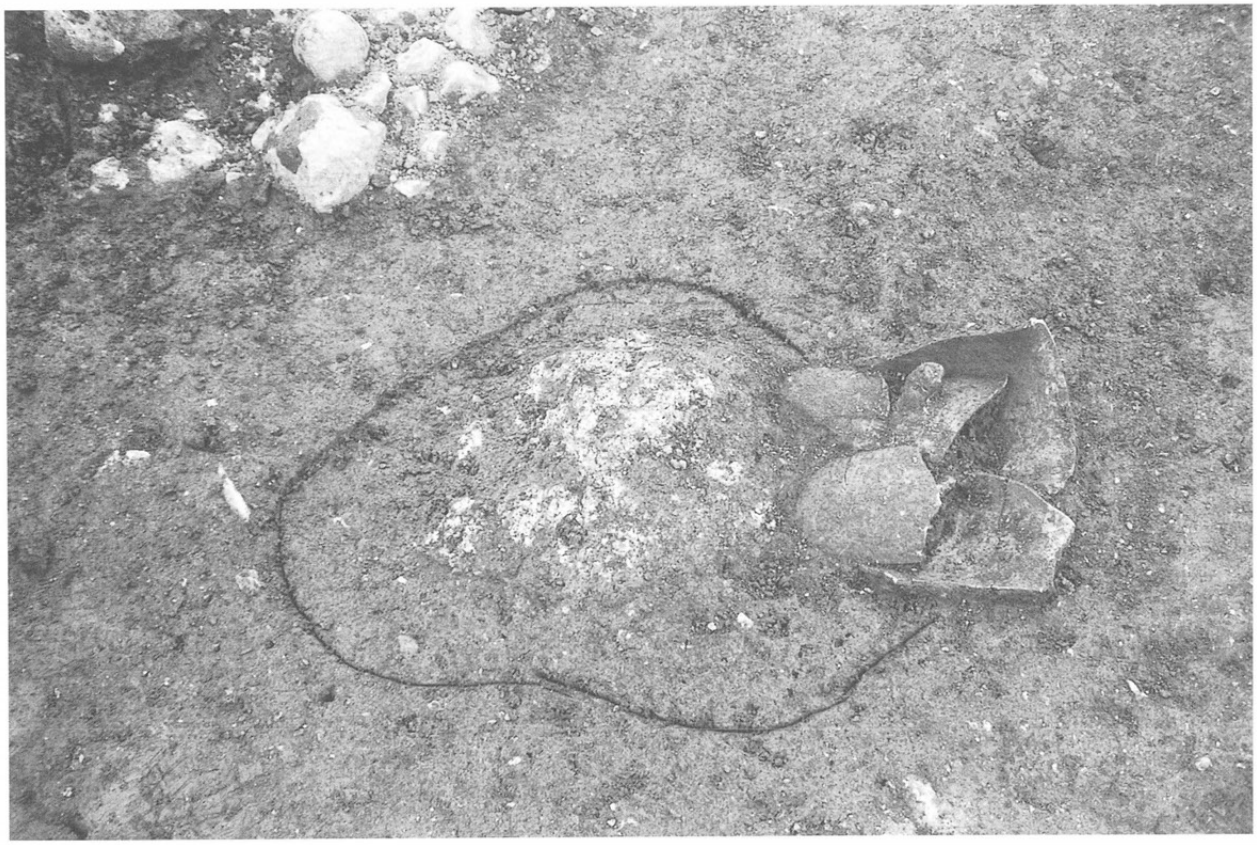
４号住居址

図版７

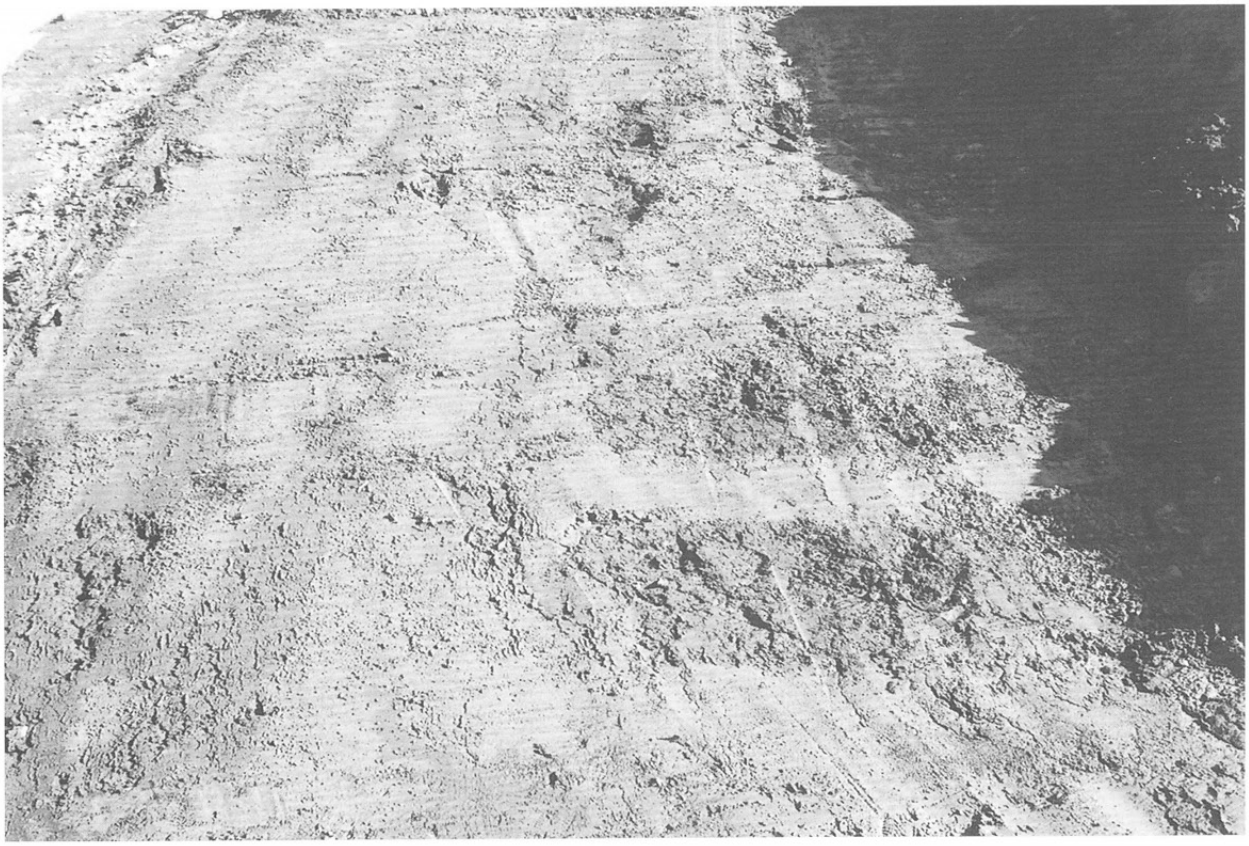


６号住居址かまど

６号住居址かまど

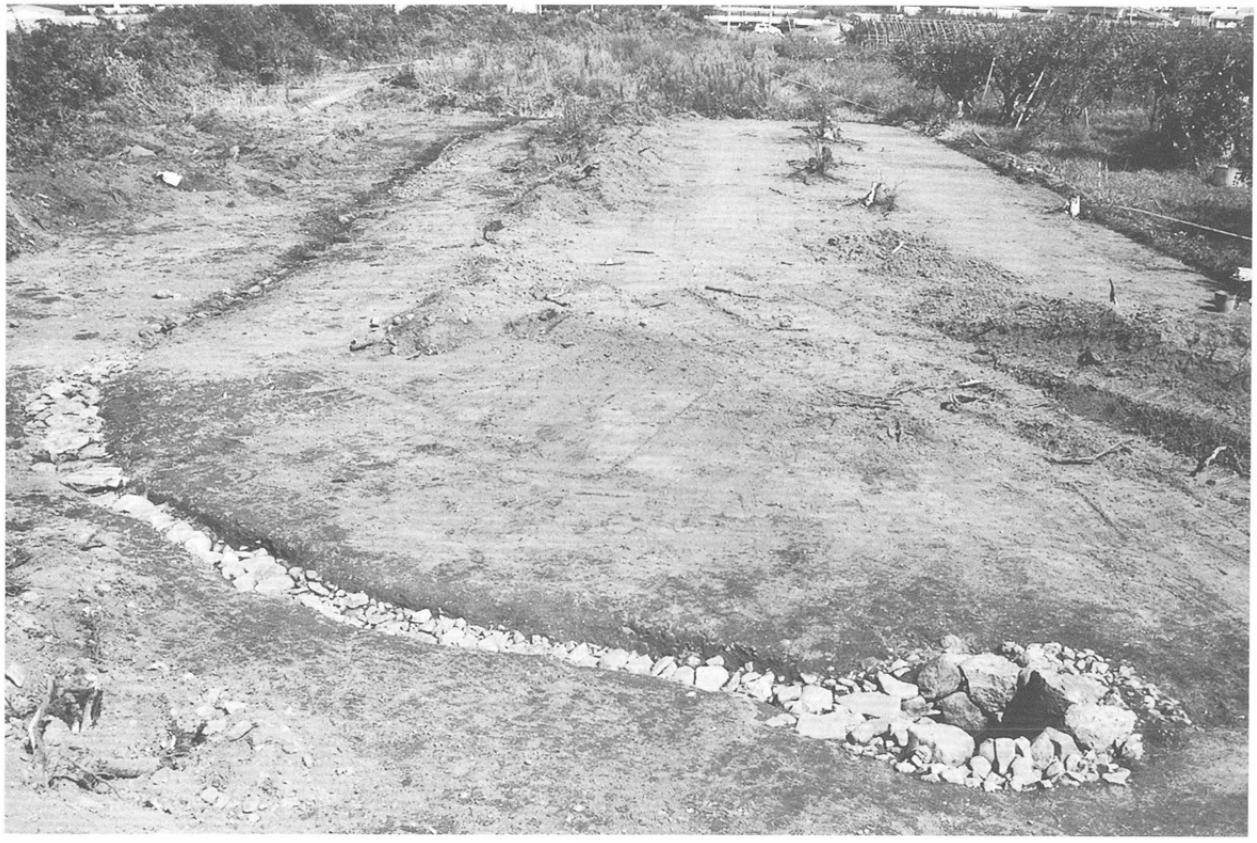


４号土坑

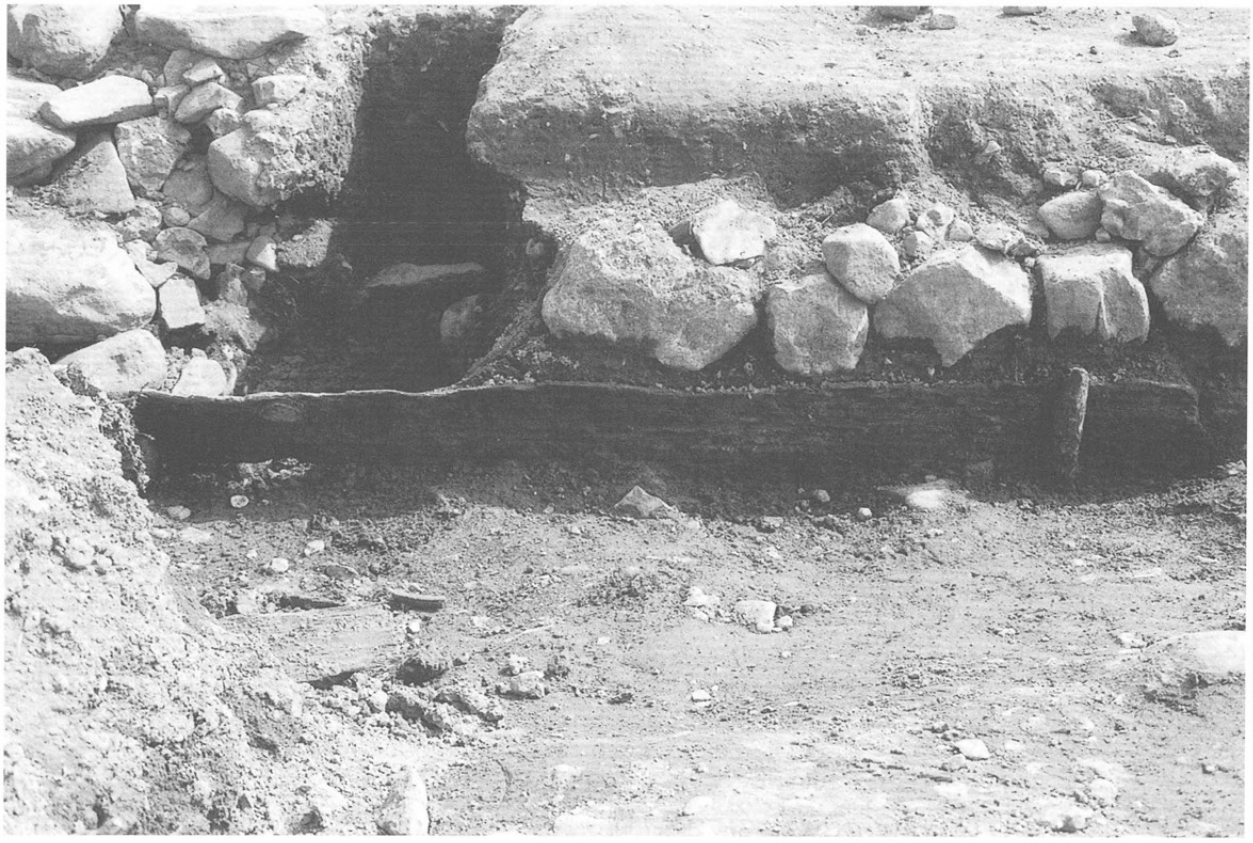


畝状遺構

図版９



井戸・排水路



木製・排水路

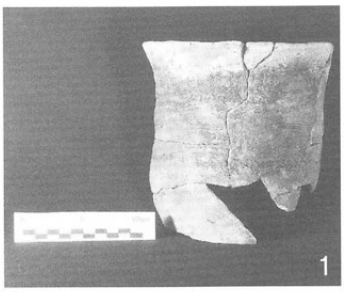
作業風景

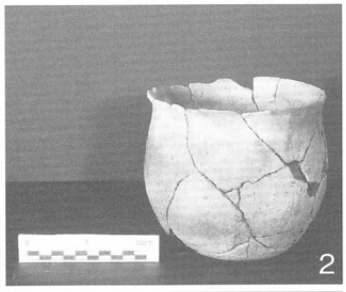
現地説明会

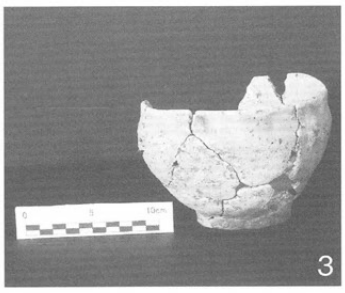
図版11

作業風景

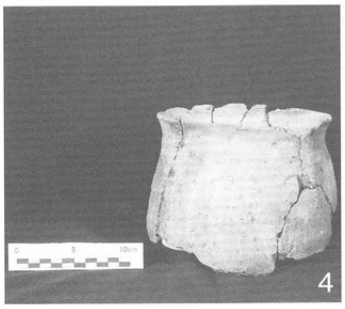
作業員全体写真


1


2


3

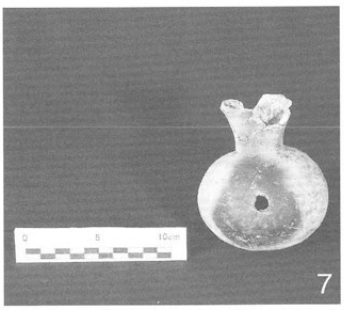
1
1号住居址

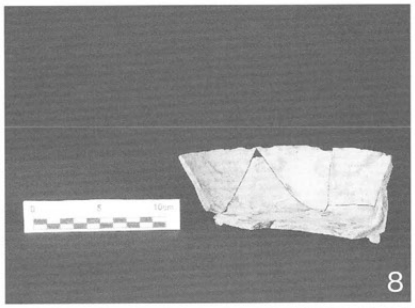

4

5

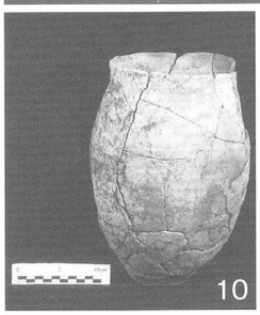
6

2～6
2号住居址

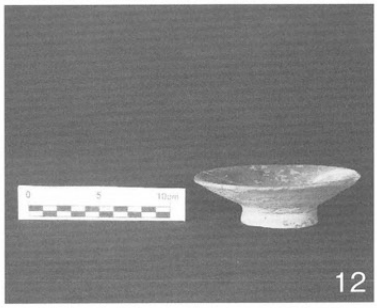

7


8

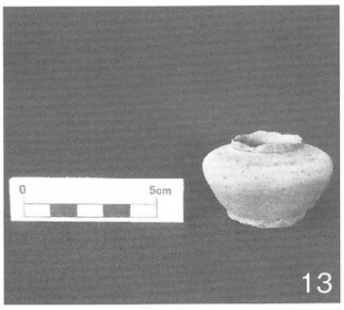
9

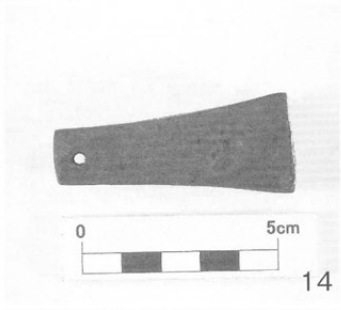

10

11


12

7～10
3号住居址


13



14

15

11～14
4号住居址

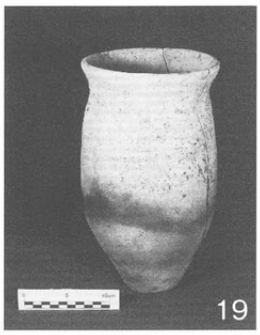
16

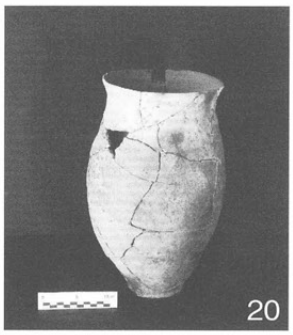
17

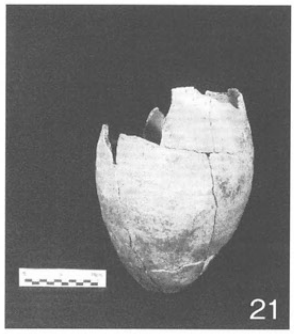
18

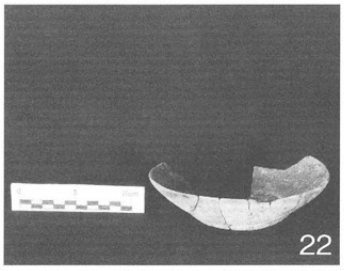
15～17
5号住居址

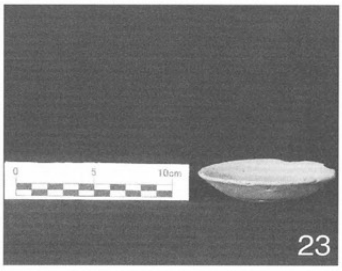
図版13







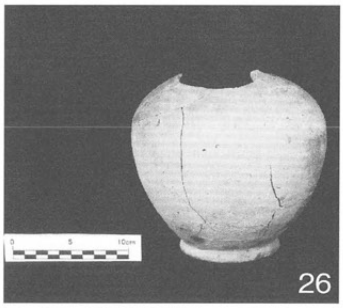




18 ～ 22
6号居住址

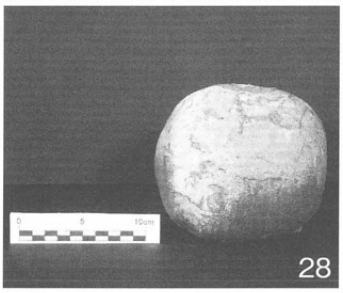
23
8号居住址

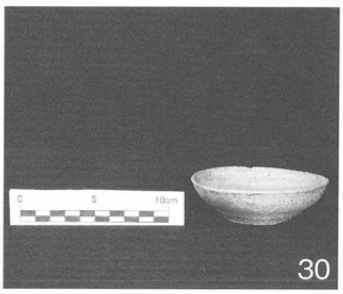
24
9号居住址



25 ～ 26
14号焼土

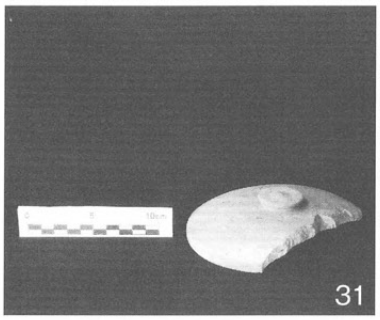
27
1号土坑

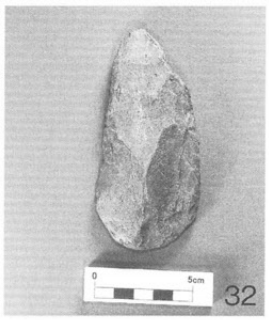




28
グリッド　よこへい

29 ～ 30
グリッド　杯

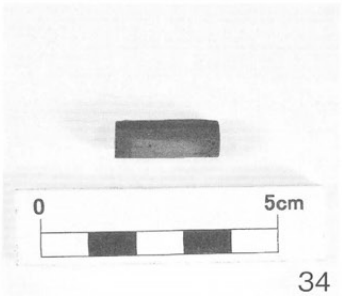


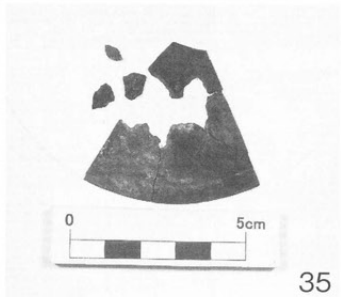


31
グリッド　フタ

32
グリッド　打製石斧

33
グリッド　銅製品





34
グリッド　管玉

35
グリッド　鏡

36
グリッド　馬の歯

あとがき

新野遺跡の発掘調査が始まったのは、盆明けの8月19日からであった。発掘面積からすれば、調査日数はかなり厳しいだろうと予想された。調査の結果、遺跡は縄文中・後期、弥生後期、奈良・平安時代のいわゆる古代の時期が重層して発見されたのであるが、縄文時代は泥炭層に埋没した状態で、遺構らしいものは確認できなかった。また、弥生時代も部分的に遺構が検出されたが、面的な広がりはみられなかった。

集落跡が面的な広がりをもって確認されたのは古代であった。それも調査区域の約半分は土地改良事業で撹乱されており、古代集落跡も河川の浸水で廃棄された状態で検出された。そのため、発掘期間は大幅に短縮されることになり、予定期間内に終了することができた。また、調査方法を委託方式に変え、調査の効率をはかったことも、期間短縮につながったと思われる。

ところで、今回の発掘区域は真引川右岸に沿った地点で、古代における河川と集落の関係について、恰好の資料を提供することができた。すなわち、この調査区域では集落を構成する住居址や土坑が、河川敷に接するほど近くまで作られていた。遺構の配置は不規則で、残存の状態はあまり良好ではない。冠水を受けるような場所になぜ住居などを建てる必要があったのだろうか。この集落遺跡にとって、真引川流域はかなり重要な意味をもっていたに違いない。

新野遺跡は間山扇状地の扇端部に広がる大規模な集落遺跡である。過去に調査された新野上東遺跡は日野小学校に所在する。調査ではこれといった成果がなかったようであるが、新野遺跡の北端をなす位置にある。過去に調査された新野遺跡は、今回の調査地点より東側の、真引川からやや離れた地点にあたる。ここでは縄文時代の遺物がまとまって発見されている。中世の埋納銭も多量に発見されており、注目される。

新野遺跡からの展望はすばらしい。西方の眼下に延徳沖とよばれる水田地帯が一望できる。延徳沖は千曲川の後背湿地であるが、まぼろしの「延洞湖」でもある。この延徳沖を囲んで、北側には西条・岩船遺跡群など、中野扇状地の扇端部遺跡が広がっている。西側は高丘丘陵上に安源寺遺跡などが所在している。南側は中子塚遺跡など、小布施扇状地の扇端部遺跡が立地している。延徳沖を囲む東側は新野遺跡である。

このように、延徳沖を囲む遺跡は比較的大規模な集落遺跡である。そして、これらの遺跡は延徳低湿地の水稲農耕に支えられていたと考えられる。新野遺跡では扇端部の豊富な湧水を中心に集落が形成され、さらに扇央部では畑作あるいは牧場の営みがあったと思われる。また、薪炭生産などで里山への依存も多かったに違いない。

中世になると、間山扇状地では建応寺など特異な遺跡がみられる。新野遺跡で発見された多量の埋納銭も特異である。関係があるかどうかは別にして、15世紀頃この新野を支配した武士の名が文献にみえる。例えば、1461年に新野郷の新野朝安が諏訪上社の御射山祭頭役にあてられている。頭役には莫大な銭が必要で、埋納銭はそのための備蓄銭という考えもある。1463年の高橋の合戦は、越後の上杉右馬頭と高梨政高が対抗した戦いである。この時、新野郷の新野朝安や大熊郷の大熊高家らは上杉に加担し、破れ滅亡した。これ以後、新野郷は高梨氏が支配する所となった。思うに、新野氏は古代の新野集落を基盤にした豪族の末裔で、中世の時代とともに武士化した豪族であろう。

以上、あとがきにかえて新野遺跡の所見を述べてみた。発掘調査から報告書の作成にいたる半年間であったが、これに従事していただいた調査団のみなさんには心から感謝申し上げたい。

（調査団長　関　孝一）

新野遺跡報告書抄録

ふりがな	しんのいせき
書名	新野遺跡
編集者	竹田保夫
編集機関	中野市教育委員会
所在地	〒383-00251 長野県中野市三好町１－３－19
遺跡所在地	中野市新野字宮下461-1 ～ 479-3
遺跡県番号	6539
遺跡位置	北緯36° 43′ 14. 53東経138° 22′ 32. 11″ 標高348m
調査期間	平成14年８月19日～ 11月22日
調査面積	2363㎡
調査原因	真引川改修工事に伴うもの
種別	集落跡
主な時代	縄文時代中・後期、弥生時代後期、奈良時代～平安時代
主な遺物	縄文土器・石器、弥生時代土器、奈良時代～平安時代土師器・須恵器
主な遺構	弥生時代・奈良時代～平安時代住居址、土坑、焼土
調査協力	㈱中野広域シルバー人材センター

新野遺跡

――真引川改修工事に伴う新野遺跡発掘調査報告書――

発行日　平成15年３月20日

発行者　中野市教育委員会

〒383－0025　中野市三好町一丁目３―19

電話　0269－22－2111

印刷所　ほおずき書籍株式会社

〒381－0012　長野市柳原2133―５

電話　026－244－0235